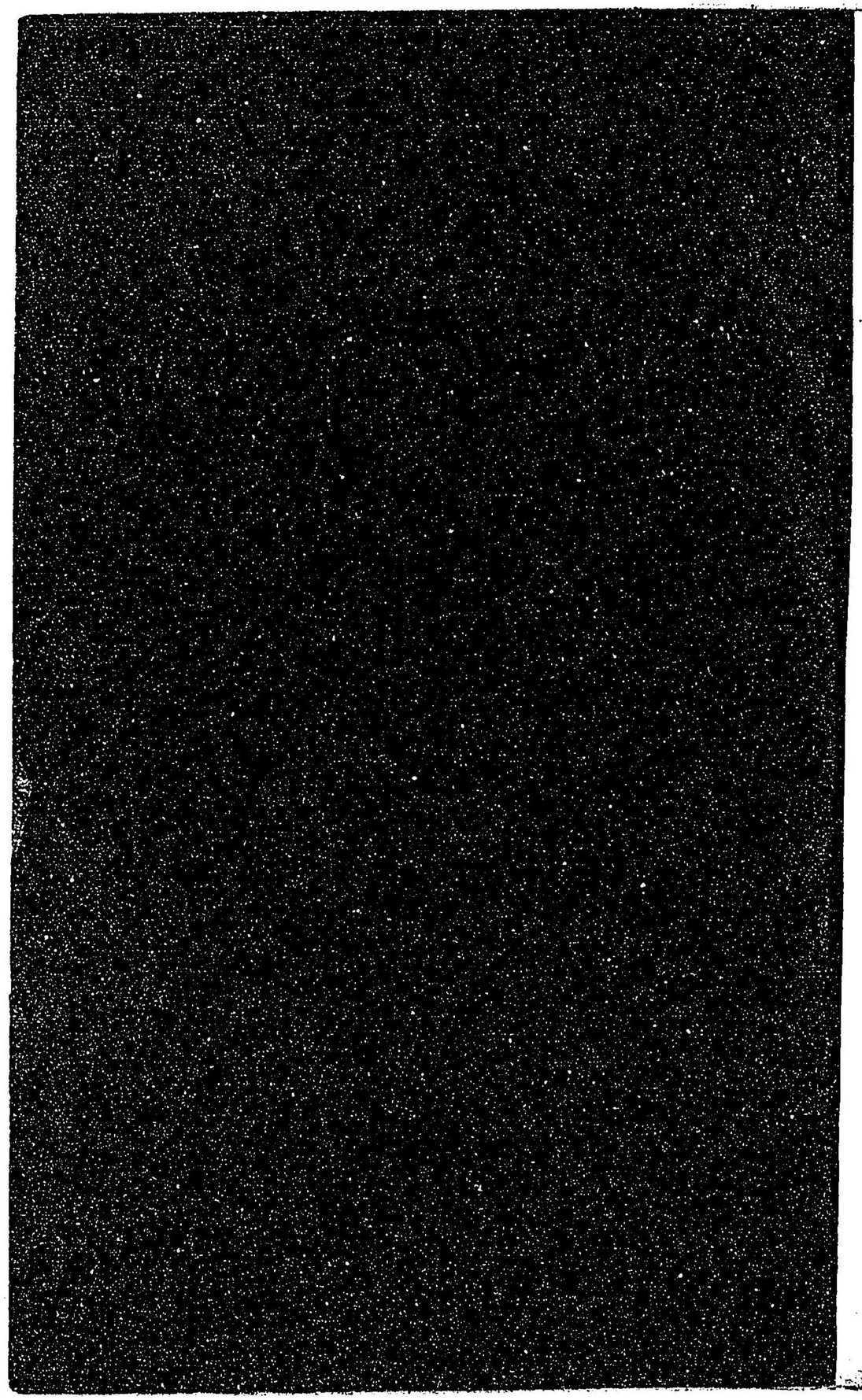
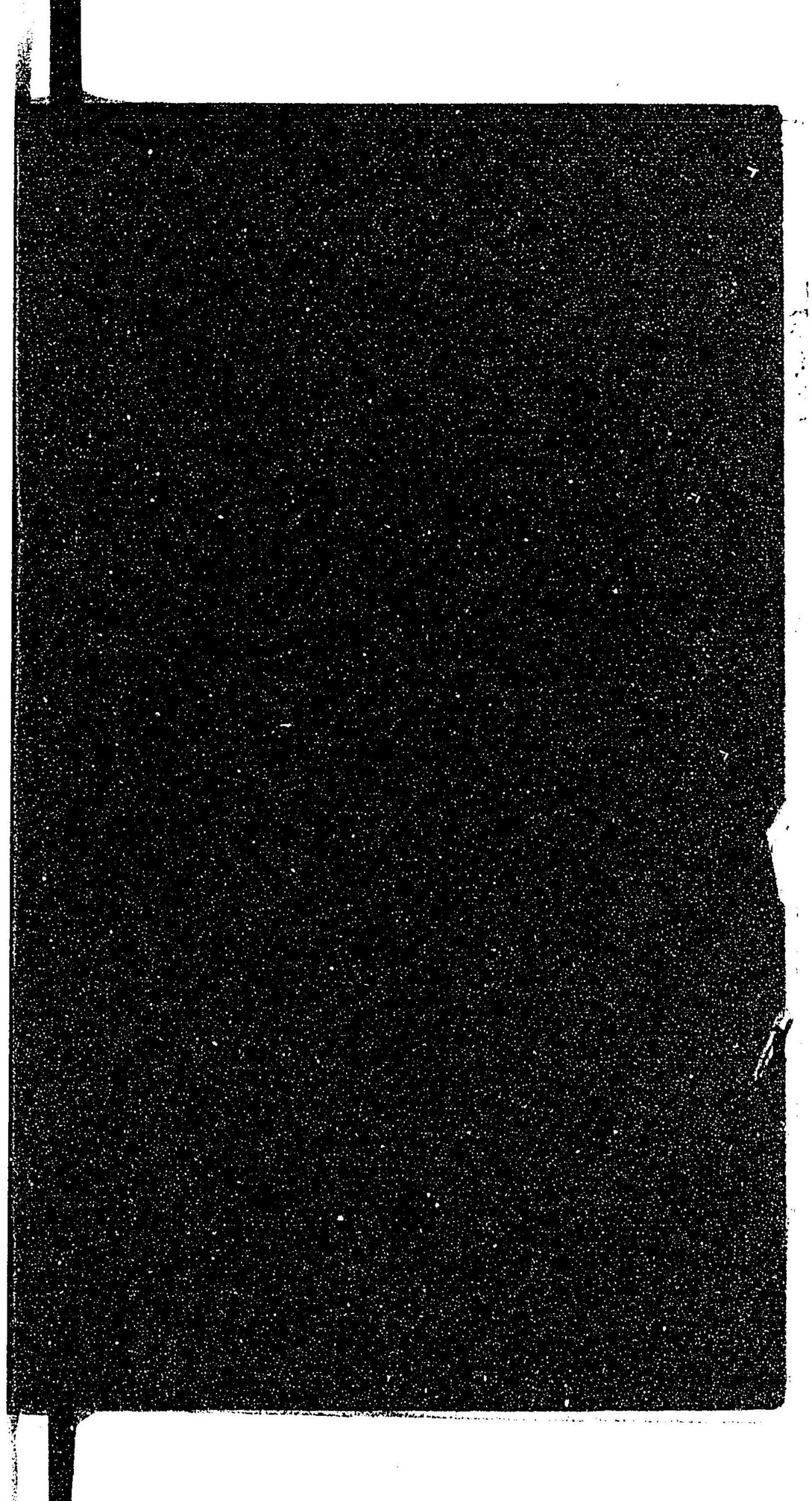
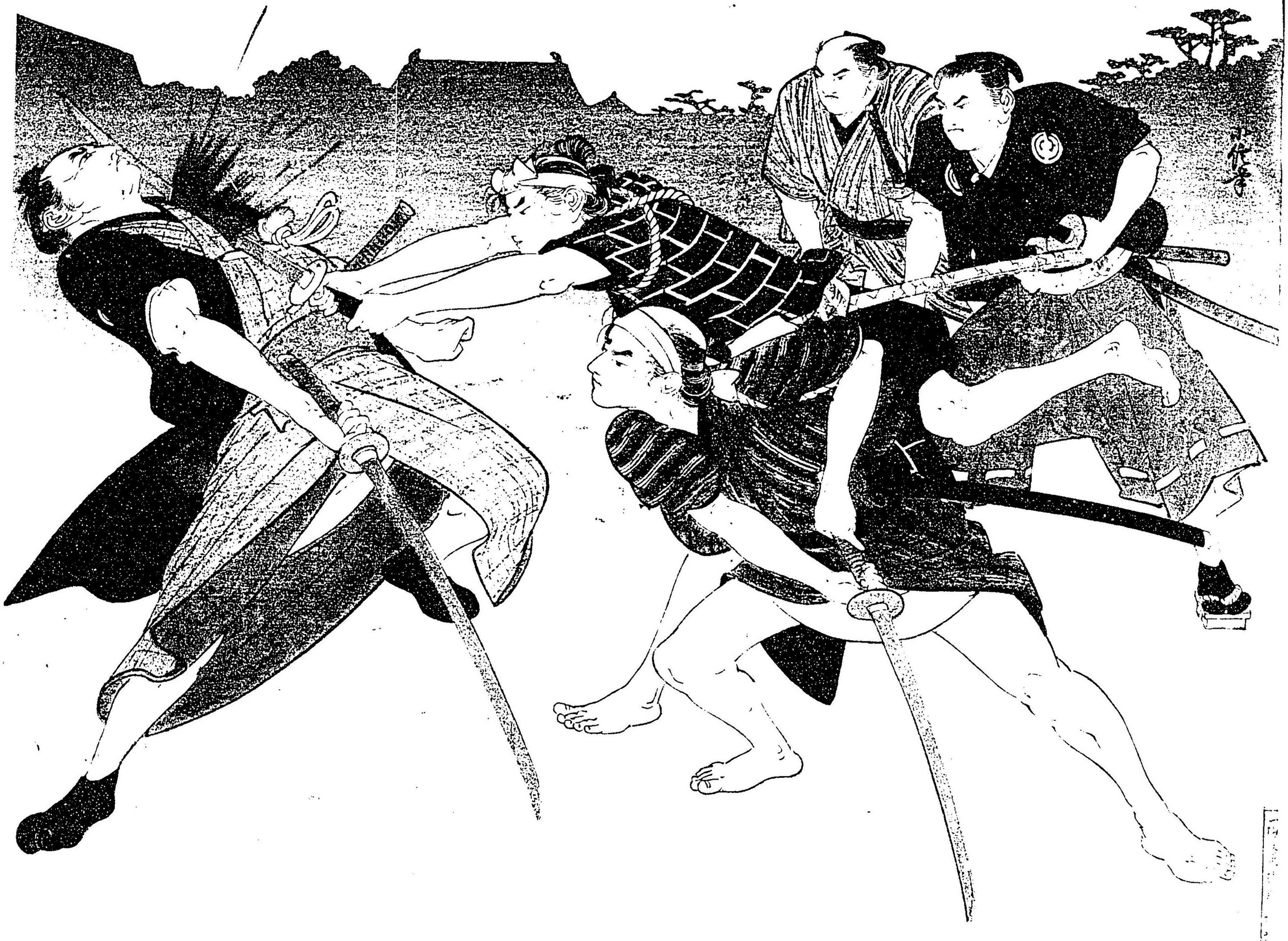
明治實録 我能違御門大仇討

廣澤當一講演

267
365







439
899

明治曾我

筋違御門仇討

廣澤當一講演
山田都一郎速記

第一席

先般明治曾我炭谷虎之助のお話を申し上げましたが、大層四方御愛顧諸君の御意に適ひまして、後編を早く出せ〳〵とのお催促を蒙り、演者身に取つて誠に有難く心得ます、就きましては本日より其後編を伺ひまするが、茲は前回に申し上げました六波羅裏門多聞町に口入屋渡世をいたして居りまする清水屋清兵衛と云ふ者が、大塚慶蔵より委細の話を聞いて、それでは水戸の御家來炭谷御兄弟に飽くまでお助太刀をせねば相成らぬと、忽ちの間に準備をいたし、表の方に飛び出しました。話頭一轉

宮川町鳥宗亭の熊江と申しまする藝妓が炭谷の敵山本羽太郎を一室に通しまして　熊江「旦那様、お久し振りでございます、先づ一口お召し上り下さいまし　羽太「イヤ、相變らず其方の寶意は嬉しいわい、我は土州に於て仔細あり、それが爲に三ケ年の間浪人をなし、彼方此方を廻つた末、この都の土地に來て居るが、不圖汝と馴染を重ね、夫婦約束までいたした間柄、そのお前の顏を見て酒を飲むのだから、此樣な嬉しいことはないわい　熊江「あれマア旦那樣、それは眞實でございますか、妾を喜ばして置いて、後から然うでないなどゝ仰しやるのではございませぬかいな　羽太「何の〳〵嘘を言ふて宜いものか、拙者はお前を心から好いて居るわい」と固より好いた女のことでございますから、氣を緩して飲み始めまする、熊江は心の中に、何でも酒を澤山飲まして置いて、炭谷の御兄弟に敵討をさせやうと云ふ積りでございますから、頻りに酒を侑めます、それとは知らぬ山本羽太郎は、ドン〳〵盃の數を重ねますと、一廉な大酒家でも充分に飲んでは醉はずに居られない、つひに眼を据ゑ、口の端を泡だらけにして　羽太「エーイ、熊江、アヽ、何うも近頃にないほど酩酊に及んだ、何とも云へぬ好い氣持だわい　熊江「旦那樣、お醉ひあそばしたら御結構でございます、併し貴方は是れまで度々妾を女房にして遣らうと云ふお話でございましたが、近頃は一向お妾が見ないものでございますから、妾も大きに案じて居りました、お約束が間違ひは致しませぬか　羽太「ハヽヽヽ、何を申すのぢや、武士たる者の申したことに違ひさうなことはないわい、飽くまで汝を女房にいたす積りぢや　熊江「左樣でございますか、誠に有難うございます、それでは妾も最う間もなく年が明く身の上でございます、今晩此所で差向ひではございまするが、祝言の眞似形を一ッお頼み申します　羽太「ア、宜い〳〵、何うせ夫婦になるのだから、如何にも祝言をして置いて遣らう、盃を持

ていい　熊江「ところで旦那様、只今はお酒の上でございますから、普通のお盃で酌み交しまするとと、後にさう云ふことがあつたかなどゝ言ふやうなことがありましては、實に妾も頼りなうございます、どのくらい酔つて居らつしやつても必ず忘れぬと云ふ大きなお盃で祝言を願ひます　羽太「ム、、それは面白からう、然らば大きな盃を持つて參れ　熊江「宜しうございます」と熊江は立ち上つて勝手元に參つたかと思ひまするとと、直ぐに彼是れ五六合も這入らうと云ふ丼鉢を一ッ持つて參りました　熊江「旦那様、是れでお盃は如何でございます　羽太「ヤア祝言の盃は丼鉢とは妙ちや、是りやア何うも愛つて面白い、然らばこれに酌げい　熊江「旦那様、これに波々と酌ぎますから、何うぞグとお飲み乾し下さい、妾もまた波々と注いで戴きまして、美事にお爨れを致しますることでございます　羽太「ム、、汝もグッと飲み乾すが宜い　熊江「承知を致しました」と熊江はポン〳〵と手を叩いて、其

所へ女中を招きました　女中「熊江さん、何か御用事でございますか　熊江「ア、熱いお銚子を持つてお來でヨ、些と多分に要るのだから、二三十本も持つて來てお呉れ　女中「オヤ〳〵、大層澤山にお入用でございますね」と女中は立つて行きましたが、間もなく熱いお銚子をドン〳〵其所へ持つて來る　熊江「サア旦那様、お酌を致しませう　羽太「宜し〳〵」と山本羽太郎は片手に丼鉢を受け、之れに波々と酒を酌がせまして　羽太「ア、是れで宜い〳〵、芽出度い〳〵」と其儘口に宛行つて、もう酔ふた上でございますから、是れが所謂無茶飲みと云ふのでございまして、眼を瞑りながら息も吐がずにグッと大盃を飲み乾しました、熊江は笑を含みまして　熊江「ア、旦那様、嬉しう存じます、それでは妾も頂戴致しませう」と優しい手で丼鉢の盃を受けまする、山本は銚子を取り　羽太「サア拙者が酌いで遣らう、あゝコリヤ〳〵溢しては可かぬぞよ」と波々と酌ぎ込んだ、熊江は之れを見まして

熊江「旦那様、もう是れで宜しうございますか　羽太「ア、それで宜い〳〵、グッと一ッ息も吐がずに覆けて見よ、左すれば汝も拙者の女房として耻かしからぬわい　熊江「左様なれば御覧下さいまし　羽太「ア、グッと一口にやれ、米の水だ、溢すことは罷りならぬぞよ」と云ひながら自分は散々に酔うて居るものですから、口は利いてをれど眼が開かない、八分通り眼を塞いで饒舌つて居りまするから、此方は流石稼業柄、僅かの隙を考へて、お酒をパッと横に轉しましまひ、少しばかり殘つたやつを口に宛行ひ、キウッ〳〵と鼠鳴をしてその盃を飲み乾し　熊江「旦那様、此通りでございます」と聞いた山本は偶爾と眼を開けて　羽太「ヤア汝は中々何うも天晴れぢや、それでこそ拙者の女房になれるわい、ア、芽出度い〳〵・　熊江「是れで夫婦のお約束が出來ましてございます　羽太「如何にも左様ぢや、併し熊江、此のくらゐ酔ふと最う此上は可けない、隣室に床を取れい、拙者は寢るぞヨ　熊江「

旦那様、恐れ入りまするが、今晩は一應お歸りを願ひます　羽太「コリヤ、祝言の交盃までして置いて、直ぐに歸れとは薄情ぢやないか　熊江「左様ではございますが、何うか此點のところはお聞譯下さいまするやう、年に一度の建仁寺町戎さんの御祭日、紋日のことでございますから、今宵はお客もまた多分にございます、それに貴方をお泊め申しまするとと、妾はお側に附いて御介抱を申し上げたい、左すれば親方の勤めが出來ぬやうになりますから、今晩は一度お歸り下さいまし、その代りに又明晩はお早うからお出でを願ひます、また緩りとお相手を仕ります、何うか妾を助けると思つてお歸り下さいまし　羽太「ム、左様か、勤の身のことだに依つて、それも尤もぢや、ヨシ〳〵承知をいたした、然らば身共は是れから歸ることにいたさう、あゝ目的の違つたことではあるわい」と其儘山本は立ち上り、跚跚り跚跚の跟と庭先に下り、戸外に出やうと致しますから　熊江「旦那様、お

危なうございます　羽太「ナーニ氣違ひをするな、酒の二升や三升飲んだと云つても、ハ、、、土州の浪人山本羽太郎、滅多に氣違ひはないわい　熊江「左様でございますか、併し旦那様、何うか裏からお出ましのほどを願ひます　羽太「何故表から出られないのちや　熊江「戸外は大變に人が通つて居ります、そのやうな所を貴方がそんなお足許でお歸りになる途中、若しも他人が貴方に突き當り、萬一お怪我でもなさるやうなことがあつては大變でございます、何うぞ裏から徐々とお歸りのほどを……　羽太「ハ、、、、左様か、斯くまでに此方の身を思つて呉れるか、それでこそ夫婦の情愛だ、然らば身共は裏口から出ることにいたさう案内をせよ　熊江「宜しうございまする」と優しい手で山本の手を取り、下駄を履いて裏手の方に立ち出で、裏口をガラリと開けまして　熊江「サア旦那様、此所からお出まし下さいまするやう、松原磧は石が澤山にございますれば、お足下がお危なうございます、能く氣を注けてお行であそばせ　羽太「あゝヨシ〳〵、承知をした　熊江「あの山本羽太郎の旦那様、明晩は必ずお來でを願ひます　羽太「そりやア必ず來るわい　熊江「山本羽太郎の旦那様、眞個に變つて下さいますな　羽太「それは分つて居る　熊江「それでは安心を致しました、山本の旦那様、何うか間違ひなく明晩も……　羽太「ア、來るとも〳〵、一旦來ると云つた以上には武士の言葉に二言はないわい　熊江「それでは山本の旦那様……　羽太「あゝコリヤ〳〵、さう汝のやうに山本の旦那々々と言つて呉れては、些と差支へることがある、一度言へば事が足りて居るものぢや、餘り大きな聲で姓名を言つて呉れるな　熊江「誠に恐れ入りましたけれども餘り貴方のことを思ひまするに附けて、其の思ふことが自然口に出るのでございます　羽太「ア、そりやア尤もぢやが、マア言はないやうにして呉れ　熊江「左様なら山本の旦那様……　羽太「コリヤ、まだ其方は申して居るぢやないか　熊江「オホ、、、

また迂かり出ました、何うぞお免しを願ひまする」と云ふのは何うかと言ふと、炭谷兄弟が松原磧に待つてお居でになる、今この熊江が酒を飲まして、充分に山本羽太郎に酩酊をさせ、此所から送り出しまするほどに、之れを合圖にお準備をあそばして、必ずお討ちなさるやうと、口には言はねど心の中、表面は飽くまで山本に心を綏して居るやうに見せかけながら、それとなく別を告げまする、それとは知らぬ敵山本羽太郎は熊江に別れまして、一歩は高く、一歩は低く、飄々跟々として千鳥足、松原磧に指し掛つて參りました、ところが先刻より此所に出張りまして、今や遲しと待ち受けて居りました炭谷兄弟が、パッと其所へ立ち現はれ、着て居りました羽織を後に脱ぎまするとと下は武士の嗜む黒羽二重、お家の定紋附いたる御紋服、後鉢卷玉襷、袴の股立高く取上げ、一刀をスラリと引抜いて七之「ヤアヤア土州の浪人山本羽太郎、暫らく待てッ、我こそは常陸の國

は茨城郡水戸城の御主、御高三十五萬石從三位水戸宰相齊昭卿の御家來にいたして、炭谷七之丞、同苗忠三郎と申す者であるが、過ぎし慶應元年六月六日の夜に、我父炭谷虎之助が汝の爲に當磧に於て果敢ない最期を遂げられた、因て我々兄弟が其方を討て父の無念を晴さんと、種々に盡せし千辛萬苦は幾ばくぞ此所で遇ふのは天なるか時なるか、天時一時に來つた此場の有樣、サア逃がしは遣らぬ、覺悟に及べい、弟お前は必ず助太刀をするなヨ」と先づ兄七之丞が身構へに及びました、すると敵も寝耳に水でございますから、一時はパッと驚いたが、忽ち氣を取直し、足を止め、沈と炭谷兄弟を打眺めまして羽太「ヤア、如何にも炭谷虎之助は此の山本羽太郎が是れなる松原磧に於て討取つたものに相違ない、去りながら我を敵などゝは小賢しき其の一言、成らば手柄に斬つて見よ」と云ひながら、着て居る羽織をパッと後に脱ぎ、襦袢一枚の肌脱ぎとなり、股立高く取

上げ、一刀の鞘を拂ひまして　羽太「サア覺悟に及べい、「反討だ」

とパッと兄弟を望んで斬込み來りました、此方は七之丞が敵を討たうと云ふ一心でございますから、チヤリン、と之れを受けて、隙かさず斬込んで參ります、けれども敵手は其頃日本一と云はれたほどの豪傑、酒には醉うて居りましても、中々自由にならばこそ、働けば働くほど酒の醉が醒めて來て、氣丈夫に相成り、チヤンと腕が定まつて參りまするから、中々敵討どころの騒ぎではない、凡そ十四五合も擊闘つて居る間に、痛はしや七之丞は天帝に四五ヶ所の手傷を受け、血がタラ〳〵と流れまする、其の血が汗止の鉢卷を越して兩眼に流れ込まうとする、それが爲に生れも附かぬ盲人同樣と相成りましたが　七之「ウヌ親の敵、如何にもして討取らねば相成らぬ」と、必死になつて働いて見ましたが、何がさて敵を討つことはさて措いて、看る看る間に反討になりさうでございます、弟忠三郎は之れを見まし

て　忠三「お兄上、貴方は助太刀は罷りならぬと仰しやるか、其のお姿を眺めまするとは、何故私は高見で見物が出來ませう、暫時の間休息をあそばせ」と兄を止めて置いて、弟の忠三郎が其所に立現はれ　忠三「ヤア〳〵敵山本羽太郎、我こそは炭谷の次男忠三郎年國なり、親の敵だ、覺悟に及べッ」と斬込んで參りました、そも〳〵此人は千二百石のお家に生れた御舍弟ではございまするが、親に勘當をされまして、國表を飛出し京都に來つて不思議の縁より、二宮町鳥屋金助と云ふ袁彦道を渡世にする遊人の若い者と相成り、水戸の忠三親方と一時賣出した身の上でございます、さう云ふ遊人でございますから、何うしても氣が荒い、勢ひよく斬込んで見ましたが、初めは忠三郎も中々元氣が好かつた、なれどもさう腕に覺のある人ではございませぬから、敵の爲に追々と斬り捲くられ、數ヶ所の手傷を受けまして　忠三「ヤア殘念である、我は親の此の世に在る間に

不孝をして勘當され、其の親が人手に罹つて敢なき最期を遂げられたのも、人から聞くまで知らず、迂濶々々其日を送つたが何でも敵討をして不孝のお詫をいたさんと、思ひし甲斐も情なや、現在敵に遭遇ひながら、討つこと相叶はず、阿容々々反討に遭はねば相成らぬか、さぞお父上は草葉の蔭より不孝者奴と お歎きなされて居るであらう、今此の場合に我々兄弟を憐み給ふ一佛一社も御坐さぬものであらうか、何卒我々を不憫と思召し、敵に一太刀たりとも報はせ給へ、南無摩利支天尊……」と武士の念ずる神様を祈りましたが、一向御利益のあるやうな氣色がございませぬ、今は是れまでなりと齒を咬緊り、苦しながら也も山本羽太郎を敵手といたし、一生懸命に闘つて居りまする此方は助太刀人の大塚慶藏と清水屋清兵衛でございます、先刻から炭谷兄弟が通れ敵に名乘りを掛け、討ちに掛つたことは掛つたが、今は何うやら此方が危くなつたものですから 慶藏「清水

屋 清兵「ヘイ 慶藏「何うぢや、汝は女房と水盃をして來たさうだから、早く出て助太刀をいたさぬか 清兵「ヘイ旦那様、貴方は何うでございます 慶藏「何うも俺の手くらぬぢやア叶はぬわい 清兵「ヘイ、肝腎の貴方でも叶はぬやうなら私には尚更でございます 慶藏「なか〳〵彼奴の手は達者らしいから、拙者が出たところで此方が討たれる分でも、敵手を討取ることは出來難からう、アヽ、困つたものだ、何うしやうか、恐圖々々して居ちやア御兄弟が反討に遭ふかも知れぬ」と大塚慶藏も以前は水戸の家來でありましたが、今は浪人をいたし、宮川町の松原下つた所に町道場を開き、多くの門弟を持つて居りまするが、いま山本羽太郎の腕前を見まして自分が向つても迚もこれには叶はぬものと思ひましたから、助太刀も成り兼ねまして、何うかして炭谷御兄弟を助けたいものだと、たゞもう胸をドキ〳〵させて居りました、之れを見た清水屋清兵衛は 清兵「旦那様、貴方も左様なら矢

張り私も其通りです、先方が弱いと助太刀も仕易うございますが、斯う強いとして見りやア迂つかり助太刀が出來ませぬ 度盛「其方は何うも助太刀に出て來て、今更引込むとは意氣地が無いちやアないか 清兵「旦那様、さう仰しやる貴方も同じことではございませぬか 度盛「拙者は拙者ぢや 清兵「御冗談を仰しやいますな」と云つて居りましたが、其間に忠三郎の危ない狀態を見て取り兄の七之丞も共に立向ひましたが、何しろ敵は腕前の確かりした奴でございますから、左右より兩人の者が掛りましても、兄弟の方が何うやら危なくなつて參りました、サア大塚慶藏は堪らない 度盛「待てヨ、是りやア炭谷御兄弟には濟まないが、此の場所より敵を逃がしてしまはぬことには、御兄弟のお一命は助からぬ、何か好い工夫はあるまいか」と差俯向いて思案の結果忽ち何か胸に浮んだものと見ねまして、夜中を幸ひ此方の小暗がりから、天にも轟く大音聲 度盛「ヤア〳〵それなる土州の浪人

山本羽太郎、我こそは京極蛸藥師に道場を開き、汝の爲には師匠に當る今辨慶の圭助と申す者であるぞよ、汝は炭谷虎之助殿を手に掛け殺した、ところで今其の方の御子息が親の敵を討たんと向はれたからには、尋常に討たれて死ぬるが武士の道、然るに少々の腕前を力として兄弟を反討にいたさうなどゝは武士の作法を知らぬ犬侍、用捨はならぬ……ヤア〳〵 炭谷の御兄弟此の今辨慶の圭助が敵の首を討つてお渡し申さん、御心配をあそばすな……山本羽太郎、如何に師匠とは云ひながら、武士の道には換へられぬ、其方の首を討つから覺悟に及べい」と呼はりました、山本は之れを聞いて 羽太「ヤアお師匠が斯樣な所に入來つたとして見れば、如何なることがあつても師匠に向ふべき及はない、七尺下つて師の蔭を履まずと云ふことがある、此奴等兩人を反討にして遣らうと思つたが、師匠を向ふに立てると云ふことは相成らぬ、殘念ながら此所は一先づ逃げぬければな

らぬわい」と計略に懸つた山本羽太郎が刀を携へたまゝ、パッと一生懸命に其場を逃げ出しました、大塚慶藏は胸撫撫り慶藏「ヤレ〳〵、我の謀計に懸つて逃げ出したか、是れで御兄弟のお一命は助かつたわい」と眺めて居りますと、此方は清水屋清兵衛でございます、敵はドシ〳〵逃げ出したものですから、後から追駈けて參りまして清兵「ヤーイ、敵山本羽太郎、暫らく待てい、我こそは六波羅裏門多聞町に住居をして口入屋を渡世にいたして居る清水屋清兵衛と云ふ者なり、義に依つて炭谷御兄弟に助太刀をいたさんと、此所に參つて居るぞよ、逃げるは卑怯の至り、取つて返して勝負をせよ」と呼はりますと、敵は偶爾と足を止め羽太「何をッ」と後を振り向きまするとと、清水屋清兵衛もピタリと足を止めまして清兵「是りやア可けない、逃げるから追駈けるものゝ、敵手の奴が踏み止まつて後を向くとは險呑な奴だ」と云つて居る間に、敵はドシ〳〵逃げ出しまする、其

後から又もや追駈けながら清兵「敵、待てッ〳〵」と呼はるものでございますから、山本羽太郎は偶爾と足を止め、此方を斯う振り返りまする、清水屋清兵衛も踏み止まり、萬一敵が向つて來たならば、一生懸命に逃げ出さうと構へて居りましたが、斯う云ふ助太刀人は一向力になりませぬ、到頭此の場所に於て敵は逃げてしまひました、そこで清水屋は後に取つて返して來る話頭一轉大塚慶藏は炭谷兄弟の側に進み寄り慶藏「ア、貴君方は實にお氣の毒な次第、私も助太刀に參りましたが、一刀もお助太刀を仕らず、却つて敵を逃がしたとして見れば、或は敵に味方をする奴と思召すかも知れませぬが、決して左樣ではござらぬ、あの狀勢なら我々ごときがお助太刀申しても、到底お討たせ申すことは罷り成らぬ、棄て置けば貴君方が反討にお遭ひなさると心得たから、實は今辨慶主助先生の名を名乘り、故と計略に掛けて逃がしたやうな譯でござる、必ずともに悪く思つ

ていたした事ではない、炭谷の御兄弟、何うぞ御勘辨に預りたい」と言はれた兄弟は、刀を杖に立ち上り　七之「ア、大塚氏、何故其許のお計略を無理と思ひませう、折角敵に遇ひながら、未だ討てぬと云ふのは、我々の運の來らざる所である、致方がござらぬ、其許が其の計略を用ゐ下されたから、幸にも我々は助かりました、左なくば敵の爲に反討に遭ふは目の前、斯うして一命さへあるならば、また時と時節で討つことも出來まするが今此所で反討に遭つて見れば再び回復の出來ない話、ア、其許の御親切は千萬辱なう存じまする」と七之丞は苦しげながら血眼を見開き、謝辭を述べまする、之れを聽いた大塚庭藏は、

庭藏「ア、能くこそお聞き分け下された、千萬辱ない、兎にも角にもお一命に別條がなうてお仕合でござる、何よりも身の養生が肝腎、我道場まで御案内を仕らう……清水屋　清兵「ヘイ　庭藏「大儀ながら其方は御舍弟を肩に掛け、我と同道に及べい　清兵「承知を仕りました　庭藏「七之丞殿、貴方は手前に縋つてお來であそばせ」と大塚、清水屋の兩人は炭谷兄弟を勞はり、松原磧を後にいたし、スタ〳〵と宮川町松原下る大塚の宅に歸つて參りました、斯くて翌日に相成りますと早速最寄の醫者を聘き、傷の手當を致しまする、清水屋清兵衛も一時は我家に歸りましたが、直ぐ再び出て參り、兄弟の側に附添ひまして、彼だ斯うだと介抱を致しまする、すると運が好かつたか、程なく弟の忠三郎のみはチヤンと傷が全快を致しました、さて癒つて見ますると、何でも敵はまだ洛中に居るかも相分らぬと云ふので、以前の通り飴賣と相成り、飴の荷物を肩に擔いで　忠三「飴の中からお多福が飛んで出る、お多福が嫌なら金時は何うぢや、敵山本は何時時出ることやら」とそれまでは言ひませぬが、チンチラ〳〵と鉦を叩いて、千二百石のお家に生れた御舍弟が毎日飴賣に廻つて居りまする、然るに兄の七之丞も漸う傷が癒りました、けれど

もそれが少々眼に來まして、不幸にも眼病と相成り、殆んど何うも自由が叶はぬやうな有樣になつたものでございますから、最寄の眼醫者に乞診り、日々養生をいたして居りました、其の甲斐あつて近頃では些と快い方でございますから、もう何うやら戸外にも出られる、今日は一度其邊あたりを見物旁々醫者の許に行つて來やうと、七之丞は身準備をいたし、ブラリと大塚の道場を立出でまして、四條礫まで出て參りましたが、茲に飛んだ手違ひより思ひ惱なき災難に遭遇ひまする、即ち其の頃東本願寺に止宿をいたして居りました新選組の小頭近藤勇に面會を致しまするの一條、何う爲りますか、次席に申し上げます。

第二席

炭谷七之丞は眼病のことでございますから、兩眼に聊か巾を宛て行ひまして、其端に糸を附け、耳に引掛け、眼鏡みたやうに仕して、徐々と四條礫に出て來ると、向方は料理店でございます、其の戸外に年齢二十二三の若侍ばかりが五六人、其中の一人が目隱しをいたし、後は斯う手を叩いて、忠臣藏の茶屋場の芝居に於て、由良さん此所ぢや、手の鳴る方へと云ふことを演りますが、よく子供が然う云ふことをして遊びます、今しも是れなる若侍ばかりが寄つて、其の鬼事と云ふことをいたして樂しんで居る樣子でございます、七之丞は偶爾と踏み止まり、之れを透かして見まして　七之「ア、何所の御藩か御浪人かは存せぬが、お若年ばかりが集まつて、酩酊の上氣の保養をしてござる我とても父が御存命ならば、時折には如彼して氣の保養も出來るものを、敵を討ちたいそが爲に身は浪人と相成り、未だに此の艱難苦勞、ア、何時敵が討てることやら、殿樣への御奉公は何時のことであらうやら、それを思へば味氣無い浮世であるわい、とは申すものゝ、思ふまい〳〵、親に不孝に當つては宜し

くない、何にいたしても自分が受けた持前であらう」と思ひ直して徐々と行かんと致しますると、片一方は目隠しをしてあるやつでございますから、向方が分らない、朋友が手を叩いて逃げ廻る、それを捉まへやうと一生懸命に手を擴げ、此邊あたりを騙け廻つて居ります、折柄其所を通り掛つた七之丞にバタリと突當つたので、突然其の胸部を確かと摑んで

○「ヤア何人か」は存じませぬが、鬼は貴公にお讓りいたした、暫時お勤め下されい」と聽いた七之丞は迷惑さうな顔をして

七之「イヤ御身方の御朋友とは違ひますから、何うかお放し下されヨ

○「卑怯なことを仰しやるな、鬼が當つたからと云つて、朋友とは違ふなどゝは何を仰しやるか、兎に角貴公に暫時鬼をお渡し申す

七之「イヤ、私は全くお仲間とは違ふから、何うか其所をお放し下さるやう」と徐り執拗く言ふものですから、先方は片手でグッと動かぬやうに七之丞の胸部を取つて置いて、片手を手拭の結目の

所へ廻し、パッと解いて見ますると、如何にも人違ひでありますから、件の若侍は吃驚して、手を放し、呆氣に取られて眺て居ります、之れを見た七之丞は

七之「是れは何うも早や失禮を仕りました、御免下され」と斷りを言ひましたが、是れは却つて若侍の方から大きに失禮をした、御免下されと云ふ方が本意でございますが、何しろ酒に醉うて居りまするし、幾分か心の惡い人物と見ねまして

侍「アイヤ暫らく待たれよ、貴公は何所の浪人か、御藩かは存せぬが、武士たる者の樂しみを妨害に及ぶと云ふのは、情むべき奴だ、承知はせぬぞよ」と逆理屈を言つて來るから、眼病とは云ひながら、炭谷七之丞は幾分か腹に蟲のある人でございます

七之「是れは怪しからぬ、貴公からこそお斷りがあつて然るべき場合でござる、それを滅多矢鱈に通行の者の胸部を取つて、鬼を讓るなどゝは何事でござる、人違ひぢや と申して居るのを聞かず、無理に胸部を取り、尙ほ執拗も顏

を眺めて呆氣に取られ、一言半句の斷りもせず、逆理屈を申すなどゝは、武士の作法を存せぬ其許よな、お控へ召されよ 侍「何をッ……」と云ひながら、彼の若侍は突然七之丞を望んで掴み附いて來た、斯は堪らぬと思つたものですから、七之丞はパッと体を開き、再び掴み附いて來るやつを、突然胸部を取つて引搦ぎ、手早く向方へドーンと投げ附けた、之れを見た仲間の若侍は 侍「ヤア此奴は松本氏を取つて投げた、理不盡な奴だ、善惡はさて置いて、朋友に味方をするが世の習、各々方、此奴を取り押へておしまひなさい 侍「合點でござる」と四五人の者がパラ〳〵と突然七之丞を追つ取り圍み 侍「此の不禮者奴ッ」と打ち掛つて來た、七之丞は已むを得ませぬから、体を轉し、隙があれば取つて投げると云ふの始末柄、中々腕前も遠慮でございますから、若侍共も今は殆んど持て餘して居ります、このときッと向方の座敷より此の体を眺めて居りました

のは、年齢三十七八、色淺黑く、眉毛は一の字を引いた有樣、顏は飽くまで鋭く、身の丈五尺六七寸もあらうと云ふ骨太の一人、是れぞ若侍共の頭と見ねまして、バラ〳〵と其所へ出で來り 近藤「ヤイ我こそは新選組の小頭近藤勇と申して、東本願寺に止宿をいたして居る者であるが、汝こそは不禮であらう、我組下の輩を手玉に取つて投げるとは憎むべき奴ぢや、サア來いッ」と來つたものですから、七之丞も黙いて 七之「ヤア近藤氏とやら御身は物の頭ともなつて居られる人ならば、仔細は斯樣斯々の次第、善惡は貴公のお胸中で篤とお考へを願ひたい 近藤「白痴者奴が……」と言はせも果てず、突然七之丞の胸部を取り、ムンッと組み附いて來た、七之丞も此場を逃れんと必死に働いて見たが、此人には迚も敵はない、その儘引搦がれて、ドーンと其所へ打突けられた、起きんとするを大勢が寄つて集つて押へ附け、可哀想に手を後にグッと廻し、刀の下緒でウンと縛つてし

まひました　○「サア神妙にいたせ、汝こそは朝敵長州の間者であらう、左樣な者が當今この地に指して入り込んで居ると云ふ噂があるに依り、新選組と云ふものを設け、我々が日々左樣な者が居れば取つて押へ、篤と取調ぶる役目を蒙つて居るのぢやサア來いよ」と有無を言はせず、その儘東本願寺に引つ立てゝ歸り、廣庭の中央に莚を敷き、其上に引き座ゑ、左右から二三十人の連中がグルリと追つ取り捲いた、すると近藤勇と云ふ人が一段高い所に座蒲團を敷き、ムンズと其所に座り、七之丞を眼下に見下し　近藤「サア汝は朝敵長州の間者であらう、姓名は何と申すか、白狀に及べい　七之「私は水戸の藩で、千二百石炭谷七之丞……」と言つてしまへば、それで終ひのものでございますけれども情ないかな、敵討と云ふ身であるものでございますから、本名を明しては一大事、若しも敵が此場にでも居つて差支へては相成らぬと思ひましたから　七之「必ず左樣な胡亂な者では

ございませぬ、何うかお嫌疑を晴らしてこの儘お歸しを願ひたい　近藤「汝は何所の者だ、本國姓名を申せ　七之「エ、私は宮川町松原下る大塚慶藏と申すものゝ道場に飯焚をいたして居りまする七之助と申しまする者で、今日少しく眼が患いものでございますから、お醫者の許に行かうと出て來ました途中でございます何うぞ一ツお嫌疑を晴らして下さるやう　近藤「フーム、汝は大塚と云ふ者の飯焚七之助と云ふか　七之「御意でございます　近藤「それに相違ないか　七之「嘘言は申しませぬ　近藤「イヤ〳〵、然うではあるまい、如何に口賢く申しても、中々この儘逃れぬぞよ　七之「決して嘘言は申しませぬ、若し御胡亂と思召さば、大塚の許にお照會を願ひたい　近藤「ヨシ、誰かある、大塚慶藏と云ふ者の道場に行つて取調べて來い　侍「宜しうございます」と若侍が一人表の方へ飛び出し、大塚慶藏の道場を指して驅つて參りました、このとき七之丞の胸算では、今この侍共が大塚の道場に驅け附

け、貴方のお宅に斯う云ふ七之助と云ふ仮焚があるかと尋ねたら、ハ、ア是れは七之丞のことであらうと推量して、大塚が如何にも然う云ふ男がありますと、場合を繕ふて呉れるであらうと思つて申したことでございます、然るに大塚にして見ると、其様なことは存せぬものでございますから、若侍の尋を聽いて

慶蔵「ハテナ、手前の方に左様な仮焚は置いてございませぬ」**侍**「いよ〳〵ございぬか」**慶蔵**「如何にもございませぬ」と云ふものだから、若侍はその儘立歸り、近藤勇に其通りの次第を申しました、之れを聞いた近藤勇は眼に稜立て丶

近藤「おのれ不埒な奴だ隠さんとしても役に立たぬ、大塚慶蔵の宅に汝のやうな者は置いてある覺えがないと言ふた、して見れば飽くまで朝敵長州の間者に違ひない、白狀に及べい、云はぬとあれば言はせる法がある、左様心得い、サア打てし〳〵」**侍**「宜しうございまする」と云ふので、六尺棒見たやうなものを取つて來る奴もあれば、竹

の破れたものを持つて來る奴もありまして**侍**「サア、ウヌ白狀に及ばねば斯うだぞ」と後手に縛つたまゝピシー〳〵と脊部を打ち殿いた、七之丞は俯向になり、痛さを堪へながら**七之**「ア、殘念である、此所で本名を明さうか、イヤ〳〵今まで我慢をいたし、本名を明さずに置きながら、今となつて白狀をいたし若し敵が居り、差支へるやうな場合があつては相成らぬ……何うぞお助けを願ひたい、必ず私は胡亂な者ではございませぬ」と幾ら事情を申しましても、先方は聽かない、飽くまで朝敵長州の間者だと云ふ見込で、ドシ〳〵責折檻に及びます、七之丞は齒を咬緊りながら**七之**「ア、無念、殘念、是りやア親の敵を得討たぬで、この場所に於て彼等の爲に一命に關はるやうな仕儀に立ち至るかも知れぬ、誰か助けに來て呉れる者はあるまいか大塚殿も好い加減に悟り、この場所に駆け附けて來て下されば宜いものを、怨めしいことではあるわい」と思つて居りますが

誰あつて來て呉れる者はございません、話頭一轉この東本願寺の側に若松屋と云ふ辨當屋がございまして、是れが日々東本願寺に辨當を入れて居ります、今しも辨當の空を取りに來た　男「毎度御最負に有難うございます、お辨當の空を頂戴に參りました　Q.ア、其所に集めてあるから、持つて歸れ　男「有難うございますると、一人の武士が後手に縛られて頬りに脊面を殴かれて居る狀態でございますから、ジッと透かして見ましてあれは平常俺がお辨當を入れて居る大塚様の道場に居らつしやつた、水戸の御藩炭谷七之丞様と云ふお人ぢや、それに違ひない、何う云ふ物の間違ひかは知らぬが、何でも彼のお人は敵討と云ふことを聞いて居る、こいつは大塚様の許にお知らせ申さねば相成らぬ」　とその儘プーイと東本願寺を飛び出し、辨當の空を持つたまゝ、一散に大塚の道場に飛んで來て　男「先生、大

變なことでございますのお宅に水戸さんの御浪人で炭谷様と云ふお人が居らつしやいましたナ　慶藏「ア、それはまだ居らつしやる　男「あのお人は敵討のお身の上でございませう　慶藏「如何にも左様ぢや　男「今私が東本願寺へお辨當の空を貰ひに參りまして、偶爾とお庭を見ますと、そのお方が斯う〳〵云ふ次第柄でございます　慶藏「エーッ、それは實際か　男「必ず嘘言は申しませぬ、先生が行づて御挨拶をなされた上助けてお上げあそばせ　慶藏「そりやア怪しからぬことである、ム、よく知らして呉れた、御苦勞であつた　男「先生直ぐに行つてお上げあそばせ」　と辨當屋はその儘歸つてしまひました、後に大塚慶藏は考へまして　慶藏「ハ、ア、先刻新選組の方から、お前の宅に飯焚の七之助と云ふ者が置いてあるかと尋ねに來た、して見れば炭谷七之丞殿が新選組と何か爭論でもいたし、不孝にも俘虜に出遭つたが、敵討の身の上のことだから

故と我道場の飯焚七之助と名乗り、若し新選組の方から尋ねに行つたならば、其邊のことは大塚が推量して如何にも然う云ふ飯焚男が置いてあると言つて呉れるであらう、左すれば身の嫌疑が晴れて歸れると云ふの考で仰しやつたことに違ひない、是りやア何うも拙者も失策をいたしたわい」と思つたから、急ぎ身準備をいたし、その儘ドン〳〵と急いで飛んで來たのは東本願寺の表門、ジッと寺内の動靜を見まするとソッパリ動靜が分らない、そこで寺内に入込みまして、ジッと潜んで動靜を考へて見ると、如何にも七之丞が責折檻に遭つて居るに違ひございませぬから　慶藏「是りやア可けない、けれども我一人では到底お助けすることが出來ぬ、こいつは水戸樣に委細申し上げるが宜からう」と是れから東本願寺を出まして上長者町室町の角を引廻した所が水戸樣のお屋敷でございます其所へ指して大塚慶藏が出て參りました　慶藏「恐れながらお願ひ

でございます　取次「何ぢや　慶藏「私は以前水戸の藩大塚慶藏と申しまするが、仔細あつてお暇を頂戴いたし、今では宮川町松原下る所に道場を開いて居ります、今日は御前に些とお目通りをいたし、お願ひ申したき筋があつて、態々罷り越しましたやうなことでございます　取次「如何なる用向であるか、申さつしやい伺ふて見て遣らう　慶藏「實は斯樣々々の次第柄でございまする」と七之丞の身の始末を物語ります、之れに依つて取次から次に取次ぎ、順序を以て殿樣へ此の趣を申し上げまするとと、水戸の大守はお聞きあそばし、膝を叩いて驚き給ひ　大守「ナニッ、然らば予の家來炭谷七之丞が敵討に就て暇を取らせた後、大塚の許に食客となつて居つたが、今日圖らず大難に出遭つて居ると申すか、ム、よく屆けて參つた、何とかいたして取らせると申して置けい　取次「承知を仕りました」と取次は出て參りまして　取次「大塚氏とやら、御苦勞でござる、御前は大變なお喜びでござつ

た、何とか御前の方からお心添になるでござらうから、兎に角其許はその儘お歸りなされよ　魔藏「有難うございます、一時も早うお願ひ申さねば炭谷氏の御一命にも關はる場合でござる、呉れ〳〵も宜しくお取成しを願せます」と大塚魔藏は頼んで置いて立歸りました、此方は水戸の大守がお側用人に向はれまして

大守「田村一平」　一平「ハヽッ」　大守「誰かに申附けて東本願寺の新選組の方に參り、小頭近藤勇に早速水戸の屋敷まで參るやうに申して遣れい」　一平「承知を致しました」と云ふので、田村一平は早速一人の侍にお使者を申し附けました、お使役は隔時のことでございますから、身準備も匆々にして、ヒラリと馬に跨り、馬足を早め、暫く間に東本願寺に駈け附け、門前に於てヒラリと飛び下り、馬丁に馬の口を持たせて置いて、その儘寺内に這入り、近藤勇に對面に及びまして　使者「我こそは水戸家の使者である、御殿より小頭近藤勇殿に早速目通りをせよとのお言葉でござる

御苦勞ながら只今御同道に預かりたい」何しろ當時御勢力の強き水戸様のお言葉ですから、斯う言はれて見れば、近藤勇も致し方がございませぬ　近藤「如何にも承知を仕りました、それでは早速お供を致しませう……ア、若侍共、我不在中この者を嚴重にいたし、必ず逃がすことは罷りならぬぞよ　侍「心得ましてございます」是れから近藤勇はお使者と同道にて早速水戸のお屋敷に參り、殿様へお目通りをすることに相成りました、水戸公はジッとお眺めに相成りまして　大守「汝は新選組の小頭近藤勇と申すか　近藤「御意にございます　大守「予の家來にいたして、千二百石炭谷七之丞なる者は親の敵討に就て長らく暇を取らせてある、その炭谷七之丞が當時大塚魔藏と云ふものゝ道場に足を留め、日々洛中洛外を廻り、敵の詮議をいたして居るのぢや　近藤「ハヽッ　大守「然るに如何なる事情あつてのことか、その者を汝の方に伴廚といたし、理不盡なる責め折檻に及び、はや一命にも關は

ると云ふの場合であると云ふことを耳にいたしたが、何故に予の家來を左樣なことにいたすか、何うぢや」と嚴然として仰せに相成りますと、近藤勇はハッと驚いて　近藤「ハヽッ、さては御前の御家來でございまするか、實は朝敵長州の間者と心得まして、篤と取調べて見ました所、水戸の家來炭谷七之丞と明かに仰しやれば、必ず私も左樣なことは致しませぬが、大塚慶藏方の飯焚などゝ言はれましたに依つて、早速大塚方を調べまする と、大塚方には左樣な者は置いてないとの返事でございましたから、尙ほ嚴しく詮議致しますと、仔細あつて國所姓名は名乘れぬと云ふことで、飽くまで疑ふべき奴と心得ましたから、實は責め折檻に及んで居りまするやうな次第でございます、何分存せぬことでございますれば、何卒平に御用捨のほどを願ひます　大守「フーム、然らば本人は本國姓名を申さなかつたのか　近藤「御意でございます　大守「それは敵討のことだに依つて言はなかつ

たのであらう　近藤「ハヽッ　大守「其方も私事にいたしたことではあるまい、役柄でいたしたことであれば已むを得ぬ、免して取らせるであらう　近藤「恐れ入りました　大守「早速その者を鄭重にして還すやうにいたせ　近藤「承知を仕りましてございます」と近藤勇は平伏に及びましたが、當時の水戸樣の御勢力では一も二もございませぬ、その儘急いで歸つて來た近藤勇は、若侍に申し附け、早速七之丞の繩を解いて　近藤「イヤ、貴方は水戸家の御家來炭谷七之丞殿と云はれる御身分で、身に大望のあるお方でございますナ　七之「誠に何うも恐れ入ります　近藤「それなら然うと早く仰しやれば、手前も如彼云ふ扱方はしないものを、幾らお尋ね申しても本國姓名を名乘られず、たゞ曖昧なことを申されるに依つて、ッとお氣の毒な次第柄になりました、今日水戸の御殿より委細を承はつたので、貴公のことが何も彼も相分りましたイザお助け申す、此後は何方に參られても、如彼云ふ曖昧なこ

とを申されると、それが爲に其身を亡ぼすやうなことが到來仕りますぞ、是れまで失禮の段は幾重にもお免し下さい、サアお歸りなさるやう」と聞いた七之丞は、ヤレ〳〵助かつたか、然んなら最初から何も彼も言ふたならば、何の仔細もなかつたものをと思ひながらも　七之「誠に忝なうござる」と早速門外まで送り出され、プラ〳〵と歸つて來ると、向ふの方より大塚處藏と弟の忠三郎とがドシ〳〵と飛んで來た　忠三「イヤお兄上でございますか　七之「オヽ舍弟か　忠三「私は毎日の通り敵の詮議に出て居りましたが、只今歸へつて見ると、大塚先生より委細のことを聞きました故、其の近藤勇と云ふ小頭を敵手にして、飽くまで貴方をお助け申さんと只今此所まで飛んで參りましたやうな次第、然るに無事にお歸りになりましてお芽出たうございます　七之「舍弟、拙者は酷い目に遭つたぞ　忠三「誠にお氣の毒なことでございます　七之「先づは無難に助かつて、こんな嬉しいことはないわいと是れより三人共その儘大塚の道場へ歸つて來て、殿樣にも御禮を申し上げ、左右いたして居りまする間に、チャンと眼病も全快をいたし、追々に身体も壯健になりましたから、兎も角も是れから洛中洛外を敵の吟味に及ばなければ相成らぬ、併し以前松原磧に於て敵に出遇つたときは、我々兄弟の腕が鈍くして充分敵を討つことが出來なかつた、何でも腕前を確かり鍛ね錬げて置かなければならぬと、兄弟は大塚の道場に於て、毎日時を決めて武藝の修業をいたし、その餘は前の通り兄の七之丞は按摩、弟の忠三郎は飴賣と相成り、毎日お得意廻りをするやうな態にて、敵の搜索をいたして居りました、或日のことでございますが、七之丞は兼ねて按摩の負最になる祇園の一力と云ふお茶屋に出て參りまして　七之「ハイ今日は、結構なお日和でございます」と云ふと、其所に一力の亭主が居りまして　亭主「ア、按摩の七さんか、宜い所へ來て呉れた、肩が凝つて困つて居る、

一寸と一つ揉んで貰はう　七之「承知を致しました」と七之丞はその儘其所に上り込みますと、亭主は蛮所の長火鉢の所に座り込む、その後部に廻り、キユッ〳〵と揉み始め、種々と世間話をいたして居りますると、戸外から年齢二十二三、氣の利いた一人の女が這入つて來た　女「親方、今日は……」　亭主「ア、誰かと思へばお前は竹本千代太夫さんぢやないか　千代「左様でございます此頃は御不沙汰をいたして居りまする　亭主「暫らく顔を見なかつたが、何所へ行つて居つたのぢや　千代「ハイ北國の方へ行つて居りました　亭主「ハ、ア矢張り淨瑠璃の興行で行つたのかい　千代「イエ、御贔負の旦那と一緒に見物に行きましたので……　亭主「そりやア結構ぢや、何日歸つたのかい　千代「昨日歸つて參りました、親方には長らく御贔負になりましたものでございますから、一寸序に御機嫌を伺ひに……　亭主「そりやア御叮嚀に有難い、併し何所の旦那に伴れて行つて貰つた　千代「ハイ、それはアノ山本羽

太郎様と云ふお方に伴れて行つて貰ひましたのですヨ　亭主「そりやア、好いことをして來たナ、併しお前の十八番蝶花形の淨瑠璃をもう一度聞かして貰ひたいと思つて居た所ぢや、幸ひに歸つて來たのなら一番聞かして貰はう　千代「何うか御贔負にお頼み申します」と話をして居る、按摩をしながらジッと之れを聽いた七之丞は、土州の浪人山本羽太郎と云へば、正しく我爲には親の敵、耳寄りな話を聽くものかなと、總身に力が這入つたものですから、ウーンと思はず汗嗚りながら、グッと肩を掴んだ一力の亭主は吃驚してしまひまして　亭主「ア、痛い〳〵　七之「是れは何うも失禮を致しました　亭主「そんな何うも無茶な肩の掴みやうがあるものか、何ぢや、ウーンと唸つて、心持の惡いことぢやナ　七之「エ、私は斯う云ふ病氣が時々發るのでございます　亭主「光達ても飴賣の忠さんと云ふのが呼びに來たときに、こんな病氣が出たぢやないか　七之「もう心配はございませぬ、彼のときも

中しました通り、斯う云ふ病氣を發さうと思ふたら、何時でも發しますが、發さうまいと思ふたら、五年十年でも發りませぬ

辛主「エライ都合の宜い病氣ちやナ、マアもう暫らく揉んでお呉れ

七之「ヘイ、失禮を致しますでございます」

とまた按摩をしながら、横の方を顧みまして

七之「併し姐さん、貴女は山本様と北國の方へ御見物に行つたと仰しやるが、山本様は貴女と御一緒にお歸りになりましたか

千代「ハイ、山本の旦那と一緒に歸つて來ました

七之「貴女は其の山本様を疾うから御存知でございますが

千代「左樣でございます

七之「エ、私も按摩で御贔負になつたことがありますが、近頃は一向お出會ひ申さぬので、何うしてざることやらと思つて居りましたやうな次第でございます

千代「オヤ然うでございますか

七之「當時山本様は何所に在らつしやいます

千代「先日妾は御一緒に歸つて來ますと、直ぐその翌日山本の旦那は大阪に行つて道場を開くと仰しやつて、それなり妾は

別れてしまひましたが、何れ道場を開いて所が決まつたら、直ぐに手紙を寄越すと、斯う云つてお行でになりました、併しまだ決まりませぬものか、何のお手紙も參りませぬ

七之「左樣でございますか

千代「併し按摩さん、お前さんも山本の旦那に御贔負になつた御緣があると云ふことなら、妾の家は伏見街道の一の橋、竹本千代太夫とお尋ね下されたら直ぐに分ります、妾は一人の母親と一緒に暮して居りますが、その母親は按摩が好きですから、彼方にお行でになつたら來て下さい、また揉んで貰ひませう

七之「何うか御贔負にお頼み申します

千代「親方、左樣なら……

辛主「ア、千代太夫さん、もう歸るのかい、また來てお呉れ

千代「ハイ相變らず御贔負に願ひますヨ」

と竹本千代太夫と云ふ女は立歸つてしまひました、後に殘つた七之丞は漸う按摩を濟ませ、幾らかの賃錢を貰ひ、大塚の宅に歸り、こいつは好いことを聞いた、洛中洛外を搜しても分らぬ筈だ、大阪に行つて居

ると云へば此方にも亦その都合をせねば相成らぬと種々考へて居りまする所へ、弟の忠三郎が歸つて來て　忠三「お兄上、何か好い手掛りは出來ませぬか　七之「ヤア出來た〳〵　忠三「エーッ、出來たとは何所に……　七之「狼狽へたところで仕方がないが、實は斯樣々々の譯で大阪に……　忠三「ちやヤ是れから大阪に兄弟揃つて乘込みませう　七之「イヤ未だ所も決まらぬのに乘込んでは何にもならぬ、拙者が今日のことを一ッの緣としてそれとなく動靜を考へて竹本千代太夫の許に出這入りをいたし、伏見街道一の橋、居る間には、屹と敵から手紙が來るに相違ない、左すれば大阪の所在が分るであらう、それを機會に乘込んで敵討をいたさうしまして、是れより七之丞が竹本千代太夫の許に出這入りをいたし、不思議な所から手紙を見て、遂に大阪へ乘込み、座摩の前の一の騷動と云ふお物語りでございます。

第三席

さて七之丞は祇園一力に參りましたのが一の緣と相成りまして其の翌日大塚の道場を飛出し、伏見街道一の橋、竹本千代太夫と捜ねて見まするとと、餘り大きい家でもございませぬ、間口が二間半ばかりで、一寸格子造りの綺麗な構へ、表には立派に標札が掲つて居りますから、此家だわいと思ひまして、ガラリと開けて這入りました　七之「御免下さい」と云ふと幸ひに居りました竹本千代太夫が、七之丞の顏を見まして　千代「オヤ昨日の按摩さんでございますか　七之「ヘイ、今日は一寸此方へ參りましたのでお伺ひを致しました　千代「お母さん、妾の話をして居りました按摩さんが來て呉れました、何うでございますか　母親「サア此方へ上つて一つ揉んで貰ひませう　千代「按摩さん、御面倒ですが此方に這入つて揉んで上げて下さい　七之「そんなら御免を蒙ね、

ります」と七之丞は上り込み、四邊を見廻し　七之「何うもお宅は綺麗にしてございますナ」とその儘火鉢の側に近寄り、一服喫ひ、ソロ〳〵千代太夫の母親の按摩をいたし、其日は何彼の世間話をして歸つて來た、それより三日にあげず、此家に按摩を取りに參ることになりましたが、その間にも敵の方から何か消息はないものであらうか、如何であらうと、沈とそればかりを考へて居る、今日しもまた行つて來ると、母親が不在と見ねまして、千代太夫が一人居りましたが　千代「一寸便所に行つて參ります」と裏の雪隱に行きました、後に七之丞は何か敵の方から來たものでもなからうか、濟まぬことではあるが、一寸見て遣らうと」火鉢の抽斗を開けて見ると、一枚の狀袋が這入つて居ります、偶爾と見ると竹本千代太夫どの、大阪にて山本羽太郎と斯う書いてありますするが、運の惡いことには中の書面がございませぬ、狀袋だけだから　七之「ハ、ア是れは大阪に居るに相違ないが、まだ所在が決まらぬものと見ねるわい」とやがて其日は歸つて參りまする途中より、何思ひけん、六波羅裏門多聞町清水屋清兵衛方に立寄り　七之「清水屋　清兵「ヘイ、旦那樣でございますか、其後は御無沙汰をいたして居ります、併し敵の手懸りがありましたか　七之「一寸手懸りが出來てあるのぢや　清兵「そりやア結構で、何所でございます　七之「實は大阪に居ると云ふことであるが、併しまだ其の大阪の土地が不案内ぢや　清兵「エ、御尤もでございます　七之「耻かしながら未だ一度も行つたことがない　清兵「左樣でございますか　七之「お前は大阪の土地が精しいだらうナ　清兵「エ、私は商賣用で月に幾度行くか分りませぬから、それはもう知らぬ所がございませぬ　七之「ぢやア行つた序に一應調べて來ては吳れまいか、　七之「此頃太阪に行く用事はないか　清兵「エ、無いでもございませぬ、それでは私ア今晩夜船で下りまして、

取調べて參りますでございます　七之「そんなら頼んだぞ　清兵「宜しうございます」と云ふので其の儘七之丞は大塚の道場に歸つてしまひます、後に輕卒漢の清兵衛は　清兵「娘ヨ　女房「オヤ良人、何だヨ　清兵「乃公は是れから大阪に行つて來るヨ　女房「オヤまあ突然に何うしたのだい　清兵「イヤ急に用事が出來て來た、實は炭谷御兄弟の敵の探索ぢや　女房「然うかい　清兵「ヒョッとすると、乃公ア、最う生きて歸ることが出來ぬかも分らぬ　女房「オヤまあお前はまた延忌の惡いことを言ふチ　清兵「イヤ〳〵敵の詮索だから、敵に姿を見られてみろ、一時に殺されてしまふわ、是れが別れになるかも知れぬに依つて、お寺の坊さんでも頼んで葬式の準備をして置けよ　女房「そんな馬鹿なことを言ふものでないよ、お前はさう云ふことを言ふものだから、人が輕卒漢だと言ふのだヨ、

清兵「マア何でも宜いわい、チャンと準備をして置くほど結構なことはない、それが無駄になりや喜ばねばならぬ」と狼狽込んで身準備に及び、早速清兵衛は自分の宅を飛出し、伏見の驛まで出て來て、大阪下りの三十石船にポンと打乘りました、サア船は下りのことだから脚が速い、右左する間に着きましたのが大阪八軒家、船から上りまして、未だに在りまする三星屋と云ふ宿屋に泊りました、是れは自分の定宿と見ねます、此所に泊りまして、翌日は自分が少々の用事を濟ませ、サアそれからドシ〳〵と四日五日調べて見たが、何所へ行つても何うも是れと云ふ敵の手掛りがない、或日のこと宿屋に歸つて來て　清兵「ナア御亭主　亭主「エライまた此度は御用事が多分に在ると見ねて、シッポリでございますナ　清兵「中々乃公は此度尋常の用事で大阪に乘り込んで來たのぢやない、用事も用事一命に關はるほどの用事で來たのぢや　亭主「それはまた何う云ふ御用事で……　清兵「實ア人に言はれぬ用向で、敵の探索に來たのぢや」ともう既に言つてしまつて居る　亭主「左樣でございますか　清兵「何は兎もあれ敵の

所在を調べて歸らねばならぬ、何の邊に居るぢやらうナ　亭主「そんなことが何うして私に分りませう、マア雲を掴むやうな話だが、彼方此方を捜して御覽なさい」と云つて居るうちに、日が暮れた、御飯を喰べた、仕方がないからコロリと寢た、其の眞夜中頃に何思ひけん、フト目を覺し　消兵「待てヨ、何所を捜しても一向何うも手懸りがない、居らねば居らぬで宜いけれども、萬一大阪に居るとして見れば、乃公が歸つた其後で何所其所に居ると云ふやうなことがあるかも知れぬ、さうなつては實に乃公が炭谷の御兄弟に對して面目ない、大阪に居るやうなら乃公が突留めて歸りたい、併し何所に居るか、一向譯が分らぬ、昔の眞田幸村と云ふ人は中々豪い軍師である、信州は小縣郡上田に於て十萬石を取つて居らつしやつた、何分もう天文を考へて合戰をなすつたと云ふことぢや、斯う云ふお方に賴んだら良い智惠を授けて下さるだらう、今夜是れから一番家の棟に登り、

幸村さんをお願ひ申し、此身に乘り移つて貰ひ、好い考を一つ授けて戴かう」と根が輕卒漢でございますから、寢衣のまゝ起き上り、細帶掛で二階の雨戸を開け、廂に出まして、大屋根に騙け上り、家の棟へ馬乘に跨り、八方を眺め、ポン〳〵と手を拍いて　消兵「モシ昔の眞田幸村さん、貴方は天文を考へて合戰をあそばすことがお上手だと聞いて居る、私は人を探索に來ましたが、一向に行衛が分りませぬ、居らねば居らぬで宜しいが、若し居るとして見れば、私が調べて歸らぬことには面目ない、私の力で捜すことが出來ませぬ、で此の大阪に居るやうなら、何うか貴方が私の身に乘り移つて、敵の所在のお指圖を願ひたい、南無幸村大明神樣〳〵」と暫らく掌を合して拜んで居るとソロ〳〵身体が顫うて來た　消兵「サア幸村樣が乘り移つて來た證拠ぢや、大分に乃公の身体が寒くなつたわい」と自分は寢衣一枚で家の棟に登つて居るのだから、寒くなるのが當然だ、それ

を然う思はずして、眞田幸村が乘り移つたのだと、自分から勝手な道理を附けまして、頻りに拜んで居りましたが、偶爾と拜むのを止め、ジッと空を眺めまして　清兵「待てヨ、此の大阪では天滿の方にも行つたし、川口の方にも行つた、上町の方にも行つたし、日本橋の方にも行つた、天王寺の方も調べたのだから もう乃公の行かぬ所はない筈ぢや、ハテナ、彼の西南の方の雲行が變だ、何うやら星さんも怪しいのが出て居る、是りやア殺伐の氣が立つて居ると云ふものぢや、コーット、何の方角に當るかしら……ア、あの星の下ぢやから、是れは座摩の前あたりが怪しいわい、是りやア彼所に敵が居るナ、ヨシ、彼所に違ひない、もう彼所を捜して見て、居なければ居ないのだから、兎に角夜が明けたら捜して來やう」　ともう一途に思ひ詰めまして夜が明るが早いか、顏を洗つたなり御飯も喰べず、ブーイと座摩の前に飛んで來て、ウロ〳〵と其所あたりを見まするとと、新

しい家の門構へ、玄關附、横手に道場が設けてある、而も立派な家がございますから　清兵「ハ、ア、此所ぢや、とジッと門の所に立寄つて表札を讀んで見まするとと、上の方が山本で、下の方に太郎と記してあるが、情ないことには中の一字が讀めない、　清兵「待てヨ、山本……太郎、中の一字がはと云ふ字ぢやなからうか、さうすりやア是れが敵の山本羽太郎、是れは羽太郎としか讀みやうがないわい」と讀が下らないものだから、自分が勝手に理屈を附け、是れは一つ近所で聞いて見て遣らうと、偶爾と振返つて見ると、丁度向方が燒芋屋でございまして、今しも朝のことだから表を開け、商賣準備に忙しくして居ります　清兵「エ、一寸ものを尋ねます　芋屋「何でがすナ、朝は忙しうがすから　清兵「イヤ尋ねると云ふのは外ぢやナ、他へ行つて尋ねてお呉れ　清兵「燒芋が十貫目ほど要るのですが、幾らほどでございませう　芋屋「ヤア是れは朝から豪氣なお客さんが出て來たわい……へ

イ十貫目でございますれば、もう餘程お廉くして置きます、是れ〳〵では如何なものでせう　清兵「イヤ何うも有難う、それで結構々々、併し向方に立派な道場を開いて居る先生、彼りやア山本羽太郎と云ふ人だナ　芋屋「然うですヨ　清兵「近頃道場を開かしやつたのですか　芋屋「ヘイ一月ばかり前からです　清兵「門弟衆は大分に在りますか　芋屋「ヘイ五六十人もお在りなさる鹽梅です　清兵「大きに何うも……　芋屋「モシ〳〵、燒芋の十貫目は何うなります　清兵「イヤ是れは燒芋の方を忘れてしまつた、一寸その割で以て三文がとこ賣つて貰ひませう　芋屋「エーッ、餘り人を馬鹿にするな、朝ッぱらから商賣人を素見しやアがつて延忌の惡い、打んぶ殿れ〳〵」と家内中が突然得物を取つてバラ〳〵と飛出し來り、己でのことに殿り倒されんとする氣色でございますから、清水屋清兵衛は一命から〳〵一生懸命に八軒家へ逃げ歸り、宿屋の勘定を致しまして、直樣京都を指して歸つて來た、尤も京都に

歸ると云つても今なら汽車もございますが、その時分にはさう云ふ便利なものがございませぬ、漸う三十石船くらゐのもので ございますが、朝は船が出ませぬと云ふので、脚袢に草鞋履き足を急がせ、スタ〳〵と汗水滴らして歸つて來た　清兵「嬶ヨ、今歸つた　女房「オヤ良人、お歸り、首尾は何うだつたヨ　清兵「ヘヽン　眞田幸村さんと云ふ軍師を頼んで、チャンと調べ上げて來たわい　女房「またお前は訝しなことを言つて居るネ　清兵「マア何でも宜い、乃公の腕前を見ろ」とその足でドシ〳〵と大塚慶藏の道場に出て來た　清兵「イヤ先生、炭谷御兄弟は居らつしやいますか、　慶藏「ア、七之丞殿か居らつしやるわい」と云ふ所へ七之丞が出て參りまして　七之「イヤ是れは清水屋か　清兵「オヽ、炭谷の旦那、只今歸つて參りました　七之「何うぢや、分つたか　清兵「分りましたとも、私ア眞田幸村さんを頼んで、此身に乘り移つて貰ひ、天文の力で考へて來ました　七之「ハヽヽヽ、汝は相變らず罪のないこ

とを言つて居るナ　清兵「そこで敵の所在は座摩の前でございまして、其家と云ふたら誠に立派な構へ、近所でも確かに敵の山本羽太郎に違ひないと云ふことを聞いて參りました、いよ〳〵彼れは敵に違ひございませぬ、直ぐに大阪にお行でなさい　七之「アヽ清水屋、よく調べて來て呉れた、忝ない、輕卒淡でも間に合ふときがあるわい、ちやア其方は歸つて呉れ　清兵「併し旦那、私もお供を致しませう、何うかお許しを願ひます　七之「イヤ其方は來て呉れぬでも宜い、我々兄弟で結構ちやわい　清兵「それは何を仰しやいます、私が調べて來た敵でございますから、お助太刀をせぬで何と致しませう、そんな何うも薄情いことを云つて下されては困ります　七之「それちやア其方も從いて來い　清兵「ヘイ有難うがす、私は家へ歸つて準備をいたして居りますから、失禮ではございますが、一寸家にお立寄りを願ひます　七之「ヨシ〳〵と云つて居る所へ弟の忠三郎が飴賣から歸つて來ました　忠三「お

兄上好い手懸りがございましたか　七之「ムヽ、只今清水屋が歸つて來て、斯樣々々の次第ぢや、是れから一つ大阪へ乘り込むことにいたさう　忠三「それは結構でございます」と兩人が身の準備を仕りまして、下には白の襦袢、上には黑羽二重の御紋附、それに準じた羽織を着、仙臺平の袴を着け、切緒の草鞋、大小刀を流儀に帶挾み、深編笠を手に取つて　七之「大塚氏、長らくお世話に預りましたが、是れから我々兄弟が大阪へ乘り込んで、首尾よく敵を討ち、幸ひに存命であるならば、またお目に掛つて御禮を申す時節もございらうが、御承知の通り敵は大敵、好まぬことながら是れがお別れになるかも知れぬ、隨分健固にお暮しのほどを願ひたい　傍聽「イヤ御兄弟、敵討出立の際に當つて左樣な延忌の惡いことを仰しやるものはない、心を丈夫に持つてお行でであそばせ　七之「是れは千萬忝ない」と茲に別れを告げまして、裏手の方より立ち出で、人目に掛らぬ所に立止まり、兄弟

が両手を合せまして　七之「冥道に御座する父上様、私供は長らく艱難苦勞を致しましたが、何うやら敵が大阪に住居をして居ると云ふことが相分り、是れより大阪に乗り込みまする、貴方も御承知の大敵でございますれば、若し我々の力に及ばぬその節には、草葉の蔭からお助太刀をお願ひ申します、南無阿彌陀佛〈」と息ある人に話をする如く、亡き父の冥福を祈りながら、さらばと深編笠を取つて天帝に戴き、兄弟打揃ひ、六波羅裏門多聞町清水屋の宅に乗り込み、茲に清兵衛と同道を致しまして伏見の里に出て參り、彼の有名なるお稲荷さんに參詣をいたし　七之「無事に敵が討てまするやう、何分共に御利益を願ひ奉りまする」と心の中に念じ了り、それより船場に參りまして、三十石船に打乗り、大阪を指して下りまするが、乗合の客は敵々と種々な談話をいたして居ります、なれども兄弟は敵討の身の上、左様なことは耳に留らない、左右する間に八軒家に着船に

及び、船から上りまして、最早夜が明たものですから、清水屋清兵衛の案内に依り、直様座摩の前に來て見ますれば、成程右申す通り立派な構へ、表札を讀んで見ますれば、是れぞ山本羽太郎と記してございますから　七之「如何にも是れは敵に相違ないと天にも登るやうに打喜び　七之「清水屋　清兵「へイ　七之「汝にまた一役頼むぞ　清兵「何う云ふ役目でございます　七之「我々兄弟が是れから支閑に掛り、内部に入込んで名乗を掛け、敵を討つのぢや、

清兵「へイ　七之「して敵の奴が若し戸外にでも逃げ出すやうなことがあつてはならぬから、汝が門の所に待つて居つて、萬一敵が出て來たら、ドッコイ遣らぬと大手を擴げ、そいつを遮斷て呉れ　清兵「エ、そのくらゐのことは造作がございませぬ、如何にも受持つて遣りませう、併し旦那、一寸待つて下さい、敵が逃げて來る、そいつを大手を擴げて、ドッコイ遣らぬと遮斷るのでございますな　七之「左様ぢや　清兵「何でもないやうなものゝ、先方

が沈として居れば宜うございますが、萬一刀を持つて私の頭を素天邊からザクーリと斬り下げられたら、私はもう一命がなくなつてしまひます、迚も敵ひませぬ、最つと手輕い所へ廻して貰へますまいか、何うもそんな大役は勤まり兼ねます　七之「ナニ造作のないことぢや、汝がドッコイ遣らぬと手を擴げて居るうちに、我々が奥から飛んで來て一刀の下に斬つてしまふわい　清兵「そんなら宜しうございます、私も一命を的に助太刀に來ましたやうなものゝ、可愛い女房もあることですから、もう暫らく死にたうもない、併し直ぐに且那が來て敵を斬つて下されば大丈夫、ドッコイ遣らぬと兩手を擴げますから、直ぐに來て下さいよ　七之「承知をいたした、併し汝には此の小刀を渡して置くから、之れを無茶苦茶に振り廻して居れ　清兵「宜しうございます」と輕卒淺の清兵衛は刀を借受け、之れを引拔いて、ジッと後に廻し、門の所にピタリと身體を寄せ　清兵「サアもう是れで大

丈夫だ、敵がッカ〳〵と出て來るわ、ドッコイ遣らぬと大手を開げる、ところへ炭谷の且那が來て敵の後からスパーリと斬つてしまふわ、こんな面白いことはない、殺されぬと決まつたらどんな役目でも引受けやうと云ふ清水屋清兵衛だ、へゝン、何と豪いものだらう、サア敵の山本羽太郎、何時でも出て來い、ドッコイ遣らぬと斯う止めてやるぞ」と頻りに獨語を言つて居るから、近所の者や往來の人が之れを聞いて　○「オヤ〳〵あんな所に狂人が居るぜ、妙な男もあるものぢやないか」と噂々言つて居る、之れを聞いた清水屋清兵衛は　清兵「是りやア可かぬ、先日向方の燒芋屋を欺したから、あいつは先日の奴だと云つてまた天秤棒や薪雜棒を持つて飛出して來ちやア大變だ、是りやア默つて居らねばならぬわい」と氣がつきましたものですから、それからは默つて沈と控へて居りまする、話頭一轉炭谷兄弟は立關に差掛り　七之「頼まう　○「ドーレ……」と出て來ましたのは

年齢七十に間近い老人、確かに當家の隱居と見ります　老人「エヽ、貴方は何方から……　七之「我々は水戸の藩炭谷兄弟であるが、當家の山本羽太郎は我々兄弟の親の敵であるから、只今討ちに參つた、尋常に此所へ出て勝負に及べ、それとも踏込んで討ち取らうか、返答に及べい」と聽いた右の老人は目を怒らし、白髮頭を振り立てゝ　老人「默れッ、我悴の山本羽太郎は人を殺すやうな了簡の間違ふたものではない、汝達が發狂人なら兎も角も、本性なら今一言吐かして見よ、必ず助けはいたさぬぞよ　七之「イヤ其許は事の次第柄を御存知なきは御尤もぢやが、實は過ぐる慶應元年六月六日の夜、京都松原磧に於て、我父炭谷虎之助が其許の御子息の爲に闇討にせられたのでござる、その敵討に來たものだに依つて、可愛い御子息でもござらうが、已むを得ぬ武士の情ぢや、お討たせを願ひたい　老人「默れッ、我悴は人を扶けこそすれ、必らず左樣に人を殺すやうな惡しき了簡のものではない、無禮者奴が、下れい」と何う言つても聞かない、このとき弟の忠三郎は道樂仲間の交際をした人だから、幾分か氣が短い、バラ〳〵と進んで　忠三「ヤイ爺、悴が人を殺したことを何故明白に親に言ふものか、それは汝の知らぬのが當然ぢや、いよ〳〵敵を討たさぬと云へば仕方がない、汝も共に斬つてしまふぞよ　老人「ヤア是れなる若者、汝等は狼籍者であるよなを吐しやアがるんだい、此の老耄奴ッ」と忠三郎は突然拳骨を固めまして、バアーッと老人の禿頭を一つ打ん毆つた、老人は餘りの痛さに目がグラ〳〵と眩みさうになつたやつをば兩手で突き飛ばしたから堪らない、老人は彼方に轉倒つて　老人「狼籍者狼籍者」と聲を擧げて居る、其の暇に七之丞は　七之「ソレ弟、續けッ」と云ひながら、忠三郎を後に從へ、土足のまゝ玄關より奥の室を指して乘り込みました、ところへ奥座敷より尋常ならぬ物音、何事ならんと一刀を引提げまして、其所に立ち出でま

した一人が、間の襖を颯と開き、炭谷兄弟と顔を見合はせました、是れなん何者でございませうか、次回のお楽しみといたして置きます。

第四席

さても炭谷兄弟は、これぞ擬ふ方なき親の敵、是非とも討たなければ相成らぬと、何れも一刀を引抜いて、土足のまゝドッと座敷に入り込みまするとと同時に、境界の建具をサッと開いて現はれ出ましたのは、年齢三十五六歳、身長は五尺二三寸、眼中鋭くまで鋭く、面には面擦れ、二の腕かけての竹刀疵、勇士の相を現はしたる一人、其方達が武士たるものゝ住家へ土足のまゝ剱戟を以て入り込み來るといふのは無禮であらう、其所動くな、助けることは罷り相成らぬ」と居合腰に相成り、一刀の柄に手を掛け、抜かば斬らんの勢を示しました、此方は兄

弟が、おのれ親の敵、この機を外して相成るものかと、既に身構へに及びながら、偶爾互ひに顔を見合せました、スルと情ないかな、同姓同名でございまして、本人とはコロリと變つて居ります、呆氣に取られた七之丞が　七之「貴下は御當家の御指南をあそばす山本といへるお方でございますか　山本「如何にも左様、南をいたす、以前はといへば尾州名古屋の浪人山本羽太郎といふ者であるぞよ　七之「左様でございますか」と兄弟の者はボンヤリと先方の顔を眺めながら、それにべタリと座つてしまひまして　七之「恐れながら當家の御主人に申し上げます、我々は何を隠さう、水戸の藩千二百石炭谷七之丞、續いて舎弟忠三郎といふ者でござるが、私共の親といふものは土州の浪人山本羽太郎なる者のために殺されました、依つてその敵を討たんものと艱難辛苦をいたし、諸國を廻つて居る折柄通りかゝつた御當家の門

前、表札を見れば立派に山本羽太郎と記してあるから、これぞ親の敵に相違あるまいと心急くまゝ乗込んで参り、斯く失禮に及びました段、誠に申譯がござらぬ、このまゝお助け下さる譯にも行きますまい、武士の申譯にはこの場において切腹を仕る……併し弟よ、其方は後に居残り、兄の代り立派に敵討をいたして呉れよ、兄は申譯にこの場で切腹をいたすわい……御當家の山本殿、全く我々兄弟が惡氣でいたしたことにあらず、これは過失でござるから、兄弟とも切腹をいたして申譯を仕るが本意なれども、敵討の身の上のことでござるから、何うか舍弟だけは武士の情に依つてお見逃しを願ひたい、御當家を血で汚すは恐れ多いことながら、今は已むを得ない、この場において潔く割腹に及ばん、お免しあれい」と既に小刀の鞘を拂ひ、兩肌を脱いで死を遂げんと致します、これを眺めた當家の主人が

山本「アイヤ待たれよ、その心底を見る上は全く亂暴狼藉とも思はれぬ、世の中には同姓同名といふのも往々ある例ひ、全く御身方の間違ひで斯る失策を爲すつたのでござらう、事情さへ分つて見れば無理に人を殺すのが効ではない、お兄弟ともお見逃しを仕るから、先づ切腹の儀はお止まりあそばせ　七之「左樣でござるか、それでも武士の一分が相立ちますまい　山本「イヤ〳〵飽までお見逃しをいたすから、兎にも角にもお止まりあれい、

七之「これは又お情厚き御言葉、誠に恐入り奉ります」と七之丞はその場に手を突いて謝りました、さて讀者諸君、世の中には同姓同名といふものも往々ありまするから、兄弟が周章て込んで粗忽をいたしたのも無理ならぬことでございます、ところへ只今玄關において忠三郎のために打ン擲られ、加之に突き飛ばされた當家の隱居がッカ〳〵と這入つて參りまして　隱居「イヤ悴め斯んな者を助くるには及ばぬ、其方を敵ぢやといふから、左樣でないと申して居るのぢや、然るにこの老人をば容赦もなく頭

を打ン擲り、加之に突き飛ばすといふのは狼藉者だ、切腹するといへば切腹させてしまひ、決して助けて置く要はない、憎むべき奴だわい　山本「お父上、必ず頑固なことを仰しやるものではございません、私の了簡にお委せ下さるやう　隠居「イヤ、委せることは能り相成らぬ、憎い奴である　山本「エ、聽き分けのないお父上、老人といふものは何事も出射張るものではござらぬ、隠居とは文字に書けば隠れ居る、兎に角奥に這入つてござつたら宜い、貴下は左様に仰しやいますが、能く物を考へて御覽あそばせ、私も好まぬことながら貴下が人手にかゝつて殺され、私が敵討の身と相成り、同姓同名の思ひ違ひから斯様な粗忽をして、敵も討たず、をめ〳〵切腹いたしたときには、草葉の蔭からさぞかし貴下はお歎きでせう、それを思へば彼是仰しやるな　隠居「イヤ、拙者は左様な人手にかゝつて殺されはせぬぞ　山本「サア、それは比喩でございます、兎に角頑固なことを仰しやら

ずにお扣へあれい」と怜より異見を喰つたから御隠居はスゴスゴと奥の一室を指して這入りました、サア斯うなりますと、炭谷兄弟も主人の情ある薬言に感じ入り、涙を流して悦んで居ります、このとき清水屋清兵衛は話合の上京都に立歸ることになります、此方は山本が兄弟に打向ひ　山本「何様大阪に敵が居ると聞いてお越しになつたことであるならば、その詮索中は拙者の宅にお泊りあそばせ　七之「千萬忝けない」と、これから最と親切にいたして呉れるものでございますから、兄弟は此家で厄介になることゝなり、翌日から兄弟とも浪華の地を彼方此方と廻り、敵の詮索をいたして居りましたが、殆んど何うも所在が分らない、今日しも弟忠三郎が考へた　忠三「お兄上　七之「何ちや　忠三「敵は至つてお茶屋遊びが好きでございましたナ　七之「左様ぢや　忠三「それで私はこれから北之新地に參りまして暫間にでもなつてお茶屋に這入り込み、さうして敵の來るを待つことに致しませう、

七之「ム、それも宜からう、然らば其方はさういたして呉れ」　山三「それではお暇を頂戴致します」と、これから兄弟が相談の上、忠三郎は或人の世話に依り、北之新地の有名なる梅若屋といふお茶屋に入り込み、幇間、一八といふ者になり、藝妓の供をいたして、山本羽太郎が飲みにでも來はせぬか、遊びに來ることはなからうかと、日々八方に眼を配つて居りましたが、何うも、運悪くして出て來ない、或日のことでございます、此方の山本は七之丞に向ひまして　山本「炭谷氏　七之「何でござる　山本「貴公のお父上が御最期のときに、何か敵に奪られた品物はござらぬか、

七之「イヤ、奪られた物があるのでござる、而も父に功あつて水戸の御殿より下された洛陽信國といふ名劔を敵に奪ひ取られましてございます　山本「フーム、落陽信國の名劔……　落陽信國……ア、炭谷氏、それなら少しく心當りがござるぞ　七之「エ、それは如何なる譯で……　山本「さらば拙者が至つて眤懇に致しまする播州姫路の藏屋敷、即ち渡邊橋で留守居番をいたして居ります鶴崎主馬といふ者がござる　七之「成程　山本「この者は先日久寶寺町井池の角、刀屋善兵衛といふ者の店から、確か洛陽信國の名劔、而も中味だけを七十五兩で購めて來た、一度鑑て下さいと拙者に見せたことがござる　七之「成程　山本「シテ見るとその刀屋にまだ飾だけが殘つて居るに相違ない、一應見て取調べて參りませうか、何か敵討の端緒になるかも相分りません　七之「御尤もでござる、それは何よりも好い端緒、何うか一ッお頼み申しますと致しませう」と、これから二人とも身準備をいたし、座摩前を後にしてドシ〳〵と出て參りましたのは、久寶寺町は井池の角、見れば刀屋善兵衛といふ立派な宅でございます　山本「免せ　善兵「旦那樣、お來であそばせ、マア何うぞ此方へ……」と座布團を持つて來る、それに腰を掛けますと、この家の女房がお茶

の一ッも持つて參り　女房「旦那様、煮ながれのお茶でございますが、一ッお召上り下さいまし　山本「ア、忝けない」と茶を取つて喫みながら　山本「コリヤ亭主　善兵「ヘイ〳〵　山本「刀劍の飾を購めに來たのぢやが、何うぢや、好い出物がないか　善兵「有難うさまでございます、エ、お氣に召すか、召さぬかは存じませんが、一應御覽の程を願ひます」と、一つの飾を出して見せたが氣に入らない、その筈です、洛陽信國の飾を見に來たのですから、他の品は別に用事がございません　山本「もう少し良い品はないか　善兵「ヘイ、ズッと良くなります　山本「そりやア構はぬ、見せて呉れ　善兵「宜しうございます」と亭主は起ち上つて向ふの戸棚を開け、小さな桐の箱に這入つて居る物を持つて參り、パッと蓋を取つてこれは　善兵「如何でございます」と差出しました、山本は偶爾手に取つて眺めて見ると、眞綿を布いて、その上に大切さうに置いてある、能く見れば金銀づくめ、以前は德川將軍家よ

り賜はつた品物のことでございますから、殘らず三葉葵の御定紋が附いてある、振返つて山本が　山本「炭谷氏、全くこれに相違ございぬか」といはれて七之丞は篤と見やり、思はず嬉しさうな面色を致しまして　七之「これは父が殺されましたときに、敵に奪られました洛陽信國の名劍に附いて居つたものに相違ございぬ　山本「ア、左樣でございるか……コリヤ〳〵當家の主人　善兵「ヘイヘイ　山本「何うだ、これに附いて居つた中味といふものはないか　善兵「ヘイ、そりやアお客樣はお賣り申しまして、ホンの附屬品だけ殘つて居ります　山本「ア、左樣か、これは其方が最初何者から購めたのぢや　善兵「ヘイ、それは山本樣といふ旦那がお來でになりまして、その方から私が買ひましたやうな譯でございます　山本「フーム、それは何所の者ぢや　善兵「エ、御浪人樣でございまして、お所をお尋ね申しましたが、別に迂散な者ではないから、マア購めて呉れと仰しやつたので、そのまゝ頂戴致しまし

たのでございます　山本「左様か、一寸その仕入帳を見せて呉れ、善兵「ヘイ」と亭主は何も氣が注かずして仕入帳を差出しました山本は早速手に取つて見ると、たゞ山本と記してあるばかり、値段は七十五兩で贖めたと書いてある、山本は仕入帳を下に置いて　山本「亭主や、併し其方はこの附屬品を幾らなら賣るのぢや、善兵「エ、七十五兩でございます　山本「ナニ七十五兩……もう些と負からぬか　善兵「そりやアもうお負け申した値段でございます、山本「五兩くらゐにならぬか　善兵「何う致しまして、そんな串戯を仰しやいますと迷惑を致します　山本「だツて爲りさうなものぢやアないか、これに中味があつて、兎に角七十五兩で其方の所では買贖め、それを中味だけ七十五兩で賣つてあるぢやアないか　善兵「ヘイ　山本「して見りやアこれだけが口錢ぢや、七十五兩の口錢を取らうといふのは甚だ何うも宜しくない、我々を何と心得て居るか、天滿與力であるぞよ　善兵「ヘイ　山本「斯樣に不當な商賣

をいたす奴はこの場においてフン縛り、嚴しいお處刑にいたした上、この家は絶してしまふが、何うぢや　善兵「エッ……ど、どう何うぞ御勘辨爲すつて……恐入りました、それでは何うぞその邊は宜からう樣にお贖めのほどを願ひます、お役人樣でございますか、それとは知らず誠に何うも失禮を仕りました」と、斯う申しまするとと少々變なお話でございますが、今なら一錢で購めた物を一圓で賣らうと、百圓で賣らうと、それは自分の技倆次第でございます、なれども昔はさう云ふことは出來なかつた德川政府の時分には賣ると買ふとにはちやんと口錢が決まつて居りました、幾らに決まつて居つたかといふと、一割一歩より以上の口錢は取れなかつたものでございます、そんなら證據があるかといはれますれば、ちやんと文字に證據がございます、賣と云ふ字と買といふ字とを並べて御覽なさい、買といふ字の上は十一を書いて賣、その十一を取ると買といふ字になりませ

う、だから一割一歩より上の口錢は取れなかつたもので、大体この文字が證據です、それより上の不當な口錢を取つたといふことがお上に知れまする、掟に照して家を潰されたり、或は一命のないやうなことも往々あつたものでございます、それも私がその時分に生きて居て見た譯ではございませんから、餘り當にもなり難いお話でございますが、略々そのくらゐのことでございませう、今しも亭主はブル〳〵顫へながら　善兵「その邊は宜しいやうにお頼み申しまする」と頻りに謝るものですから、山本は兎に角十兩の金子を差出しまして　山本「サアこれだけ拂つて置いて遣らう、少ないと思へばまた後刻から申して來い、拙者は座廉前において斯樣々々の者である　善兵「承知を致しました　山本「然らば購めて歸るぞよ」と、到頭十兩で買購め、座廉前の宅を指して歸りました、七之丞は大きに悅びまして　七之「山本氏、この上これでマア飾だけは手に入りましたが、この上

は何とかして中味を手に入れたいものでござる　山本「炭谷氏、御尤もでござる、それでは明日兎に角鶴崎主馬氏の宅へ同道致しませう、一時には行かぬが、たび〳〵參つて心安くなつたその上で何とか一ッ工夫を廻らし、その洛陽信國の名劔を貴殿の手に入れさせるやうにいたさう　七之「誠に何うも御親切は千萬忝ない　山本「イヤ御心配をあそばすな、武士は相身互ひでござる」といつて居りましたが、早くも翌日に相成りまする、山本は七之丞を從れまして、渡邊橋は播州姫路の藏屋敷に留守居番をいたして居りまする鶴崎主馬の方へ出て參りました　山本「ア、鶴崎氏、今日は……　主馬「これは山本氏、近頃は一向お顏が見ないから、何うして御座るかと心配いたして居りましたが、能くこそお越しになりました、先づ此方へ……ア、お伴樣は何所の御仁でござるナ　山本「これは矢張りわが朋友にいたして炭谷七之丞といはれるお方であるが、近頃拙者の宅で食客になつてござる

ので……　主馬「左様でござるか、イヤお初めてゞござる、何うぞマア此方へ……」といふから、七之丞も叮嚀に挨拶を致しまして、そのまゝ一室に通りますると、鑑て酒肴を出し　主馬「拙者が貴公のお宅に行けば毎度御馳走になるが、拙者の方では誠にお粗末なものばかりで甚だ相済まぬ、何うか一献お召上りを願ひたい　山本「それは何うも千萬忝ない、遠慮は却つて失禮ぢや、お襲れをいたさう、炭谷氏、御遠慮なさるな　七之「これは何うも有難うございます」と二人は鶴崎の饗應に依つて酒を飲み始めました、ところへ當家の娘、年齢は十八歳で、頗る付の美人、名前はおまちといふのが出て參り、優かに兩手を突へ　まち「これはこれは能うこそお來でになりました、妾は當家の娘まちと申しまする、不調法ながらお酌をさせて戴きませう」といふその挨拶振りから身體の動作まで、寸分隙のないほどに行屆いて居ります、此方の二人は好い娘もあるものだと感心をしながら、こ

れなるおまちの酌に依り、暫く飲んで居りまするると、戸外の方から這入つて來たのは當家の主人鶴崎主馬の甥、房川千代太郎といふ男でございまして、これは日々何所かへ劍術を習ひに通つて居ります　千代「叔父上、今歸途でございまして、一寸御機嫌を伺ひに參りました　主馬「イヤ千代太郎、稽古歸りであるか　千代「左様でございます……ヤアお越しあそばしたのは座摩前の山本先生でございますか、近頃は一向お目に掛りません　山本「イヤ、貴公は當家の甥御、何うでござるナ、相變らずお勢ひの宜いことでござるナ　千代「恐入ります、其方のお方は……　山本「これは拙者の朋友、炭谷七之丞と申されるお方であるが、何うかこれから御昵懇にお願ひ申しまする　千代「左様でございますか」といふから、七之丞も最と叮嚀に挨拶を致しました、然るにこの房川千代太郎は少々輕卒漢でございますから、叔父の鶴崎主馬より也上座にチンと座り、山本から盃を呉れたものだから遠慮なく

これを受け、一杯二杯と數を重ねて居りましたが、何思ひけん

千代「アヽ、炭谷七之丞殿、お見受け申せば貴殿も劍道御稽古の眞ッ最中といふお年配ざや、拙者もその通り、酒の上ではござるが、何うか一本のお立合を願ひたい、如何でござる」と、徐々劍術の催促を仕かけた、鶴崎主馬は默つて居られない、怒を生じまして

主馬「コリヤ千代太郎、默り居らう、不都合者奴が」

千代「ヘイ

主馬「初めてお目に掛つた御仁に對して、御勉强中のお身の上らしい、一本のお手合せをいたさうとは何事ぢや、先程から默つて居れば、この叔父よりも上座に座り、人に挨拶をすると、いつても碌に頭を低げない、無禮者奴が、承知をいたさぬぞ」と叔父の主馬が怒り出したものでございますから、此方の山本も默つて居られない

山本「アイヤ鶴崎氏、その御異見は恐入りましたが、何うか我々に免じて一ッ御容赦のほどを願ひたい

主馬「左樣でござるか、然らば山本氏の御仲裁に依つて免して遣るが

この後左樣な無禮なことは罷りならぬぞ、白痴者奴が、心得い

千代「恐入りましてございます」と、また此所で暫く飲んで居りましたもやロを開き

千代「山本氏

山本「何でござるナ

千代「炭谷氏はなか〳〵お腕前も適れの御樣子、何うか一本のお手合せを願ひたい、これも酒の上の一興、私は先刻から一本立合を仕たくッて腕がリユウ〳〵と鳴つて居ります、只今炭谷氏と立合をいたし貴下方が其所にて御覽下されては如何でござる

山本「左樣でござるか、炭谷氏、如何でござるナ」

といはれて七之丞も、別に立合といふ點に氣は浮きませんが、何しろこれからだん〳〵と當家に入り込んで、後日には洛陽信國の名劍を手に入れやうといふ心得でございますから

七之「然らば御所望によつてお對手を仕らう」と申しました、鶴崎主馬は今更止める譯にも行かない、遂に一ッずといたした假の道場を拵へ、山本と共に一段高い所に

座を占め、沈と見て居ります、兩名は道場の眞ッ只中に進み出で、身の準備に及んで居ります、尤も面籠手竹刀に竹具足、竹刀を携へまして、互ひにヤッ、ヤッと身構へを致します、鶴崎と山本は勝敗如何であらうと瞬きもせずに眺めて居りました話頭一轉當家の娘おまちでございます、今日お越しになつた炭谷様といふお方は、年齢はお若いが沈着いた上にお怜悧らしい殿御、さぞかしお腕前も御立派であらう、一應拜見をさせて貰はねばならぬと、ソッと其所へ出て參りましたが、女のことでございますから、突如道場に這入るといふ譯にも行かない、何所か見ねる所はなからうかと、ウロ〳〵して居りますると、一寸と板に節穴が開いて居りました、其所に近寄り、その穴より覗いて見ると、丸で見ねるものでございますから、沈と見て居りますると、互ひに竹刀を執り、ヤアッと聲を懸けながら左右の方に引分れました、どこの炭谷七之丞は今では一刀流の玄

妙に渡つて居りまするが、對手はどれだけ使へるか分らぬものですから、ヤッと忽ち正眼に構へました、一方の房川千代太郎は當時八重垣流の稽古をいたして居りまして、まだ極意に渡るといふほどの腕前ではございません、けれども根が少々輕卒漢の方でございますから、直ぐに人を輕視げる癖がある、ヤアッと大上段に構へました、七之丞は沈と眺めながら七之「ハ、ア、このくらゐの腕前なら何でもない、擊ち込むことは最と易いが當家の親戚の者を擊ち込んだりしてわが思惑の防げになつては宜しくない」と、物柔かに構へて居りますが、向ふからは一向擊ち込んで來ることが出來ぬものと見ねまして、たゞもうヤッといつて苦しんで居るばかり、そこで七之丞は故意と太刀先きに一寸ばかりの狂ひを見せました、スルと五体に一尺の狂ひが現はれて來た、こゝぞと思つたものだから、房川は大喝一聲諸共に七之丞の頭上を望んで千代「おめエーん」と擊ち込んだ、と

ころが頭を叩かせると工合が悪いものだから、一寸斯う首を左に向けますと、見當が違つてパッと肩を叩いた、七之丞は肩を擊たせて置いて、パッと後方に飛退り、襷鉢卷を取つて　七之「誠に何うも恐入りました、迚も我々ごときの及ふ所ではござらぬ何うかこれにて御免を蒙ります」といふたが、千代太郎は幾らかをかしく思つたものと見ねまして　千代「炭谷殿、貴公は拙者に及ぶ所ではないと御辭退をあそばすが、發公が眞面目の立合を爲さらぬのは拙者を馬鹿にしてござるナ　七之「これは怪しからぬ左樣なことを……　千代「お默りなさい、拙者が發公の頭上を望んで擊ち込んだときに、發公がパッと首を左に向け、故意と肩を叩かせたのは、拙者に按摩でもさせる御了簡でござらう、それでは除り卑劣ではござらぬか、今一本更めて立合を仕らん、サア身準備をあそばせ、と聽いた七之丞は迷惑顏　七之「ア、五月蠅い、それぢやア否が應でも一本擊ち込まねば得心が行かないの

か、何うも仕方がない……それならお對手を仕りませう」と、また襷鉢卷の準備に及びまする、これを眺めた鶴崎主馬はパッと其所へ飛降りて參りまして、突如房川千代太郎の横ッ面をピシャーリと毆りつけ　主馬「コリヤ千代太郎、汝は何所々々までも叔父に対へつけ　千代「痛いッ」といふその首筋を掴んでウーンと押へつけ　主馬「コリヤ千代太郎、汝は何所々々までも叔父に耻を搔かせる奴だ、先樣より見れば汝ごときは取るに足らないけれども花を持たせて故意と負けて下されたのぢや、その御心を知らずいたして二度目の立合を好むといふのは、無禮者奴、ウヌ助けては置かぬぞよ」と大音で叱り付けたものですから、また山本と炭谷とが仲裁をしまして、何うやら斯うやら其場を鎭めましたので、そのまゝ房川千代太郎は叔父に叱り捲られ、這々の体で歸つてしまひました、後に殘つた山本と炭谷の兩人は更めて鶴崎より酒肴を出されて、一杯酬れ直し、その日は默つて歸つてしまひましたが、これが一ッの緣と相成りまして、

これより毎日のやうに參つて居ります、然るに或日のことでございました、鶴崎の娘おまちが七之丞の來る都度に、その姿を見てフト思ひ染めたものと見ねまして、何時からとはなしに戀病ひ、今日でいへばヒステリーとでも云ふのでございませうかブラ〳〵病になつたから、兩親も心配をして、醫者よ藥よと厚く看病を致しますが、少しも快方に赴く樣子がない、醫者に尋ねて見ても、何ういふ病といふことは判然と申しません、合點の行かぬ病氣もあるものだと思つたものだから、母親が娘を一室に招きまして

母親「お前は何か思ふことでもあつて病うて居るのではないか、若しさういふことならこの母に何なりとも打明けて話を爲さい、どんなことでも聽いて進げますぞよ」と言はれたものでございますから、娘おまちは眞赤な顔をしまして、

おまち「それではお母樣、羞しながら申し上げます、實は毎々お越しあそばす炭谷樣を見染めまして斯の病をいたして居るのでご

ございます

母親「エ、ツ、それではお前は人樣を見染めての戀病ひかね

まち「ハイ、お耻しうございます、併しお母樣、まちが一生のお願ひでございます、何れ遠かれ早かれ養子をせねばならぬ妾の身の上なれば、同じお貰ひ下さるならば何か炭谷樣を……」とおまちはさめ〴〵と泣いて賴みます、これを聽いた母親も吃驚して

母親「左樣ならその事情をお父上に御相談を申して見るから、暫く待つて居なさい」と母親は主馬の所へ出て參りました

母親「モシ旦那樣

主馬「ア、奥や、何か用か

母親「娘が斯樣々々申して居りまする、彼のまゝ捨てゝ置けば見殺しに仕なければなりません、何と致しましたものでございませう

主馬「エーッ……まだホンの子供かと思うて居たら、早や郎を見染めて病うて居るとナ、遠くて近いは男女の間、油斷のならぬは娘の子なれども併し詰らぬ下郎ごときを見染めて病ふならば、不義はお家の法度だに依つて、眞ッ二ッにしてやつても然るべきであるが、何

さま彼の炭谷氏なら立派な人物、娘の養婿にしても恥かしくない、こりやア娘が戀病をいたさなくても、拙者より進んで養婿にしたいほどである、娘が能う彼の炭谷氏に惚れて呉れた、感心々々、男が惚れるくらゐなら女が惚れぬで何としやう、併し拙者の口より斯様なことをいふのも恥入る譯であるが、マア山本氏にこの事を申込んで、幸にも得心をして呉れたそのときには、兎も角も養婿に貰ひ受けることに爲やう、奥や、何うぢやナ　母親「旦那様、彼のお方なら娘の婿に欲しいと妾もかねく思うて居ります、誠に好いお考でございます、さすれば娘も助かることでございます　主馬「本當にさうぢやナ　母親「旦那様、妾も實は彼のお方を娘の養婿に欲しいと思ふたばかりではございません、彼のお姿をチョイく見る都度に、貴郎さいなかつたならば、妾もまた一考を、ホ、ホ、　主馬「コレく串戯を申すな、そんなことを言つては困るではないか　母親「こりやア誰かを頼んで

一ッ先方のお心を聽いて御覽あそばすが宜うございませう　主馬「それでは拙者がこれから山本氏の所へ行つて、彼の人に一ッ媒介をして貰はう　母親「早くお出でなさいまし　主馬「如何にも承知をいたした」と、鶴崎主馬は周章て込んで身の準備をいたし、座摩前なる山本の宅へ乘込んで來て斯くと物語を致します、これがために炭谷七之丞はいやくながらも鶴崎方へ養婿に入り込み、洛陽信國の名劔を手に入れ、次で伏見戰爭の中へ敵討に乘込むといふのお物語り、次回に申し上げます。

第五席

親は煩惱で子が可愛い、子に引かされる親心とは能く言ふたものでございます、武士たるものは行儀正しいものでございますが、子の可愛さに引かされて不義と云ふ咎もいたさず、鶴崎主馬はドシく座摩の前の山本の所へ出て參りました　主馬「イ

ヤ山本氏、今日は……山本「是れは鶴崎氏でござるか、マア此方へ……」とお茶の一煎も出しますと　主馬「是れはどうも有難い、山本「先日は出まして御馳走でございました　主馬「イヤ何もお愛想がなくつて何うも恐れ入りました、併し炭谷殿はお宅でござるか　山本「ア、些と用向があつてお使ひに出られました　主馬「左様でござるか、山本氏、取敢へず貴公にお願ひしたいことがあつて來たのでござる　山本「ア、何う云ふ御用事で、身に適ふことなら お話をなさい　主馬「イヤどうも親の口から斯様なことを言ふも面目ないが、實は手前の娘でござる　山本「ハヽア成程　主馬「もう妙齢でござるから養子を貰つて遣りたいと思ふので……　山本「そりやア結構で、恰好いものがありますかな　主馬「ところで實は娘も尊公のお宅に食客となつて居られる炭谷殿を養子に貰ひたいと云ふ所望であるが、我も結構なことぢやと思ふに就て、人に頼んで話をして貰ふも恥入ると心得、直接に一つお願に出たのぢやが、貴公がどうぞ一つ炭谷殿を娘の養子にお媒介下さることは出來ますまいか、何分宜しくお頼み申す　山本「ハヽア左様でござるか、それはマア結構なお話だに依つて、如何にも承知をした と引受けりやア宜いが、他のことゝは違ひ、縁談のことだけは本人が得心せぬことには何とも致方がない、兎に角一應話をして、御身の方へ成るだけ良い返事を仕らう、左様御承知を願ひたい　主馬「イヤ有難い、併し此事は成つても成らぬでも一つお媒介を願ひたい　山本「左様に無理なことを言はれては却つて迷惑、マア成るだけ力を盡して見ませう　主馬「それでは何分宜しくお頼み申す」と其儘鶴崎は喜んで歸りますと、引違へて炭谷七之丞が歸つて來た　七之「イヤ山本氏、只今でござる　山本「イヤお歸りなさい、如何でござる、思はしい手掛りでもありましたかな　七之「どうも手掛りがないので殆んど途方に暮れて居ります　山本「イヤさうお急きあそばすな、時世時節が來れば又討てることもござ

る、急いては物事を仕損じますぞ　七之「毎とてもお情のお言葉、有難う存じます　山本「そこで炭谷氏、貴公に一寸お話がござる、

七之「何う云ふことで……　山本「只今鶴崎の方より貴公を娘の養子に來て欲しいと云つて、現在親が其許を貴ひに來たのぢや　七之「是れはしたり、冗談ぢやアござらぬか　山本「イヤ本當ぢや、マアー一つ養子に行つて遣つて貰ふことは出來まいか、それが爲に娘は少し病氣に罹つて居る、之れを棄て置くと一命に關はるので誠にどうも困つたことである、貴殿さへ承知して下さりやア本人の病氣も全快するし、双方共に眼く治まることでござる、如何ぢや、一つ行つて貰ふことは出來まいか」と聽いた七之の丞は顏色を變へまして　七之「山本氏、御身は私を斯うしてお世話下さるお方にお似合ひ申さぬことを仰しやる、私も千二百石を殿樣に差上げてしまつて、親の敵を討ちたい爲に今は浪人に及び、艱難苦勞をして居る身の上、敵を討てば本國水戸に立歸り、御

殿にお勤めをいたし、親の家を繼がねばならぬ、他家に緣附の出來る身體か、出來ない身體か、貴公も大抵御推量を願ひたい　山本「イヤ何うも恐れ入るお言葉ぢやが、炭谷氏、此點のところは宜しくお聞分けを願ひたい、そりやア貴公も陽氣浮氣の身の上ではござらぬ、けれども貴殿のお父上が殺されたときに奪られた洛陽信國の名劍と云ふものは、先方に納まつて居るぢやアござらぬか　七之「如何にも左樣……　山本「それで先方へ養子に這入るならば、是非其刀は貴殿の手に入るものと思はなければならぬ、其刀さへ這入れば何とか文句を附けて、先方の屋敷を出てしまへば宜い、それから後は貴公が何方に行かうと勝手なものぢやござらぬか、一時其刀を手に入れると思ひ、兎にも角にも養子に行かれては如何でござる」と聽いた炭谷は一寸小首を傾けまして　七之「成程それも然うぢや、それでは一つ宜しなにお媒介に預らう　山本「如何にも承知仕りました、よくも御得心を下さ

れて、實に拙者も頼まれ甲斐があつて結構々々」と直ぐに山本は鶴崎の宅へ出て參りまして

山本「鶴崎氏、貴殿からお頼みになりましたことは到頭本人に承知をさせ、只今好い返事に參りました

主馬「左樣でござるか、千萬辱ない……奥や、山本氏が到頭手前より頼んだ通りにして下された、重畳ではないか

母親「オヤマアそれは結構でございます

主馬「サア早くお茶の一煎も出せ、娘も喜べい」と云ふやうな譯で、中々鶴崎の家は大騒ぎでございます、さう斯うする間に娘のおまちも出て來て挨拶をいたしチャンと縁談が纏まりまして、黄道吉日を選び、遂に山本の媒介に依りまして、七之丞は鶴崎方へ養子に這入ることになりました、斯くて七之丞は何でも兩親の氣に入られ、早く洛陽信國の名劔を我手に入れて當家を飛び出し、敵討をせねば相成らぬと、中々此の養子は腰掛の養子で、動もすると出やう〳〵と云ふやうな養子だから、誠に貰つたお宅も頼寄りない話だ、けれ

ども仕方がない、話頭一轉合弟の忠三郎は梅若屋で靜間をいたし、敵は來ないか〳〵と待つて居りましたが、少しも此邊に來ないさうな氣色がない、其の間に御老年のお方は御承知でございませう、伏見戰爭と云ふことが始まつて參りました、ところが其の戰爭に於きまして、山本羽太郎と云ふ者が數々功名をしたに就て、土州樣に歸參が叶ひ、尚ほ引續き伏見戰爭で日々功名手柄を現はして居ると云ふことを手に取る如くに聞いた忠三郎は、

忠三「こりやア可かぬ、敵が伏見戰爭に於て日々働いて居ると聞けば、我は斯樣な所で靜間などをして居る場合ではない」と無理に梅若屋の主人から暇を取りまして、ドシ〳〵と出て來たのは座摩の前の山本の宅でございます

忠三「山本氏、お兄上は居りますか

山本「ア、御舍弟でございます、お兄上には一寸仔細があつて、鶴崎主馬と云ふものゝ宅へ養子に行かれ、當時私の家には居らつしやらぬ」と聽いた忠三郎は顔に癇筋を現はしまして、

忠三「お默りめされ、山本氏、他家へ養子に行つたとは何事でござる、何方がお媒介をあそばしたか　山本「憚りながら私がお媒介を致しました　忠三「そりやア貴公にもお似合ひ申さぬ、又行く如も行くやつちやが、媒介をする者もするものぢや、敵を討たねばならぬ大切な身の上、蟲にも喰はさぬ身體を以て、他家へ縁附をいたすなどゝは何だ、そんな何うも陽氣浮氣の騷ぎではない、エッ、最些と優なるお兄上かと思ふて居つたが、見下げ果てたる御了簡、イデ是れから鶴崎の家に御案内を願ひ、我乘り込んで兄とは云はさぬ、眞二つに仕らん、冥途に座する御父上が草葉の蔭でのお歎きは一方なるまい」と一徹短慮の忠三郎でございますから、血相を變へて申しまする、山本は之れを宥めまして　山本「マア〳〵　忠三郎殿、急いて物事を仕損じめさるな、之れには種々事情があります、まづ氣を落着けて拙者の言ふことをお聞き下さい、實は鶴崎方へ養子に行かれたと云ふのは別

儀に在らず、必ず陽氣浮氣で參られたのではない、洛陽信國の刀を手に入れたい爲に斯くの次第柄、今に其刀さへ手に入れたら、鶴崎方を飛出して來ると、チャンと事が決まつて居るのでござるから一時は腹も立たうが、其邀のところをお考へあつてお沈着を願ひたい　忠三「左樣でござるか、さう云ふ積りがあつて仕て居ることなら己むを得ない、がさう聞くまでは拙者も腹が立ちましたわい　山本「そりやア御尤もでございます、併し忠三郎殿、何か變つたことでもありましたか　忠三「イヤ山本氏、長らくお世話に預かりましたが、實は敵が伏見戰爭に於て日々功名を現はして居ると云ふことを、私が手に取るやうに聞いて居りまして伏見戰爭へ乘り込まうと思つて出て參りました　山本「エーッそす、そこで梅若屋から無理に暇を取り、マア是れから兄弟揃ふれは好いことをお聞きなされた、然らばお兄上にお知らせあそばせ　忠三「一寸私は行つて參りまする」と其儘忠三郎は表へ出ま

して、大略山本より聞いてござりまするから、鶴崎の屋敷の表へ出て來た、併しズッと内方に這入りまするとなに用事で來たのこと、何から何まで分つてしまふから宜しくない、是れは何とかして密々でお兄上に會ひたいと思ふたものでございますから、門の外でウロ〳〵いたして居ります、此時七之丞は何心なく玄關の障子をソッと開けまするとと、忠三郎の姿が見えたものだから、ハッと思つて居る、忠三郎は門の横手からチョイチョイと手招きをする、之れを見た七之丞は　七之「ハテナ、弟が手招きをいたして居るのは、ハ、ア敵の所在でも分つて知らしに來たのではあるまいか、人に見られては相成らぬ」と密と下駄を履き、門外に出て參り　七之「舍弟ではないか　忠三「お兄上　七之「何か變りし事があつたのか　忠三「敵は伏見戰爭で日々の功名、それが爲に土州樣への歸參が叶つて居るさうでございます、就て

は是れから乘り込んで敵討を致しませう　七之「フーム、さうか、それは好いことを知らして來た、其方は座摩の前の山本氏の所に歸り、身の準備をいたして居れ、我も當家の主人より暇を取つて直ぐに參るであらう　忠三「それではお兄上、少ども早う　七之「如何にも承知をした」と云ふので其儘忠三郎は山本の宅へ戻つて來た、此方は七之丞が何う云ふ工夫で暇を取らうかと考へて居りましたが、やがて内方へ入り込んで來ると男の主馬が　主馬「マア、これ婿殿や　七之「お舅には何か御用でございますか　主馬「マア其所へお座りなさい」と云はれたから七之丞は舅の前にピタリと座りますと、主馬は片傍に宣德の火鉢があつて、それに火が這入り、大箸が附いて居る、其の火箸を取り、中の煥を弄りながら　主馬「エ、婿殿や　七之「ハイ　主馬「お前が私の家へ養子に來て吳れてから、夜となく昼となく餘り戸外には出ない、それに先刻暫間見たやうな者がお前を呼び出しに來て、何か染み〳〵話を

して居つたが、あれは何う云ふ縁合の者であるか、一通り物語りをして聞かせなさい」と言はれて七之丞はハッと胸に五寸釘を打たれる思ひにて、グッとばかりに詰りましたが、さて今となつては隠すに隠されぬ場合でございますから、兩手を盛に突き、頭を聊か低げ七之「恐れながらお身に申し上げます、私は今まで貴方に隠して居りましたが、實は水戸の藩にて千二百石炭谷虎之助の一子七之丞と申しまする、我父は過ぐる慶應元年六月六日の夜京都松原磧に於きまして、土州の家來山本羽太郎と云ふものに討たれました、依つて其の敵討をいたさんと當地に出て參り、諸所方々を捜すと雖も殆んど手掛りもなく、座摩の前の山本氏の所で御厄介になつて居りまする折柄、我父が殺されまするときに敵に奪られました洛陽信國と云ふ名劔は、御當家がお買求めになつて居ると云ふことを聞いたものですから、實はお身の所から御所望に預かつたを幸ひ、後には其刀を譲つ

て貰ひたいと云ふの考にて、斯く御當家に對して養子に參りましたやうな次第、今までは斯くとも申し上げずに、貴方を欺きまして誠に相濟まぬことでございます、何うぞ一つ御了簡のほどを願ひたい」と聽いた鶴崎主馬は驚いて主馬「ア、さうであつたか、して見りやアお前樣は敵討の身の上、而も水戸家の御家來で千二百石も取られた人であるか、こりやア何うも今までの失禮は平に免して下さるやう、如何にも我は洛陽信國と云ふ名劔を刀屋善兵衛より買求め、我家の寶といたしてあるが、イヤ斯う婿と舅とになつた間柄であるから、如何にもお前樣に其刀は譲らうが、併しお前樣が敵を討つた後は水戸に歸らぬければならぬと云ふ義理もあらう、なれども縁あつて私の家へ養子に參り、聞けば娘も今月は早や五月の岩田帶、して見りやア是れが最早切つても離れぬ一つの縁、飽くまで鶴崎の家を立てゝ貰はねば相成らぬ、其考で宜しく願ひたい」と聽いた七之丞は花

も實もある武士だから、斯う言はれて見ると否とも云へません

七之「お貞、有難い其のお言葉、水戸の藩と雖も敵討に就て、知行は殿様に差上げ、今は浪人をいたして居る身の上のことでございますから、將來は萬事宜しくお願を仕ります」　主馬「して今暫間見たやうな者が來て居つたが、あれは何だナ」　七之「實は私の舎弟忠三郎と申す者でございますが、敵は伏見戰爭で日々功名と云ふことを手に取る如くに聞いたから、私の所へ知らせに參りましたやうな次第でございます、就きましては一寸お暇を戴き、首尾よく敵討を遂げた上、直様立歸つて參りますから、此點の道理をお聞分け下されて、宜しくお暇のほどを願ひます」　主馬「フーム左様か、それなれば仕方がない、芽出度本望を達した上は直ぐに歸つて下さるやう」　七之「承知を仕りました」と云ふので茲に鶴崎主馬は、是れから奥様にも娘さんにも其話をすると、母子とも喫驚致しましたが、さて敵討のことなれば止める譯にも行

かない　主馬「アヽこゝや娘や、夫が敵討の門出ぢや、其方が準備をして遣らぬか」　まち「畏りましてございます」と涙ながらに妻のおまちは夫の衣服を取出し　まち「サア我夫様、之れをお着しあそばすやう」と出して來たから七之丞は之れを身に纏ひ、準備萬端が出來まする　七之「お父上、左様なれば行つて參りまする、主馬「アヽ敵討のことなら何れ得物もあるであらう、洛陽信國の名劍はお前が敵を討つて歸りし後屹度渡し申さん、今はまだ渡すことが出來ない、平素お前の帶挾んで居る刀を以て本懷を達して來まするやう　七之「承知を仕りましてございます」と七之丞は母親にも我妻にも別れを告げまする、一同玄關まで送り出す、殊におまちは身重になつたことでもありますから、一入分れを惜み、顔に袖を押し當てゝ心の中に泣くばかり、なれども武士の娘、此場に臨んで卑怯未練の振舞をいたしては相成らぬと、やがて心を取直し、兩手を突いて居るうちに、七之丞は鶴

崎方を後にいたし、座摩の前の山本の所に出て來て、早速弟忠三郎に面會をいたし、山本にも長らく厄介になつた謝辭を述べ茲に兄弟打揃ひ、伏見戰爭の中に乘り込んで參りまするとお話でございます。

第六席

茲に炭谷兄弟は伏見戰爭の中に乘り込んで、敵を討たねば相成らぬと、出て來ることは來ましたが、戰爭の場所には中々用事なくしては入り込めません、斯う云ふ場所ではみな合語と云ふものが設けてある、既に元祿の年間に赤穗浪士の大石內藏之助等が吉良義央の屋敷に亂入致しました、夫れは半時々々で合を以て首尾よく亡君の本懷を達しました、山と河との合語語が變るものですから、どうも餘人が戰爭最中へは入り込むことが出來ない、殆んど當惑をいたして居りました間に、遂に戰

爭も止みましてございます、そこで仕方がない、以前厄介になつて居りました宮川町松原下る大塚慶藏の方へ出て來まして、

七之「大塚殿、久々でござる、先きに大阪へ乘り込んで難苦勞を致しましたが、不運にも敵に得出會はず、聞けば伏見戰爭で敵は土州家に歸參が叶ひ、日々の功名と云ふことでござるから伏見に乘り込んで來ましたが、どうも戰爭中には好き手續きもなし、入り込むことが出來なかつた間に戰爭は終局になりました、實に心外なことであるが、敵は土州屋敷に居るものでございらうか、如何でござらう、どうかお取調べに預りたい」と言ふと、大塚慶藏が之れを聞いて

慶藏「左樣でござるか、貴殿方御兄弟は實にどうも敵を討ちたいが爲に、艱難苦勞のほど御推量なさいます、宜しい、夫れならば二宮町の鳥屋金助を呼んで彼れは兼ねて土州樣のお屋敷へ出入の叶つた身の上だから、彼れを以て取調べさせることに致しませう」と夫れから鳥屋金助を呼

ひました、金助は出て來て、炭谷兄弟の顏を見ると　金助「イヤ旦那、誠にお久しうございます、併し私も蔭ながら心配をいたして居りましたが、お親父の敵はもう討てましてございますか、

七之「未だ討てないのでござる、誠にどうも殘念な話ぢやが、苦勞の仕損、まだ敵を得討たぬで居る、實は敵は土州に歸參が叶つて居るやうだ、夫れでどうかお前樣に土州の屋敷を一ツ取調べて貰ひたいのだが、何とお願をする譯には行きますまいか、

金助「エ、宜しうございます、ぢやア私が明日から土州の屋敷へ入り込んで取調べて參りませう」と是れから烏金が其の翌日土州樣のお屋敷に入り込みまして、篤と取調べて見た上、大塚の道場へ歸つて來て　金助「併し御兄弟、殘念なことでございますが當度長州樣、尾州樣、大垣樣、鍋嶋樣、彦根樣、此邊あたりが奧州征伐にお出でになるので、敵の山本も奧州地方へ出張り、只今不在でございます　七之「エーッ、左樣でございるか、して見れ

ばもう土州屋敷には居りませんか　金助「如何にも居りません　七之「殘念なことをいたした　金助「其中に何か好い手續きがあつたら、又私がお取持を仕りませう、御緩りと當家で御厄介におなりあそばすやう、御退屈の際には私の家へ些とお遊びにお越し下さい」と懇切に暇を告げて烏金は歸つてしまひました、後に殘つた兄弟は　七之「ぢやア奧州戰爭に乘り込みたいが、何か是れにも手續きがなければ戰爭の場所には行ける譯でもなし、殆んどどうも困つたことであるわい……大塚氏　慶藏「何でございるか　七之「以前世話になつた清水屋清兵衛に會うて一言の禮を述べたいと思ひます　慶藏「左樣でございるか、然らば私はあの近傍に一寸用向がございるから、是れから行つて參ります　七之「夫れではどうも甚だ恐れ入ります　慶藏「イヤ序でございるから別に御心配には及ばぬ」と大塚慶藏は身の準備に及び、宅を立ち出でまして、六波羅裏門多聞町清水屋清兵衛の宅へ出て參りますと、表に女房が居り

ますから　慶蔵「清兵衛は居るか
すか　女房「オヤ大塚の旦那様でございま
女房は両眼に涙を浮べ　女房「實は旦那様、さう云はれまするとの種でございます　慶蔵「ア、病氣でもいたして居るのか、永らく會はないでナ　女房「エ、病氣なら又全快すると云ふこともございますが、伏見の戰爭にお辨當持に雇はれて參り、青砥橋と云ふ所で鐵砲の彈丸を七ツとか八ツとか受けまして、其儘死んでしまひましたのでございます　慶蔵「エ、ッ、彈丸に當つて死んだとそりやア何うも可哀想なことをした、拙者は何も知らなかつたが、して見りやアお前も子のない身の上、定めて困るであらうけれども仕方がない、又其の中には好い風も吹くことがあらうから、心配をいたさず、心を氣樂に持つて暮すが宜い　女房「有難うさまでございます　慶蔵「して其の亡骸と云ふものは何所に葬つてあるのちや　女房「鳥邊山の本信寺に葬つてございます　慶蔵「左樣

か、また拙者も折々は墓參りをいたして遣らう、イヤ大きに邪魔をいたした」と其まゝ大塚は清水屋を立ち出で、自分の用事は途中で濟まして置いて、宅に歸り　慶蔵「ときに炭谷御兄弟、可哀想に清水屋は伏見の青砥橋に於て、戰爭の爲に鐵砲の彈丸を喰ひ、一命を終つてしまひましたぞ　七之「エーッ、それは可哀想なことを致しましたな　慶蔵「鳥邊山と云ふ所に懇に葬つてあると申して居ります　七之「左樣でござるか、彼れも輕卒漢ながら、中々親切な男であつた、ちやア是れから墓參りでもいたして來て遣らう　慶蔵「左樣でござるか、それでは御緩り行つてお出でなさい　七之「御免下さい」と兄弟は身の準備に及び、深編笠を目深に冠り、ドシ〳〵と出て來ましたのは鳥邊山、見れば立派なお寺小門を内部に潜り、寺男に會ひまして　七之「清水屋清兵衛の墓は何所ちやな　男「ハイ清水屋さんのお墓なら其所にございます」と云ふので、見ればまだ葬つて間のないことでございますから

質にどうも清潔にいたしてございます、其前に來つた炭屋の兄弟が、香花を手向け、掌を合せまして　七之「ア、清水屋清兵衛、其方は親切な者であつたが、不意に一命を棄てたさうだ、誠に殘念であらうが、未來は迷はずに、一蓮托生、成佛をいたせ、南無阿彌陀佛〳〵　頓生菩提」と充分なる回向を手向け、早速此所を後にして、ドシ〳〵と出て參りまする途中、忠三郎は立ち停まり　忠三「お兄上」　七之「何だ　忠三「一寸小便が催して來ました、失禮を致しまする」と云ふので道の片傍で小用をいたして居りまする、兄の七之丞は左樣なことを待つて居る譯には行かないものですから、たゞ一人足に任せて歩いて來ると、向ふの方より年齢二十一二であらうと云ふ男女兩名が、顏色を變へ、髪を亂し跣足で以てドン〳〵逃げて來たが、いま七之丞の姿を見ると、突然兩袖にグッと取縋り　男女「旦那樣、私の一命を奪りに來る者がございまする、何うかお助けのほどを願ひます」と云はれて

喫驚りいたした七之丞が　七之「コリヤ〳〵　突然にどうも一命を助けて呉れなどゝは穏かならぬ頼みぢや、如何いたしたのか」と云つて居る所へ、向方から年齢二十五六、ポッテリ肥わた血氣壯んの若者、褌一筋の素ッ裸、提鉢卷を締め込みまして、夏の西瓜賣の言草ではありませぬが、白い所があつたら錢ア一文も要らねへと云ふほどに、身體に膏割がいたしてある、その見ても恐ろしい身體を放り出し、いま一人の同じ樣な荒くれ男と共に、ドシ〳〵出て來たが、炭谷の前になると足を停め、グッと睨め附けまして　男「エ、旦那、其の男と女はお前樣に何と云つて居るか知りませんが、何うか私等にお手渡しのほどを願ひたうございます　七之「イヤそれは渡して遣らぬこともないが、拙者に助けて呉れと縋つて居るのぢや、だから看す〳〵殺すことの分つて居る其方に手渡しをすることは出來ない、一体何う云ふ事情ぢや　男「エ、何うの斯うのと云つて貴殿方にお話をするや

うなことぢやアねへんです、兎も角も此方へお手渡しを願ふたら宜いのですから、お頼み申します　七之「左様なことで手渡しは罷りならぬ、痴け者奴が、控へて居らう」と言ふと、憤然と腹を立てました二人の男、口を揃へて　男「オイ侍、此方は侍だと思ふから只管頭を低げてお願ひするのだ、さうすりやア増長しやアがつて、何だ、渡すことは出來ねへと、出來なけりやア乃公も力盡で奪つて見せて遣らう、必ず後悔するな、汝等のやうな侍に恐れてへイ〳〵云つて居るやうな我々ぢやアねへや　七之「オヽ其の一言捨てゝは置けない、成らば手柄に向つて來い　男「エヽ、行かなくつてサ、サア兄弟、準備をしろ　○「オッと合點だと二人の輩は既に拳骨を握り固めんとする所へ、忠三郎がドシドシ出て參り、ジッと此の狀態を眺めまして　忠三「コリヤ〳〵、何だ、汝等は兄上に向つて不禮なことを申す奴だ、承知はせぬぞ　男「ナニッ承知をするもしないもない、乃公達の仕事の妨害

をされるに依つて、此方にはそれだけの考があるのだ　忠三「馬鹿なことを云へ、汝等が仕事の妨害なんて、何が仕事だ、馬鹿者奴、拙者だぞ　男「拙者だつて笠ア冠つて居ちやア顔が分らねへ面を見せろ　忠三「ムヽ、ヨシ、恐れ入るなよ」と忠三郎は笠の緒を取つて後に跳ね除け　忠三「拙者だわい」と云へば二人の奴は其顔を見てアッと驚きながら、突然地上に座り込み　二人「こ、こ、これは若親方でございますか、誠にどうも暫らくお目に掛りません、御機嫌様でございます」と云ふ此奴等は何所の者だと云ひますと、二宮町鳥屋金助の乾兒で、西の川の平六、大佛の權三と云ふ二人の者でございます、忠三郎も以前は鳥屋金助の若者となつて、會津の小鐵さんなどゝ兄弟分の盃をいたし、水戸の忠三若親方と一時賣出したものでございます、是等はもう自分が目下に使つた若い者でございます、だから顔を見るが否や二人の奴は喫驚したので　平六「若親方、惡いことでございまし

た、何うかお助け下さいない、サア汝達ア其まゝ歸つて行けい　平六「ヘイ、ちやア御免なさい」と其まゝドン〳〵と二人は歸つてしまひました、後に殘つた兄七之丞が　七之「弟、其の方はあの者を知つて居るか　忠三「ハイありやア私の若い野郎同樣でございまして、實ア遊樂社會で飯を喰つて居るときに、あゝ云ふ者を使つて居りました　七之「フーム、あゝ云ふ者の所に、行くと其方は中々顏が宜いナ　忠三「そりやア又道樂者の仲間は別でございます　七之「フーム、さうか、あゝコリヤ〳〵それなる所の男女兩名、汝達は何所の者ぢや　男「ヘイ私は千本の織屋の番頭でございまして、此女は上七軒の小福と云ふ勤人でございます　七之「ム、ー、それが如何した　男「私はツヒ親方の錢を盜み出し、此女に大分に入れましたが、お互ひにまだ年の明かぬ身の上でございますから、夫婦になることも出來ませんし、と云つて年明きまで待つと云ふことも出來な

いものでございますから、實ア二人で何所かへ驅落をしやうと相談を決めました、そこで今日はお互ひに親方の宅を拔け出しドシ〳〵と此方へ驅けて來まする途中、あゝ云ふ若い衆に出會ひまして、酒代を强請り掛けられ、お斷りをすると云やア一命を奪つてしまふと言つて、後から追ッ驅けて來ましたところを、ヤア貴殿方のお助けに預りましたやうな譯でございます、　七之「汝達は何うも宜しくない奴だナ、勤人なら年の明くまで親方大切と勤めねばならぬぢやないか、殊に又伏見戰爭の揚句何れの商賣も不景氣であるから、抱への親方も心配中であらう、それを顧みず、驅落をいたすなどゝは了簡違ひの奴だ、サア左樣なことはもう廢めて、お互ひに主家へ歸り、年さへ明いたら又緣のあるものなら何うでも夫婦になれるぢやらう、白痴者奴が、如何ぢや　男女「恐れ入り奉りましてございます　七之「拙者が伴れて行つて遣るから案内をいたせ　男女「有難うございます」と云

ふので茲に炭谷兄弟は男女を引連れまして、各々主家へ送り屆けました、すると先方の喜びは一方ならず、男女のものはお互ひに充分異見を喰ふことに相成りました、話頭一轉兄弟は大塚の許へ歸り　七之「大塚殿、ア、清水屋の墓參りをして來ましたが何う考へて見ても我々は奥州戰爭へ乘り込んで敵討をいたしたいと心得まする、何か貴殿の方に一ッ好いお手段はありますまいか　慶藏「サア私も何とかしてと思つて居るのでござるが、今以て好い思案も出ません、殆んど困難をいたして居るやうな譯でござる」と云つて居りますと戸外の方から　○「先生、お宅でございますか」と云つて這入り來たのは松田太郎左衛門と申しまして、以前大塚の道場に居りました人間でありますが、今では暇を貰ひ、長州樣の人足廻しの頭をして居る男ですから　慶藏「オ、松田ぢやアないか　太郎「左樣でございます　慶藏「久しく會はないが、壯健で宜いの　太郎「有難うございます　慶藏「何う暮らして居る

のぢや　太郎「エ、長州樣の人足の頭をいたして居ります、此度長州樣が後詰で以て奥州地方にお乘り込になります　慶藏「戰爭の後詰か　太郎「左樣でございます、其儀に就て私は荷物を運ぶ人足を調達に廻つて居ります、もう二人ばかり足らないので殆んど困つて居るのですが、先生の方にさう云ふ者はありますまいか、　慶藏「フーム、さうか……待てヨ、丁度炭谷の御兄弟が戰爭の中へ乘り込みたいと云つて居らるゝ所ぢや……アヽヨシ、拙者の方にナ、中々身分は廢つたお方ぢやないが、今は世に零落れて輕々しい身分となつて居らつしやるお方がある　太郎「左樣でございますか　慶藏「其のお兩人を何うか一ッ人足に使つて上げて呉れることは出來なからうか　太郎「そりやア結構です、來て下さいませうか　慶藏「エ、夫りやアもう行つて貰ふことにするわい　太郎「ぢやア明日は大佛前で勢揃ひでございますから、何うか朝早々からお越しのほどを願ひます　慶藏「如何にも承知をした　太郎「姓名は

何と仰しやるのでございます　慶蔵「フム、一人の姓名は七平、一人は金八と云ふのぢや　太郎「ヘイ〳〵、七平さんに金八さんです か　慶蔵「如何にも左様ぢや　太郎「イヤ承知を仕りました」と其名を手帳に控へまして、ブイと歸つてしまひました、後に大塚は兄弟に打向ひ　慶蔵「サア好い手續きが出來ましたぞ　七之「イヤ只今蔭ながら聽いて居りましたが、大塚氏、何うも尊公のお執成、千萬辱けない、本懷さへ達しますれば何れ萬分の一なりと御恩返りを仕ります　慶蔵「イヤ武士は相身互ひ、殊に手前こそ貴方のお父さんにお執成に預かつた身の上、御禮は痛み入ります」と云つて居りまする間に其日は暮れました、早くも翌日に相成りますること、人足のことでございますから、羽織袴大小刀と云ふ風姿にも行きません、それ相當に風体を拵へまして、萬一の際の準備を充分に仕り、大塚慶蔵に別れを告げ、スタ〳〵と出て來ました大佛前、來て見ると、もう人足共が集り、哩々と顔附を

いたして居ります「エ、私は大塚さんの道場から參りましたものでございます　太郎「ア、七平さんに金八さんかナ　七平「左様でございます　太郎「イヤ御苦勞さんでげす、どうやら是れで顔が揃ふた鹽梅ぢや、ぢやア其所に荷物がある、それを皆手分けして擔いで呉れるやう　皆「承知を致しました」と云つて居りましたが、多くの人足は皆重い荷物を持たない、我勝にと輕い荷物を持つて出掛けまするが炭谷兄弟は一向左様な格合は存せぬものでございますから、間誤々して居る間に、一番後に取り殘され、大きな長持を一ツ擔いで行かねばならぬことになり、兩人はドッとこれを擔いで見たが、何うして〳〵シッカリ重い、暫らく擔いで行くと肩が腫れて來る、足が痛くなつて來た、それはさうでせう、千二百石の家に生れた身の上だから無理もございません、他の者よりは半丁遲れ、一丁遲れ、或は二丁遲れして、人が時々道端に休息をいたし、一服して立たんとする時分

に漸う其所に着き、ます〳〵肩を腫らせ、足を痛め、一命からがら、何うやら斯うやら三島の驛まで出て參りました、ところが三島と小田原との間は御承知の通り箱根山でございまして、東海道一の難所でございますから、他の人足はドシ〳〵と荷物を擔いで上つて行きますから、兄弟も仕方がない、同じ長持を擔い で、箱根八里の難所をば一服しては上り、休んでは上り、到頭早や頂上まで上り詰めて見ると、先きの人足は充分に休んでしまひ、荷物を持つて出立した後で、其邊には一人も居りません

七之「ヤレ〳〵また一服して行かうか」と荷物をドンと其所に下した炭谷の兄弟が

忠三「ア、お兄上、敵討つ身の上は實に大層な苦勞をせねばならぬものでございますな

七之「如何にも左樣ちや併し弟、其昔伊豆の國は八幡の城主河津三郎祐泰と云ふ人の遺子一萬丸に曾王丸、成長の後は兄は曾我の十郎祐成、弟は五郎時致と相成り、建久の四年梅雨月、頼朝公が富士の裾野の卷狩をあそばしたときに、其の陣所へ忍び込み、頼朝公のお側役工藤左衛門尉祐經を、十八年の天津風艱難苦勞をあそばした甲斐あつて、首尾よく討ち取つたと云ふことも ある、其のお方は此の箱根の權現に祈請を籠め、其の御利益を受けて敵討をしたと云ふことである、我々は曾我兄弟ほどには行くまいが、當所を通り掛るこそ幸ひ、是れから名題の權現に參詣をいたし、御利益を受けて行かうではないか

忠三「御尤もでございます」と云ふので、是れから兄弟が箱根權現に參詣をいたし、奥州二本松の乘込と云ふお話でございます。

第七席

さて兄弟は箱根權現樣に出て參りまして、嗽手水で身を清め、社段の此方に近附き、其所に座り、ポン〳〵と拍手を叩いて、

七之「南無箱根權現樣、昔の曾我の兄弟は御神の御利益を以て、

十八年の艱難苦労の末、首尾よく親の敵を討つたと承はります我々も御承知の通り、敵を討ちまする身の上、一時も早う本懐を達せられ、水戸の御殿に御奉公の出來るやう、何分御利益のほどを宜しくお願ひ申し上げ奉ります、御恩は決して忘れはつかまりませぬ」と人に物言ふ如く、懇に祈誓を籠め了り、其所で暫く休みまして　七之「舎弟、また出掛けやうか　忠三「お兄上、宜しうございます」とまた荷物を擔いで戚を引きながら、ドシ〳〵箱根山を下りましたが、到頭到着致しましたのは江戸表長州様のお屋敷でございます、そこで人足共は人足共で道中の勞れ休みと云ふことに相成りました、すると長州様は後詰に來たお方でございますから、先きに乗り込んだるお大名方が危くならぬと云ふと、戰場にはお出でにならない、だから江戸までお出でになつて、其の成行をジッと見て居られます、何うしても御出立にならぬ、と云ふのは何時のことか分りませぬから、人足共に

はお暇が出ません、そこで兄弟のものは長旱疲勞も休まるし、早く先方に行きたい〳〵と思つて居ります、なれどもお上からのお言葉が下らねば行くことが出來ません、日々退屈をいたして居ります　七之「なア、お仲間の衆　○「何ですナ　七之「戰爭の場所へは何時乗り込まれるでせう　○「何時だつて、そんなことが分るものか、先きに行つた人が危くならねば此方はお越しにならない　七之「左樣ですか、困つたことですナ　○「何の困つたことがあるものか、そんな所へ乗り込むのは一命を奪られに行くやうなもの、それよりも斯うして江戸に遊んで居る方が氣樂だ　七之「イヤ貴君方は然うかも知りませんが、私は早く乗り込みたうございます　○「ハ、、、、、お前達のやうなものとは意氣が合はぬ　七之「其方へ行つて居て呉れ」などゝ云つて居りましたが、それは戰場へ乗り込んで敵を討たうと云ふものと、一方は何も目的の無い身の上でございますから意氣が合はぬ筈です、右左する間に

奥州二本松へは土州様が向つて居られましたが、戰爭は敵の爲に危い、早速後詰のお乘り出しを願ひたいと、江戸表へ御報知があつたものでございますから、愈々長州様がお乘り出しと云ふことになりました、サア人足共は荷物を持つて行かなければならぬ

○「オイ七平、金八、汝等は碌でもない、戰場に行きたい〳〵と吐すものだから、善い事は言ひ當てねへが、惡いことは言ひ當てやアがる、何うでも我等は行かねばならぬやうになつた

七之「イヤ結構でございます

○「何が結構なことがあるものか、汝等のやうな奴は仕方のない奴だ」と小言を云つて居りました、尤も外の人足共は江戸までは足が早かつた、けれども戰爭の中へ行くのは嫌でございますから、江戸から向方は足が遲い、此方は炭谷兄弟がコロリと變つて、江戸までは足が遲かつた、けれども是れまで重い荷物を擔いで來て、もう大分に道中が馴れて居りますから、ドシ〳〵と外の者よりも先方に出掛け

る、之れを見た他の連中は

○「ハヽヽヽ、彼奴等は輕卒漢ぢやナ、死に〻行くのに嬉しさうな風をして行きやアがる、何と馬鹿者ぢやアないか」と吃きながら後から附いて來る、ところが兄弟は戰爭の中へ乘り込んで、ジッと動靜を探つて見ると、運が惡いときには仕方のないもので、敵の山本羽太郎は二本松の戰爭に於て、敵に奪られました錦の御旗を取返すに就て、大勢の敵を引受けて働いたに依り、身に數ヶ所の手傷を受け、戰場が勤まらないものでございますから、道中駕籠で京都に送られたと云ふことを聞きましたので

七之「ハテさて殘念ぢや、此所まで來て敵に會はれぬとは情ない、けれども仕方がない、兎に角敵が居らぬとして見りやア此樣な所にジッとして居る場合ぢやない、是りやア早く此所を乘り出して、兎に角東海道を追ひ打掛けて討つことにいたさう、折角遠い所まで重い荷物を擔いで來ながら、さても來甲斐のなかつたことではあるわい」と兄弟

は望を失ひながら、其のまゝドシ〳〵と戰爭中を拔け出して來まする途中　忠三「ときにお兄上　七之「何だ　忠三「餘り迂途でもございませぬから、一應本國へ立寄りませうか、　母上や妹に永らく會はぬで居りますから、一度御機嫌伺ひかた〳〵立寄つては如何でございます　七之「それも宜からう、屋敷も如何なつて居るか分らない」と早速兄弟が水戸の在蜂上村と云ふ所へ出て參りますると、此所に乳母のおりつと云ふ者がある、其家に出て來ましてば若様でございますか、お兄弟連で、能うこそお越しに相成りました、久しくお目に掛りませんが、お互ひに何うも御立派なお身の上にお成りあそばしましたねへ　忠三「イヤ成長をするごとはしたが、其方も聞いて呉れて居るであらう、親が討たれてナ　りつ「ハイ、それは蔭ながら承はつて居ります、嘸かし御殘念でございませう、マア何うぞ此方へ……　忠三「併し乳母や、妹は如

何いたして居るか、一寸マア尋ねに寄つたやうな譯ぢや　りつ「左様でございまする、貴君方は何もまだ御存知がございませんか　忠三「ア、故郷のことは一向に存じない　りつ「左様なら申し上げますが、奥様は旦那様の殺されなされたことをば御心配あそばして、ツヒ半年ばかり前にお亡くなりあそばしましてございます　忠三「エーッ……もう此世に居らつしやらぬか　りつ「左様でございます　七之「我々がどちらの親も亡くなられたことを知らぬで居ると云ふのは、親不孝の大したものぢや、ア、濟まぬことだわいして妹のお菊は何うした　りつ「お妹御様はお母様がお亡くなりあそばしたに依つて、妾が一人國に居つても仕方がない、京都に參れば二人の兄様が居らつしやるのだから、妾は是れから京都に行つて兄様にお目に掛ると、お國をお出ましに相成りましてございますが、まだ貴郎方の所へはお立寄りがございませんか　七之「エーッ、それは一向に存せぬ、して屋敷は如何なつたか、

リつ「お屋敷は憐れな狀況に相成りまして、最早跡形もないと云ふやうな始末でございます　七之「それも致方がない、それでは母上の亡骸は何所に葬つてあるのぢや　リつ「ッと向方の正念寺と云ふお寺に御埋葬がしてございます、妾が御案内を致しませう」と是れから乳母の案内に依り、兄弟はお寺へ出て參りまして、和尚に面會をいたし、參詣の旨を述べまするとと　和尚「それは能くこそお參詣をあそばした、拙僧もお交際を仕らう」と和尚も共に其所へ出て來て呉れまして、茲に兄弟は母親の墓に參詣を濟ませ、それから一室の方に通り、お茶の一ッ煎も饗ばれました、

和尚「御兄弟の衆、先づ今晩は當山にてお泊り下さるやう　七之「イヤ有難うござる、一命があつたら又御厄介になりませうが、此度は少しく心急きで居りますれば、是れにてお暇を頂戴仕ることに致します」と云ふので、茲に懇ろに和尚や乳母に別れを告げまして、兄弟がブラ〳〵と出て來る途中、忠三郎は偶爾と足を停め　忠三「お兄上　七之「何ぢや　忠三「私は驅足で暫らくお先きに御免を蒙ります　七之「一ッ緒に行つたら宜いぢやないか、何故其方は遽に驅足をするのぢや　忠三「向方からアノ子を負うて參りました女がございませう　七之「ム、ー　忠三「あれは蜂上村の庄屋の娘お時と申しまする女でございます　七之「ア、其方は何うして知つて居るのぢや　忠三「私が國に居りまするときに、酒と女と博奕の爲に父上から勘當を受けました、それから私が彼方此方と徘徊うて居る間にあの女に手を附けまして、到頭姙娠となり、其の五月の岩田帶のときに、私は其儘女を打棄てゝ國を出たのでございます、いま負つて居りまする兒は私の子に相違ございません、あの女が私の顔を見たら其子を渡さうと言ふに違ひない、敵討の身の上にて、如彼云ふ子供を受取つては始末に負へません、一寸お先きへ御免を蒙ります　七之「ハ、、、、汝は仕方のない奴ぢや、然らば勝手にせよ　忠三「左様なら……」とタッ〳〵ッタタ

ッと忠三郎は先方に走り掛けました、すると向方から一人の寺男らしい者を伴れて參りました右のお時と云ふ女が　時「オヤ何だらう、妾の姿を見るが早いか、大屠足を速めて逃げるのは誰だらう」と偶爾と氣が注いたものでございますから、近着いて來るなりジッと斯う笠の内を眺めて見ると、頻りに俯向いてをりましたが、是れぞ炭谷忠三郎に相違ございませんから　時「アレマア貴方は炭谷の忠三郎樣ではございませぬか、暫時お待ち下さいまし」と言葉を掛けられた忠三郎は、聽かぬ振をして一散に其場を逃げんとする、お時は伴れて居る男に向ひ　時「コレ喜兵衛や、氣の毒ながらあの人を捉まへてお呉れ　喜兵「宜しうございまする」とバラ〳〵と喜兵衛と云ふ男が飛んで來て　喜兵「マア旦那、お待ちなすつてお呉んなさい」と突然後の方からグッと大鍬の鐺を取つて引留めた、此方は鐺返しに掛けやうとしたが、一生懸命に握つて居るから掛らない、其間にお時も飛びつけて來て　時「忠三郎樣、逃げるとは卑怯ではございませんか、待つて下さい」と云はれて忠三郎は心の中　忠三「アッ、仕損た、斯う云ふことがあらうかと思つたから、拙者が兄上を頼んで、先きにドシ〳〵と出て來たのに、到頭捕まへられてしまつたわい……ア、お時か、誠に久しいナ　時「忠三郎樣、貴方のやうなお方はござんせぬ、兎に角話をすれば長いことでございますが、言ふだけ駄目ですからお話は致しませぬ、けれども此子は貴方のお子でございますが、貴方の所在が分らぬに依つて、產んだまゝで以て、未だ名前も命けず、其儘育てゝ居ります、此子があるばかりに妾は何所へも緣附が出來ませぬ、親の家には他人が這入るものでございますから、ジッとして居ることも出來ません、ッヒ向方の萬念寺と云ふお寺の和尚樣は妾の伯父さんに當りますから、其の伯父さんの家で御厄介になり、樫家の人にも遠慮をしながら日を送つて居るやうな次第柄、貴方に

お目に掛つたら妾は兎に角、此子だけなりとお渡しをいたさうと思つて居りました、是非此子はお受取りを願ひたうございまする　忠三「イヤそりやア尤もぢやが、拙者もナ、お前も聞いて居るぢやらう、敵討と云ふ身になつて居る、今其子を受取つては何うすることも出來ないから、マア育て序ぢや、今暫時育てゝ呉れ　とき「イエ〳〵嫌でございます、飽くまでお斷りを致します、何うでも伴れて歸つて貰はねば相成りませぬ」とそろ〳〵子を下しまして、側へ突着けて參ります、ところへ七之丞が出て來まして　七之「アヽコリヤそれなる所のお時とやら……　とき「貴方は忠三郎様のお兄上様でございますか　七之「如何にも左様ぢや只今聽いて見れば萬々舍弟が惡い、けれども今は大望を抱へた身の上で、自分の身體さへ自由にならざる場合であるのぢや、敵を討ち次第に舍弟は兎に角拙者が屹度其子を受取り、其方には何所までも難儀を掛けぬに依つて、此點を聽き分けて今暫時

の間其子の世話を頼むであらうことはお斷りを致します　七之「左様か、女と云ふものは聽き分けのないものぢやナ、然らば其方が厄介になつて居ると云ふお寺に對して案内をいたせ、和尚に面會つて頼むことにいたさう、　とき「嫌でございますヨ、そんな忠三郎は兩人の案内に依りまして、萬念寺と云ふお寺に出て參り、和尚に面會を致しますると　和尚「アヽ是れは炭谷の御兄弟でございますか、久しくお目に掛りませんが、先づ御健勝でお芽出度うございます　七之「是れは和尚、其の御挨拶は痛み入ります　とこころで只今舍弟から聞けば斯様〳〵の次第拵、實は我々も敵討の身の上であるから斯様な子を伴れて行く譯には參りません　何うぞ一ッ敵を討つてしまふまで、貴方の許に此子をお預かり下さる譯には行きますまいか、屹度御迷惑は掛けぬやうに仕ります　和尚「それは可けません、貴方は兎に角どうも御舍弟の心が

分らない、人の娘に手を附けて置いて、姙娠になつたからと云つて其儘打棄て、行方が分らぬやうになると云ふ、そんな人は恐ろしい、此子がある爲に私の姪は何所へも緣附が出來ない、已むを得ず私の方へ引取つて、世話をいたして居るやうな次第でござる、是非共此子は伴れて歸つて下さい、暫らく預かつて呉れなどゝ鐵面皮いことを仰しやるが、言はれることにも程がある、どうでもお伴れ歸りに與りたい　七之「左樣でござるか、さう仰しやれば已むを得ません……　忠三郎　忠三「ハイ　七之「ア、其方が惡いのぢや、然らば其方が受取つて歸ることにいたせ、どのみち大望を抱へた身の上である　忠三「左樣でございます」と云つて居る間に其子は丁度四歳くらゐでございませうか、忠三郎の側に出て來て　壬「お父樣でございますか　忠三「オ、如何にも拙者は其方の父ぢや、ア、初めて會ふたが、お母樣に今までよく育てゝ貰ふたの、是れからはこのお父さんが育てゝ遣るから、宜

いか、一緒に行くのである　ア、可愛らしいやつぢやわいと頭を撫でた忠三郎が、ホロリと涙を溢し、小刀の柄に手を掛ましして　忠三「コリヤ悴、親が子の一命を奪ると云ふのは無慈悲のやうではあるが、敵討の身の上にて其方のやうなものを引連れて居つては足手纏ひ、迚も敵を討つことは相叶はぬ、それ故に其方の一命は此親に呉れ、是れも親孝行の一ッぢや、必ず親を怨んで呉れるなよ」と云ひながら、突然小刀を引拔いて、颯と殺さうと致しまするから、之れを見た和尚は驚いて　和尚「ヤア待つた〳〵　忠三「何故以てお止めあそばすか、私が我子を手に掛けて殺すのでござる　和尚「イヤ其の心底をお見受け申した上は人を助けるは出家の役目でござるから、ヤアお止まりあそばせ　忠三「それでは止まりませうが、併し私の言ふ通りにお預かり下さるか　和尚「如何にも承知を仕りました、仰せの通り其子はお預りをいたさう、お心があつたら引取つてお育て下さるやう、それと

もお心がなければ拙僧が育てました上、成長の後は剃髪をさせ釋迦の御弟子と致しませう　忠三「それは千萬辱けなうござる、それでは何分宜しくお願ひ申しまする、お時や、斯う云ふ始末柄であるから、頼んだぞよ　とき「ハイ、和尚様さへ御得心なれば、今暫らくの間お預かりを致します、貴郎方は御用が濟み次第にどうかお迎ひのほどを願ひます　忠三「ム、如何にも打棄つて置くやうなことはない」と茲に涙と共に別れをいたした、兄弟のものが水戸在を後に見て、段々と出て來ましたのは東海道宮の驛でございます、尾張屋と云ふ宿屋に泊りまして、一吹して居りまするとき　男「どうかお、湯にお浴し下さいまし　七之「それでは疲勞休めに湯に這入つて來やう」と七之丞が立ち上りまして、湯殿に參り、湯の中に這入り、ダブ〳〵と洗つて居りますと、開戸を颯と開きまして　女「お客様、お加減は何うでござりまする」と顔を突き出した女がある、其女が偶爾と七之丞の顔を眺めま

して　女「ヤア貴方はお兄上様ではござりませぬか　七之「オ、其方は妹のきくではないか　きく「左様でございます　七之「兄兩人が敵討の爲に艱難苦勞をいたして居るのに、如何に婦人とは云ひながら、斯様な所へ來つて水仕奉公をいたし、ウカ〳〵と日を送るなどゝは親に對して不孝の至り、其方を助けては置かぬ、敵討の血祭ぢや、覺悟に及べい」と裸のまゝ湯から飛び出し、突然妹お菊の髻を掴み、ズル〳〵と其場に引据ゑました、このとき其聲に驚いて飛び附け來つた忠三郎が、委細の樣子を聽いて、忠三「ア、お兄上の御立腹は御尤ぢや、憎むべき性根の腐つた此の妹、早くお手討にあそばせ　きく「イエ〳〵お兄上様、是れには仔細がござりまする、妾はお母様に死に別れました後、兄上方が京都に居らつしやると云ふことを承はり、之れを尋ねて共に敵討と心得、たゞ一人國を出でまして、此の宮の驛まで參りましたところ、泥棒の爲に懐中のお金を悉皆奪られ、何うするこ

ども出來ません、そこで妾の考では、女ごときがお兄上様のお側へ行つた所で足手纏ひになる、此所に斯うして水仕奉公をして居れば、敵の山本羽太郎と云ふものは、蔭ながら女好きだと聞きまするゆゑ、萬一又當家に立寄らぬものでもない、其際には油斷をさせ、寢て居る所でも一命を奪り、親の無念を晴らしたいと云ふの一念にて、斯樣な水仕奉公をいたして居りまするどうか此點のところを聽き分けて、不孝の罪はお免し下さいまするやう」と云つて居る所へ當家の主人が出て參りまして主人「マア〳〵そんな譯でございますれば、どうぞ一ッ私に免じて御了簡を下さいまし」と押止めまするから、兄弟のものも漸く止まつて七之「左樣か、女ながらも其邊まで心を碎いて居ると云ふことなれば差許すであらう、だが一緒に伴れ行く譯には行かぬに依つて、其方の所存通り、今暫時當家に勤めて居りまするやう、萬一敵でも來たときには、人相恰好年齢は斯樣々々、其方の細腕でも討てるものなら討つて呉れい、また其間に訪ねて參るであらう」と其夜は三人の同胞が四方八方の積る話をいたし、やがて枕に就きましたが、翌日早く兄弟は此家の主人並びに妹に別れを告げ、早速京都へ乘り込んで參りまして、不圖した所から手蔓を求め、敵を討たんが爲に、土州高知へ乘り込みまするとお話に相成りまする。

第八席

さて炭谷兄弟は宮の驛において、妹のお菊に萬事を申し附け、此所を出立致しまして、兎にも角にも京都に乘り込んで敵を討たねば相成らぬと、宮の濱に參りまするとと、伊勢の桑名へは四里の渡し、其船に打ち乘り、乘合が揃ひまするとと、船頭は舫を解いて、舵を取り、船を漕ぎ出しましたが、追風が好うございまするから、帆を八合に卷き上げました、船頭が樂をす

ると帆が辛度と云ふ譬へがございますが、實に其通りで、海上をドン〳〵走つて居ります、何しろ浪穏かでございますから、乘合が皆取り〳〵の雑話をいたして居ります

○「貴方は何所のお方でございます」

甲「私は越中の富山でございます」

○「貴方は」

乙「私は丹波の篠山でございます」

○「お前様は」

丙「私は河内の瓢簞山……」

○「あぶり出しの辻占見たやうですナ、貴方は」

丁「私は備前の岡山で、米の成る木はまだ知りません」

○「冗談ぢやアございませんヨ、貴方は」

戊「私は備後の福山です」

○「お前様は」

己「紀州の和歌山です」

○「オヤ〳〵よくも山ばかり揃ふたものだナ、貴方は」

庚「私は大阪の四兩三歩三朱と云ふ所です」

○「オヤ〳〵大阪にそんな所がありますか」

庚「ヘイ御靈前でございます」

○「酒落どころではありませんヨ」と皆一同嗽々云つて居る、そのうちに桑名の濱に着船致しまするとと、兄弟は船より上り、其夜は桑名にて一泊いたし、翌日は四日市に出まして、段

段と道を急ぎ、早くも到着致しましたのは咲く九重の花の都でございまして、兄弟は宮川町松原下る大塚慶藏の宅へ參りました

七之「大塚殿、只今でございます」

慶藏「イヤ是れは御兄弟、お歸りあそばせ、併し敵は首尾よく討てましたか」と云はれて兄弟はハラ〳〵と涙を溢し

七之「大塚殿、面目次第もない、此度こそは速に敵を討たねば相成らぬと、つひに恥れませぬ荷物を擔ぎ長の道中艱難苦勞をして、奥州二本松まで參りましたが、敵は戰爭に就て大變な傷を負ひ、駕籠にて京都へ送られたと云ふことを聞き、兎に角東海道を追打を掛けて討たうと思つたが、不幸にして遇ふこと叶はず、又此地に歸つて來たやうな譯でございる」

慶藏「左樣でございるか、それはどうもお氣の毒な次第柄でございる」

七之「併し大塚殿、敵は土州の屋敷に養生をいたして居るに相違ございらぬから、誰か一ッ調べて下さる者はありますまいか、」

慶藏「左樣サ、近來承はるところに依れば、何うも土州公は貴君

方が山本羽太郎を敵と附け狙ふと云ふことに就て、始終敵の方に心を懸けてござると云ふことだから、滅多な着は近者くことが出來ない、殊に我々は土州屋敷には一向出入りを叶ふて居らないから、マア手前が參る譯には行きませんが、併しまた前の通り二宮町の鳥屋金助を呼んで來て、此者に一ツ調べさせることに仕ませう　七之「それでは大塚殿、お願ひ申します」と云ふの て、是れから大塚慶藏が　慶藏「コリヤ下男仲助ヨ　仲助「旦那樣、何か御用事でございますか　慶藏「氣の毒ながら二宮町の鳥金の家へ參つて、一寸來て呉れと頼んで來い　仲助「承知を仕りました」と下男の仲助はヒヨコ〳〵とやつて來た　仲助「親方、今日は　金助「オ、誰かと思へば大塚樣の御仲間、何か御用かナ　仲助「御主人が一寸貴方にお願ひ申したいことがある、今來て呉れと云つて居りますから、どうか御越のほどを願ひます　金助「さうかい、ちやア一ツ行くことに仕やう、待つてお呉んなさい」と待たせて置き

まして、早速身の準備を致します、尤も道樂者でございますから、氣の利いた風体を致しまして、刀の一本も打ち込み、羽織掛けで以て自分の根性は頑固でも二黒花緒の八幡黒、深川轉ばす柾の下駄を履き込み、急いでやつて來ましたのは大塚の道場でございます　金助「旦那、何か御用事でございますか　慶藏「マア此方へ上つて呉れ　金助「ヘイ有難うございます」と鳥金は一室に通りますと、大塚慶藏はお茶の一服も煎てゝ出しまする、金助は之れを見て　金助「毎度どうも來まする毎に結構なお茶を頂戴致しまして有難うございます」とお茶を饗ばれて居りますと、其所へ出て參りました炭谷兄弟は　七之「アヽ、鳥金殿、誠に久々でござる、貴公も御機嫌宜しう　金助「是れは御兄弟でございますか、久しくお目に掛りません、先づお壯健で結構でございます、併し敵の方は何うなりました、私もそれこれと心配をいたして居りまする事でございます　七之「どうも毎度お世話に相成つた

が、金助殿、どうも因果な者は格別なもので、行く先き〳〵で敵を見失なつてしまひ、未だに得討たず、困難をいたして居るやうな場合でござる　金助「それはどうもお氣の毒樣でございますナ」と言ふと大塚慶藏が横合から　慶藏「併し鳥金　金助「ヘイ　慶藏「其儀に就て一寸お前に頼みがあるがナ　金助「ヘイ〳〵　慶藏「敵は奥州二本松の戰爭に於て敵の爲に大變な手傷を負ひ、マア駕籠で京都に歸り、土州樣の屋敷で身の養生をして居ると云ふことだ、

金助「エ、成程　慶藏「我々は土州の屋敷へ猥りに入り込むことが出來ない、お前で見れば固より出入りの免されて居る身の上であるから、何うだ、一ッ調べて上げて呉れる譯には行くまいか、

金助「イヤ宜しうございます、そんなことなら幸ひ私が行く用事もございますれば、篤と調べて來ますでございます」と受合つた鳥金は其儘戸外に立ち出で、土州屋敷に入り込みまして、夫れ是れと懇意い者に出合ひ、種々と調べて見ましたが一向どうも譯が分りません、それが爲に空しく歸つて參りまして　金助「炭谷の御兄弟、大塚先生　慶藏「ア、御苦勞であつた、如何だつたナ

金助「一向どうも樣子が分りません　慶藏「左樣か　金助「其間にまた私が取調べを仕りまして、分れば直ぐに御沙汰に及びまするから兎に角今暫時の間お待ちあそばせ　七之「萬事宜しくお願ひ申す、敵さへ討てばまた御厄介に相成つた萬分の一の御恩報じをいたすでござらう　金助「どう仕りまして、恐れ入ります、左樣なら御免を蒙ります」とそのまゝ鳥金は歸つてしまひました、斯う云ふ譯でございますから、どうしても敵の手懸りがございませんそこで忠三郎を京都に殘して置きまして、七之丞は再び大阪へ歸り、播州姫路の藏屋敷、渡邊橋の鶴崎主馬の屋敷、卽ち自分が養子に這入つた家へ歸つて參りまして　七之「お父上、只今でございます　主馬「ア、婿殿、歸らしやつたか、其後は如何ぢやらうと心配をいたして居つたが、敵の方はどうぢや」と尋ねられて

七之丞も仕方がない　七之「お父上、誠に面目ない話でございます」が、實は敵は行く先きく〳〵で行方が分らぬやうになりまして、殘念ながら未だ得討たぬと云ふやうな始末柄でございます　主馬「左樣か、ア、氣の毒だが致方がない」と云ふ所へ妻のおまちも出て參りまして　まち「夫上樣、お歸りでございますか、長の御道中お疲勞でございませう、併し敵が討てぬからと云ふて、さう御心配をあそばすと却つてお身の毒でございまする、討てぬと云ふのはまた先方の惡運の盡きませぬところ、貴方の討つ時節が來らぬのでございますゆゑ、何事も時世時節とお斷念あそばして、末長くお待ちなさいまするやう」と連添ふ女房だけあつて、夫の得心の行くやうに挨拶を申します、ところへまた母親も出て參りまして、如彼だ斯うだと話を致します、斯くて暫らくの間是れなる自分の家に居りましたが、兎に角大阪には敵が居るかも知れぬ、是れは早く探索をせねば相成らぬと、七之

丞は又もや按摩と相成りました、此人は按摩が大層得手と見ねまして、また大阪の土地を按摩で以て敵の詮議に廻つて居ります、すると或日のことでございましたが、不圖した緣から土州樣の大阪の藏屋敷へ指して招かれ、お留守居番の渡邊源十郎と云ふ人の所へ參りました　源十「按摩ヨ　七之「ヘイ　源十「御苦勞ぢやが一ッ揉んで呉れ　七之「承知を仕りましてございます」と七之丞は渡邊源十郎の後方に廻り、ソロ〳〵と按摩を始めますると　源十「ア、汝は何と云ふ名前ぢや　七之「ヘイ吾市と申します　源十「ア、好い名前ぢやナ」と云ふので其日は充分按摩をいたし、相當の賃錢を貰つて歸つて來た、七之丞は喜びまして　七之「先づ第一に手懸りを得るのは土州の藏屋敷だ、あれはお留守居番のことだから、毎日一ッ入り込んで居る間には何か敵の樣子も分るであらう、好い手藝が出來たわい」と是れより毎日のやうに行つて按摩をいたして居ります、また渡邊源十郎も按摩の好きな人でご

ざいますから、此の七之丞の揉み樣が氣に入つたと見ねまして大居喜んで居ります、今日しも七之丞は出て參りました　七之「旦那樣、今日は……　源十「オ、吾市か、もう來て呉れる時刻であらうと思つて待つて居たわい、幸ひぢや、一ッ揉んで呉れ　七之「宜しうございます」と後方に廻つて肩を揉み始めましたが　七之「併し旦那樣、貴方は土州樣のお屋敷のお留守居番でございますか　源十「ア、如何にも左樣ぢや　七之「土州樣の御家來に山本羽太郎樣と云ふお方がございますナ　源十「ム、ある〳〵　七之「あのお方は伏見戰爭に於てエライ斯う日々の功名をあそばしましたので、以前は土州樣を浪人となつて居らつしやいました、ところが一時に歸參が叶ふたと云ふことを承はりましたが、なか〳〵どうも豪いお方でございますナ　源十「ム、そりやアあの御人は當時日本一の腕前と云はれて居るわい　七之「どうも土州樣には好いお武士が居られますナ、今は何所に居らつしやいます　源十「さうぢやナ

あの山本氏の行方は……　源十「話をすると長いに依つて、マア〳〵廢めにしやう　七之「左樣でございますか、ぢやアまた何うぞ御機嫌の好いときにでもお話を願ひます、私はお尋ね申さねばならぬと云ふことでもありませんが、人さんの評判を聞いて、一寸お尋ねを仕ましたやうな譯でございます　源十「左樣か、其方は山本氏の身の上を聞きたいのか　七之「エ、お話が長く相成りましては却つて御迷惑でございますから、もう結構でございます　源十「イヤ、とは云ふものゝ聽きたけりやア聽かして取らせやう　七之「左樣ではございまするが、もう宜しうございます　源十「イヤ〳〵拙者が一度聽かして遣らう」と斯う云ひましたが、人間と云ふものは妙なものでございます、何でも聽かして呉れと云へば言はぬ氣になりますが、もう宜いと云ふときにはまた聽かせる氣になります、是れはどうも人間の常でございまして　源十「ア、山本氏ならナ　七之「ヘイ旦那樣、もうお聽かせを願ふには及びません

源十「イヤ〳〵拙者も言ひ掛けたから、言はねば氣が惡い　七之「へイ　源十「實は慶應元年六月六日の夜京都松原の磧に於て、水戸の家來千二百石炭谷虎之助と云ふものを手に掛けて殺したさうだ　それが爲に其者の悴が何でも親の敵を討たねばならぬと云つて附け狙つて居る、其儀に就て土州の屋敷にも置かれぬと云ふので、實はもう戚山奥を傳ふて行つて居らつしやるのぢや　七之「ハ、ア左樣でございますか、山奥と云ふと何方でございます　源十「ナニ近來は斯う云ふやうに世の中が變つて來て、明治維新の御代となり、國々の政治も改正になるに就て、大名々々が深山の樹木などを殘らず伐つて資拂ふて居る、それに就て山本氏も土佐の高知へ參り、さうしてマア山奉行と云ふものを勤めて居るのぢや　七之「左樣でございますか、それは何うもはや誠に有難うございます　源十「イヤ決して人には言ふなよ、是りやア差支へのあることぢや　七之「エ、なか〳〵申しは致しません　源十「其方であ

るに依つて言つて聽かせるのぢや」と云ひましたが、一番惡いものに言ふたとは、人間凡夫の淺陋さ、渡邊源十郎は是れが其の山本を附け狙つて居る人物とは夢にも知りません、斯くて其日は七之丞も充分に按摩をして歸つて來た　七之「お父上　主馬「何ぢや　七之「天なるかな、時なるかな、いよ〳〵敵の所在が分りましたし　主馬「何所に居ります　七之「敵は土州の山奥に入り込んで、只今は山奉行をいたして居るさうでございます　主馬「さうか、それはどうも好いことを聞いて來た　七之「私は是れから京都に參りまして、大塚殿の許に舍弟も待つて居りますれば、彼れにも一應相談を仕りまして、いよ〳〵土佐の國に入り込み、敵討をいたして參りますから、兎に角お暇を頂戴仕りたうございます　主馬「アそりやア早速行くが宜しい、だが呉れ〳〵も賴んである通り首尾よく敵を討ちましたら是非一度此方へ歸つて來て呉れますやう　七之「それはもう立ち歸ります　主馬「水戸公がどれだけ御所

望にならうとも、もう娘も姙娠、殊に臨月に間近い身の上、飽くまで歸つて來て跡目を繼いで呉れねば相成らぬ、是れだけは呉れ〳〵もお前に頼むであらう　七之「如何にも承知を仕りました若し水戸樣からお暇が出ないと云ふことでございますれば、舍弟の忠三郎を私の名代といたし、水戸樣に御奉公をさせて置きまして、私だけは當家に立ち歸り、不束者ではございますが、跡目を繼がせて貰ふやうなことに致します　主馬「ア、よく申して呉れた、辱けない、其の精神を聽く上からはお前に渡す物がある、暫らく待つて呉れまするやう」と云ひながら鶴崎主馬は奥の室に這入り、箪笥の抽斗より取り出して來たのは洛陽信國の名劔、それを目の前に差し出しまして　主馬「是れはお前のお父さんが殺されたときに敵に奪られた品物である、いまお前は敵討に乘り込む際であるから、武士たる者は得物が肝腎である、之れを渡しまするに依つて、是れで以て立派に敵を討つて呉れる

やう　七之「斯は千萬辱けない、それでは一ッ拜借を仕ることに致しませう」と七之丞は刀を取り上げ、つく〳〵之れを打ち眺めまして　七之「ア、思ひ出せば父上が世に在るときに功名手柄をいたし、水戸の御殿より頂戴に及ばれた洛陽信國の名劔、之れを帶挾んで六月六日の夜祇園の宵山を御見物にお出であそばし、其晩人手に罹つて御最期を遂げられた、嘸かし今時分は草葉の蔭から殘念に思召して居らつしやるであらう、ア、お父上、此度私が乘り込めば屹度無念を晴らして參りまする、どうか迷はずと御成佛を下されまするやう」と口に言はねど心の中、ホロリと涙を溢しながら、身の準備に及び、洛陽信國の名劔も中身と附屬品とが別々になつて居りました、夫れをチャンと一ッにいたし、荷物の中に入れ、立派に拵へを致しまして　七之「然らばおまち、行つて參るぞョ」「夫上樣、男と云ふものは敷居を跨げば七人の敵があると云ふことでございまするゆゑ、隨分氣を

附けてお行であそばすやう、本懐を遂げられた上は一時も早くお歸りのほどを願ひます、臨月間近い身の上、妾も只管お歸りを待ちますることでございます　七之「ア、よく言つて呉れた、必ず歸つて來るに依つて身を大切にして居れよ、產は生死の境であるから」と女房にも得心をさせまして、七之丞は京都に歸り大塚の道場へ出て參りました　七之「大塚殿」　慶藏「イヤ是れは七之丞殿でございますか、何うでござるナ、敵の方は……」　七之「イヤ、不思議なところから敵の所在が分りました」　慶藏「それは重畳、何う方で……」　七之「土佐の高知の山奉行に行つて居るさうでござる、」

慶藏「ハヽア、左樣でござるか」　七之「是れから一ッ乘り込んで、必ずともに敵討をして來ませう、」　ア、コリヤ弟、喜べ、斯くの次第ぢや　忠三「お兄上、左樣でございますか、ぢやア是れから一ッ大塚殿に暇を告げ、御一ッ緒に參ることに仕りませう」と兄弟は周章込んで身の準備に及びまするど、大塚は之れを止めまして

慶藏「アイヤ御兄弟、お待ちあそばせ　七之「何か御用事でござるか」　慶藏「そのお心急きは御尤もなれども、土州と加賀の國だけは自分の國で以て何も彼も物が取れる、別に他國から何一ッ持ち込まなくつても年中立ち行く所である、だから他國と餘り往來をしない、隨つて他國の者は滅多に入れないことにいたして居るそれで鑑札切手でもなけりやア猥りに他國の者を國に入れますまい　七之「ア、成程　慶藏「依つて御身等がお行でになつても空しく引返すやうなことにならうかと存じます　七之「左樣でござるか、如何にも御尤もでござる、折角參つたは宜いが、他國の者は國へ入れぬと云はれた日には仕方がない、何とかして一ッ其國に入り込む手順はありますまいか　慶藏「サア何とか一ッ私も考へることにいたしませう」と云つて居る所へ鳥屋金助が出て參りまして　金助「ア、御兄弟、如何でございます、大塚先生……　慶藏「イヤ鳥金か、好い所へ來て呉れた、實は御兄弟の敵は土佐の國の

山奉行に行つて居ると云ふことだから、是れから御兄弟は土佐へ行かうと云はれるのだが、土州と加賀の國だけは自分の國で何も彼も物が取れるに依つて、他國から何一ッ持ち込まなくつても年中不自由がない、誠に重寶な國であるに依つて、平常滅多に他國の者を入れない、それで其國に入り込むには何か斯う手形がなければ可けない、其儀に就て困つて居るのぢやが、何とか一ッお前に工夫はあるまいか　金助「イヤ宜しうございます、ぢやア私が近々に其國へ這入れるやうにお取持を仕りますからマアお急ぎなさるには及びません、御兄弟、大塚先生の道場で四五日足を留めて居らつしやい、其間にはまた私が何とか一ッ手都合を附けて參ることに致しませう　七之「何分頼むであらう、金助「宜しうございます」と流石は鳥金の親方、之れを引受けまして、プイと戸外に立ち出でました、斯くて鳥金はそれより彼方此方をブラ〳〵と廻り、何か好い手續きはないか、御兄弟が

土佐の國に入り込めるやうな工夫はなからうかと、毎日のやうに洛中洛外を歩いて居りましたが、或日のことでございます、東高瀬まで出て來ると、此所に野口屋惣兵衛と云ふ材木屋がございまして、表に材木が澤山積んである、其の材木に殘らず土佐と云ふ刻印が捺してある、沈と立ち停まり、之れを眺めた鳥金が、生唾呑み込んで　金助「ヨシ、是れがあるを幸ひに御兄弟が土佐の國へ入り込める手順を圖つて遣らう」と是れから此の鳥金が巧く野口屋惣兵衛を瞞着かして、炭谷兄弟を土佐の國に入り込ませまするとと云ふの一段、そはまた次席に伺ひます。

第九席

鳥屋金助は野口屋惣兵衛の戸外に立つて沈と小首を傾け、思案をいたして居りましたが、やがて表から這入つて參りまして、金助「旦那、御免下さい　惣兵「オ、誰方かと思ひますれば、鳥屋の

親方ではございませんか、マア此方へ……　金助「ヘイ有難うございます、一寸異なことをお尋ねします　惣兵「ヘイ〳〵　金助「私も破落戸を集めて稼業をして居りますが、私の若い奴で、水戸の生れの人間で、兄弟揃つて私の家に居る者があるのです　惣兵「ハヽア成程　金助「ところがもう道樂者は嫌になつた、堅氣な所に奉公をしたい、親方、頼みますと斯う云ふのです、私も道樂者は嫌になつたと云ふやうな者を家に置いた所で仕樣がない、と云つて一旦親分乾兒の緣を組んだものですから、放つて置く譯にも行かぬ、何所か好い口があつたら世話をして遣りたいと思つてるのですが、人間は隨分正直で、道樂者の堅氣になつた奴もまた一層物が堅い、其邊は受合つて置きます、御當家で一ッ使つて遣つて貰ふことは出來ますまいか　惣兵「サア親方のお頼みでございますれば、お顏を潰す譯には行きません、それでは一ッ來て貰ふことに仕ませう、　金助「名前は……　惣兵「左樣でございますか、イヤ宜しい、お名前は……　金助「何方も三十にはならぬ身體です　惣兵「それは丁度宜しい、ちやアマア何うか一ッ來て貰つて下さい　金助「それは有難い、善は急げぢや、直ぐに連れて來ませう」と好い工合に口を利いて鳥屋金助は大塚の宅へ歸つて參り　金助「御兄弟　七之「如何でございたか　金助「好い手續きを拵へて來ました　七之「そりやアどうも有難い　金助「東高瀨の野口屋惣兵衛と云ふ材木屋、是れは大分に土佐から材木も引いて居るらしい鹽梅です、此家へお前さん達を一ッ奉公に入れます、で月に一度くらゐづゝは旦那が土佐へ行く樣子だから、其供をして一ッ乘り込むことにしたら如何でございます　七之「辱けない、何分宜しくお頼み申します、　金助「名前は七平と金八と云ふことにして置きましたヨ　七之「イヤ心得ましてございます……大塚殿、お聽きの通りの始末だ、ちやア是れから一ッ行つて參ります　慶藤「隨分御身を大切に……

云ふ二人でございます　惣兵「左樣でございますか、イヤ宜しい、お年齡は……　金助「何方も三十にはならぬ身體です　惣兵「それは丁度宜しい、ちやアマア何うか一ッ來て貰つて下さい　金助「それは有難い、善は急げぢや、直ぐに連れて來ませう」と好い工合に口を利いて鳥屋金助は大塚の宅へ歸つて參り　金助「御兄弟　七之「如何でございたか　金助「好い手續きを拵へて來ました　七之「そりやアどうも有難い　金助「東高瀨の野口屋惣兵衛と云ふ材木屋、是れは大分に土佐から材木も引いて居るらしい鹽梅です、此家へお前さん達を一ッ奉公に入れます、で月に一度くらゐづゝは旦那が土佐へ行く樣子だから、其供をして一ッ乘り込むことにしたら如何でございます　七之「辱けない、何分宜しくお頼み申します、　金助「名前は七平と金八と云ふことにして置きましたヨ　七之「イヤ心得ましてございます……大塚殿、お聽きの通りの始末だ、ちやア是れから一ッ行つて參ります　慶藤「隨分御身を大切に……

七之「有難うございます、首尾よく敵が討てましたらまた歸つて參りまして御恩送りを致しませう、だが人間は老少不定は常のこと、是れがお別れになるかも相分らぬ、兎に角時候のお厭ひあつて、どうか御健勝にお暮しを願ひます　慶藏「是れはどうも痛み入つたる御挨拶、敵討に出られまする貴君方、死ぬると云ふやうなことは夢にも思はぬやうにしてお行で下さい　七之「有難うございます」と早速別れを告げましたが、併し其儘の裝束では可けませぬから、武士の裝束は大塚方に預かつてしまつて、木綿着物に三尺帶、頭の恰好を變へまして、鳥屋金助に伴れられ早速出て來ましたのは野口屋でございます　金助「旦那、御免下さい　惣兵「イヤ親方ですか　金助「先刻お願ひしましたのは此の二人でございます、どうかマア宜しくお頼み申します……オイ兄弟、七之「ヘイ　金助「乃公がお前方の身の上を引受けて居るのだ、宜いか、惡い事をしちやア可かぬ、正直に勤めて呉れヨ　七之「承知を

致しました　金助「ちやアお頼み申します……、兩人共確かり遣つて呉れヨ」と金助はプイと歸つてしまひました、是れから兄弟は此家に於て働くことになりましたが、何でも主人の氣に入らねば相成らぬと云ふの心算でございまして、痒い所へ手が屆くやうに働きます、だから僅かの日數の間にいよ〳〵主人の氣に入られる、のみならず番頭衆の氣に入られる、下女達の氣に入られる、此の兄弟を嫌ふ者は更にないと云ふの始末、夜が明けたら日が暮るまで、七平々々、金八々々と云つて皆の者から好かれて居ります、然るに主人の惣兵衛は月に一度くらゐづゝ土佐に行くかと思つて居ると、一向出掛けて行く樣子がない　七之「何時お行でになるのであらうか、是非共お供をせねばならぬ」と思つて居りますと、或晩のことでございます　惣兵「番頭どんや」と云はれて久助と云ふ番頭が主人の前に進み　久助「旦那樣、何か御用ですか　惣兵「一度土佐に行つて來ねばならぬ　久助「ヘイ〳〵、

惣兵「俺は行きたいのぢやが一寸用向があつて行くことが出來ないい、氣の毒ながら、お前明日から一ッ俺の代りに行つて來てはいい　久助「承知を仕りました　惣兵「ぢやア其の準備をしなさい　久助「宜しうございます」と云つて久助は惣兵衛の前を下りましたが、之れを此方より聽いて居りました兄弟の者は、何も彼も用事を濟まして置き、主人惣兵衛の前に出て兩手を突かへ、

七平「一寸旦那樣に申し上げます　惣兵「ア、何ぢや　七平「番頭さんが明日から土佐へお行になるのでございますか　惣兵「ア、俺の代りに遣らうと思うて居るのぢや　七平「私も土佐には伯母がございまして、一度面會に行きたいのでございますが、番頭さんと一緒に遣つて貰ふ譯には行きますまいか　惣兵「サアさう云ふことなら遣つて上げたいが、併しお前方で見ると家の間に合ふし、殊に二人とも出て呉れると、忽ち家が困るから、マア此度は辛抱をして、また機會を見て行くことにしなさい　七平「左樣でございま

すか、併しどうかして遣つて貰ふ譯には行きませんか　惣兵「此度は迚もお前方二人を遣ることは出來ない、それでは家が手廻らぬ　七平「へイ……平常餘り能く働くのも斯う云ふときには善し惡しぢやわい」と思ひましたが仕方がない　七平「そんなら私は一寸一度烏屋の親方に用事がございます、どうか一寸遣つてお呉んなさい　惣兵「ア、行つて來るが宜い、早く歸つてお出でヨ　七平「承知を仕りましてございます」と其儘兄弟は烏屋金助の所へ出て來まして　七平「ア、親方　金助「イヤ御兄弟ですか　七平「親方に一ッお願があつて來ました　金助「どんな御用事ですナ　七平「野口屋の番頭が明日から土佐に參ります、それで私共も一緒に遣つて呉れと云ひましたが、いまお前達が行つて呉れては家が不都合だと云つて、どうしても遣つて呉れません、併し我々は土州に乘り込まねば敵が討てない、何とか一ッ番頭と一緒に土佐へ乘り込めるやうに、お骨折りに與かる譯には行きませんか、是ればかり

が兄弟の折入つてのお願ひでござる　金助「イヤ宜しい、それぢやアー ッ私が何とか工夫を附けませう、マア貴方は默つて歸つてお寢みなさい、私の家に泊られても宜いが、さうしてはまた先方に感着かれては可けないから　七平「宜しうございます」と其儘兄弟は歸つて來まして、

するとと雨がショボ〳〵と降り出し、翌日も雨天、それが爲に今日の出立は止しにして、マア翌日に仕やうと云ふことに相成りました、それが幸ひとなり、烏屋金助が出て來ましたのは七條新地でございます、茲に宮川町鳥宗亭に勤めて居りまする熊江と云ふ藝妓の妹分に小種と云ふ者がありますが、是れが野口屋の園ひ妾となつて居ります、烏屋の親方は至つて心易い　金助「御免

小種「ハイ、オヤマア親方でございますか、マアどうぞ此方へ……　金助「今日は旦那は來て居らないか　小種「まだ見ねません　金助「それは幸ひぢや、一寸お前に頼みがあつて出て來た　小種「どう云ふお頼みでございます　金助「旦那が今にも來たら宜いが、若し來ないやうなことであつたら、お前の方から手紙を持つて是非今晩來て呉れと云つて、旦那をお前の所へ呼び寄せて呉れ、と云ふのは乃公が敵を討たして遣らうと思つて居る水戸の御藩の炭谷七之丞、忠三郎と云ふ御兄弟、之れに乃公は力を入れて世話をして居るのぢや　小種「ハイ〳〵　金助「ところが土佐の國に乘り込んだら敵が討てるのだが、どうも鑑札か切手がなければ乘り込めないから、野口屋の方に奉公をさせて、旦那が土佐行のときには一緒に遣らうと、實ア工夫を附けて居るのだ、ところでいよいよ旦那の代りに番頭が行くと云ふことになつて居る、けれども伴れて行けぬと云ふので兄弟が困つて居るのぢや、誠にお前に濟まないが、旦那が來たら巧く持ち込んで兄弟の者を土佐へ伴れて行くやう、お前の方から話をして呉れることは出來なからうか　小種「宜しうございます、あのお方のことなら姉からも聞

いて居りまするゆゑ、飽くまでも一ッお取持ちを仕りませう、

金助「それは有難い、必ず人に言つては可けないよ　小種「承知を致しました」と云ふので、鳥屋金助は其儘歸つて來た、後に小種は手紙を書いて出さうと思つて居る所へ、幸ひ野口屋惣兵衛がやつて參り　惣兵「ア、小種や、居るかい　小種「オヤ野口屋の旦那樣でございますか、此頃はお顏が見ねぬので、いまお手紙を出してお尋ね仕やうと、斯うして卷紙と筆を持ちましたところでございます　惣兵「ア、さうかい、俺も久しう來ないものだに依つて賃ア今日は出て來たやうな譯ぢや　小種「マア、どうぞ此方へ……」と云ふので、是れから酒肴を調へて、世話になつて居る旦那のことでございますから、程好く待遇を仕ります、右左する間に日が暮れました、暫らく彼れ是れと話をして、やがて床を敷いて寢むことに相成ります、何ぢや　小種「貴方のお宅にあの七平さんと金八さんと云ふお兄

弟の者が勤めて居らつしやいますか　惣兵「ア、なか〳〵彼者等はよく動くので、マア家の大切な本公人ぢや　小種「その兄弟が妾の爲には從兄弟でございます　惣兵「ア、お前の從兄弟かい　小種「左樣でございます、誠にどうも御厄介樣でございます　惣兵「そんなことは俺も今まで知らなかつた　小種「ところで土佐に一人の伯母がございます、此度番頭さんがお行でになるに就て一度一緒に行きたいが、旦那樣がお暇を下さらぬに依つて、誠に殘念に思つて居る、なれども伯母は年を老つて居ることだから、何日何時のことかも分らぬ、息ある間にどうか一度會ひたい、幸ひに序だから何うでも斯うでもお供をして行きたい、一ッお願ひをして呉れぬかと妾の所へ來て賴んで居りましたやうな次第でございます、旦那樣、どうか一ッ番頭さんに伴れさせて遣つて貰ふ譯には行きませんか、妾は折入つてお願ひを仕ります、併しどうしてもそれがならぬと仰しやる樣なことでござりますれば

いまゝでは御厄介に相成りました、けれども最う縁は是れまでとお断念下さいまし　惣兵「さうお前のやうに短氣を出して呉れては困るぢやないか、併し俺の方は彼等兩人を出すと忽ち家が不自由だが、お前がさう云つて頼むとあれば仕樣がない、ぢやアまた、翌日は惣兵衛も早くより我家に歸りまして　惣兵「ア、コレ七平や、金八や　本「ヘイ　惣兵「お前方は番頭と是非一緒に土佐へ行きたいさうだから、兎に角久助に伴れさせて遣らう、精々早く歸つて來て呉れ　七平「大きにどうも有難う樣でございます　惣兵「番頭や、斯う云ふ譯だから、お前が兩人を伴れて行つて、土佐に伯母さんがあると云ふから、一ッ會はせて遣つて呉れ　久助「承知を致しましてございます　七平「ぢやア一ッ番頭さん、お頼み申します　久助「ヨシ〳〵、マア俺ア是れから準備をして出るのぢやが

お前は何うぢや　七平「一寸私等も準備をして參りますから、暫時の間お待ち下さいまするやう」と早速兄弟は野口屋を出まして、急き歸つて來たのは大塚の道場　七平「慶藏殿　慶藏「如何でござる、七平「鳥屋の親方のお蔭で好い手蔓が出來ました、兎に角是れから行つて敵を討つて參りますが、何しろ敵討に肝腎要るのは大小刀、それを剝出して持つて行く譯にも行かぬ、之れを何とかして持つて行く工夫はありますまいか　慶藏「菰にでも包んで持つてお行でなさい　七平「成程……」是れから兄弟の大小刀をキリ〳〵と菰に包み、繩で搦んでしまつて、外面からは少しも見ねないやうにし、之れを小脇に抱込んで、兄弟は野口屋へ歸つて參り　七平「番頭さん、お待たせを仕りましてございます　久助「ム、ア、大變な荷物ぢやナ、長たらしいもので、何ぢや　七平「エ、是れは伯母の所への土産でございます　久助「フーム、何の土産ぢや　七平「自然薯でございます　久助「土佐から此方へ自然薯を土産に持

つて來るのに、此方から土佐へ自然薯を土産に持つて行くと云いのは訝しいぢやないか　七平「けれども京都の自然薯は土佐の自然薯よりも美味いさうでございます　久助「冗談云つては可けない　七平「兎にも角にも伯母の所への土産でございまする」と其邊は好い加減に自然薯と見せかけ、其實は大小刀の菰包にしたものを連尺に背負ひ、番頭久助に伴れられまして、炭谷兄弟は都の空を後にいたし、ドン〳〵出て參りましたのは、道中はお預りを仕りまして、土佐の國の境でございます、すると其の入口に御番所がございまして、旅人の方から切手と云ふものを見せます、固より野口屋は毎度土佐へ參るものですから、チヤンと土佐の役所へ願ひまして、其の切手と云ふものが貰つてある、其所で其の切手を見せまする、役人は之れを檢べ了りまして、役人「宜しい、左樣なら入り込みまするやう」と云はれて三人の者は其儘土佐の國に這入りました、兄弟の者は喜びまして七平「

先づ是れで安心、ア、辱けない」と到頭須崎山と云ふ山の麓まで出て參りますと、此所に神崎村と云ひまして、以前は十七八軒しかなかつた、なれども山の木を伐つて諸國に出しますから段々開けて來て、いまでは一寸三十軒ばかりになつて居ります、この村に高知屋善兵衛と云ふ家がある、是れが野口屋の定宿でございまして　久助「御亭主、御免下さい　亭主「オヤ野口屋の御番頭樣でございますか　久助「此度は旦那の代りに出て來ました　亭主「御苦勞樣でございます……お連の衆は……　久助「是れは家の若い衆で、此の高知在に伯母さんがあると云ふので、一緒に伴れて來ました　亭主「左樣でございますか、サア誰方もお上り下さいまするやう……お竹や、洗足の水を汲んで來てお上げ申せ　お竹「宜しうございます」と十八九歳になりまする少しく嫖緻の美い女が水を汲んで參りまして、襷を脱し、挨拶をいたし　お竹「サアお足をお洗ひ下さいまし」と云ふので三人の者は足を洗つてズイと

座敷に通ります、左右する間に女は煙草盆に火の一ッも入れて持つて參り、お茶の一服も煎てまして　お竹「誠に出流れたお茶ではございますが一服召し飲つて下さいまし　久助「ちやァ貰ばれませう」と茶を飲んで居りますと　お竹「お風呂が沸きました、どうかお浴し下さいまするやう　久助「それでは一ッ疲れ休めに這入ることに致しませう……ア、お前方は何うぢや　七平「番頭さん、マア貴方から……　久助「ぢやア俺は先きに御免蒙つて這入ることに仕やう」と其儘番頭久助は先きに湯に這入り、暫らく經つと出て來て　久助「サア七平に金八、何方からでも宜いから、マア風呂に這入るが宜い　七平「有難うございます」と兄弟は交る〳〵湯に這入り、上つて來ると、チヤンと膳部の準備がしてある　お竹「ハイお客樣、何もございませんがお召し上り下さいまし　久助「是れは御馳走だナ」と云ひました、尤も山奥でございますから別に好下物と云つてはございませぬが、宿屋のことゝて何一ッでも

体裁宜くいたしてございます、そこで三人は御飯を濟ませ、四方八方の物語りをいたし、遂に其晩は眠みました、翌日に相成りまするとと七之丞は人より早く起き出で、ドシ〳〵と山に登つて見る、すると立派な新建の門附の屋敷が一軒ある、玄關の所には定紋の附いた幔幕が張つてあるから、沈と之れを眺めた七之丞が　七之「フーム……是れは當時敵が住居をいたして居る所かも知れぬ、此の幕の定紋は……さては敵の定紋であるか、おのれ今に何うするか、覺ゑて居れよ」とグッとばかりに定紋を睨附けましたが、併し門の内へ這入らうと云つても用事がなければ這入れません、其邊に辻路々々として　七之「若しや此所に敵が居れば目に留まることもあるであらう」と沈と眺めて居りましたが、一向どうも見當りません、仕方がない、宿屋へ歸つて來ると、漸く皆の人が起きて御飯を喰べやうとして居る所でございます　久助「ア、七平、お前は朝ッぱらから何所へ行つて居た、

七平「ヘイ私は伯母の所へ行つて居りました　久助「さうかい、伯母さんは壯健だつたか　七平「ヘイ壯健で居らつしやいました　久助「ア、そりやア結構々々、マア御飯を喰べなさい　七平「ヘイ伯母の所でも最う朝飯が出來たに依つて喰べて行けと云ひましたが、貴君方に默つて出ましたから、御心配を懸けては濟まぬと思ひ、變ばれないで歸つて來ました、ちやア頂戴致します　久助「ア、喰べるが宜い」と早速御飯を喰べることに相成りましたが、其の日番頭の久助は山へ入り込みまして、夫れ是れと材木のことに就て掛合ひもしたが、餘り其の掛合ひ先が多いので、其の日中には用事が濟まない、漸う日の暮に宿屋へ歸つて來た　七平「番頭さん、御苦勞樣でございましたもう御用が濟みましてございますか　久助「イヤなか〳〵まだ一日二日は用事が濟まない、此度は大分に用事が多いので……　七平「ア、左樣でございますか、それでは御飯を喰べて寢みませう、

久助「ア、大分疲れた、早く寢むことに仕やう」と遂に御飯を喰べて寢みます、翌日になると番頭はまた山へ指して參ります、七之丞は熟々考へまして　七之「何でもこりやア敵の屋敷へ入り込んで篤と動靜を窺はなくちやアならない」と斯う思ひましたに就て、またぞろ敵の屋敷と目星を着けた以前の家の門前に參り彼方此方を迂路々々して居ります、すると年齡七十ばかりの老人が玄關の障子を開け、沈と外面の方を眺めて居りましたが、

老人「コリヤ〳〵　七平「ヘイ　老人「汝は何者ぢや、左樣な所に迂路々々いたして居るのは……　七平「ヘイ私は按摩でございます　老人「ハ、ア按摩……ア、左樣か、何用あつてそんな所に徘徊いて居る、

七平「ヘイ、萬一按摩の御用でもありはせぬかと思て居りますやうなことでございます　老人「左樣か、幸ひ拙者は老人で肩の凝る性分であるから、それでは此方へ這入つて暫らく揉んで呉れるやう　平七「どうも有難う樣でございます」と聞いた七之丞は心は

中に　七之「サア占めた、是れから一ッ當家に入り込んで、おのれ敵討をして遣らねば相成らぬ」とそのまゝ内方へ入り込みます　老人「サア此所で按摩をいたして呉れ」と勝手許へ指して連れ込み、御隠居は火鉢の側にドンと座りました、其の後方に廻つた七之の丞がソロ〳〵と肩のところを揉み始めましたが、其間と雖も少しも油断がございません、敵は何うして居るであらうと、沈と八方に眼を配つて居ります、斯くて半時ばかりも經ちまする、と　老人「アヽ快い工合になつた、もう宜いわい　七之「左様でございますか、それでは此のくらゐにして置きませう　老人「賃錢は幾らぢや　七之「ヘイ、私はもう按摩は新米でございますから、幾らなどゝ云つて、値を決めて揉むやうな按摩ではございません、近來此方へ出て參りました者で、また御贔負に與りたうございますから、お序に一緒にお貰ひ申しますでございます　老人「イヤさう言はないで幾らなら幾らと言つて呉れ　七之「イエもう結

構でございます、一度幾らと云つて貰ふやうな按摩ではございません、重ねて伺ひますゆゑ、またお志があれば幾らかお貰ひ致しませう」と其日は七之の丞もブイと宿屋へ歸つて參りました　久助「アヽお前は何所へ行つて居た　七平「ヘイ、伯母の所へ行つて話をして居りました　久助「アヽさうか、いよ〳〵もう用が濟んだに依つて、俺は明日歸ることにする、お前等も一緒に歸らねばならないぞ、もう一度伯母の所へ別れに行つて來ては何うぢや　七平「左様でございますか、番頭さん、一寸貴方にお話がございます　久助「ムヽどんな話ぢや　七平「エヽ外ぢやアございませぬが、當家の下女にお竹と云ふ者がございませう　久助「ムヽある〳〵　七平「あの女が貴方に大變心がある鹽梅でございますヨ、私がお取持ちを致しますから、もう暫らく御逗留あそばしてお樂しみになりましては何うでございます　久助「ハヽ、冗談を云つて呉れるな、そんな馬鹿なことがあるか　七平「イ

エ本當に心のある樣子でございます。もう一日二日御逗留あそばしまするやう」とうまく持掛けますれば、番頭は至つて女好きでございますから　久助「さうか、そんならもう一日逗留をしやう」と茲に番頭は碌でもないことに引掛つてまた一日逗留をした、すると七之丞がうまく誤魔化すものでございますから、また一日逗留をする、ッヒ三日四日と要らぬ日を逗留してしまひました、其間に到頭七之丞が首尾よく取持ちをしたものでございますから、番頭も暇さへあれば下女のお竹を側に引附け、ホク〳〵ものでを喜んで居ります、だがさう何日までも居る譯には參りません　久助「ア、七平や、金八や　七平「ヘイ　久助「さう何日まで も此所には居れぬに依て、兎に角明日は京都へ歸らう　七平「左樣でございますか　久助「お前方も一緒に歸れよ　七平「ヘイ、ぢやア連れて歸つて貰ひますでございます」と其晩は寢ましたが、翌朝は番頭が早くから起きて　久助「ア、準備をせよ　七平「宜しうございます」と云ふと、番頭はチャンと準備を致しまして　久助「サア行かう　七平「ヘイ、番頭さん、併し一寸伯母の所へ兄弟揃うて暇乞ひに行つて參ります、番頭さんは一足先きにお行で下さい、私は後から追ッ着きまする　久助「ぢやア此所で待つて居らうか、

七平「ヘイ、もう直ぐでございますから、どうか一足先きにお行で下さいまし　久助「そんならそろ〳〵先きに行くぞ、宜いかい、後から來て呉れるやうに　七平「畏りましてございます」とそのまゝ番頭は騙されて先きに出掛けました、兄弟の者は心の中に、

七之「マア邪魔になる番頭は如彼して先きに歸してしまつた、是れからおのれ敵の屋敷に入込んで一ッ取調べなければならぬ」と伯母の所へ行くと言つて宿屋を立ち出でましたが、暫らく經ちますると、兄弟が宿屋へ歸つて來た、家内の者は驚いて　卒主「ア、貴君方は御番頭さんと一緒にお歸りではございませんか、

七之「エ、歸らうと思ひましたが、伯母が他所に行つて不在だか

ら、挨拶に行つたところで話が出來ない、併しもう今に歸つて來るぢやらうと思つて待つて居つたが、到頭歸つて來ない、伯母に暇乞ひをせぬでは歸られない、番頭さんには餘程道も遲れてしまつたに依つて、もう一夜お前の所で厄介になり、明日は緩り伯母に暇乞ひをして歸らうと云ふ了簡ぢや　亭主「左樣でございますか、ぢやアまたお泊り下さいまするやう」　と其夜は兄弟ともまた當家に泊りました、さて翌日に相成りますと七之丞は弟を宿に殘して置きまして、自分はたゞ一人、右の敵の屋敷と思ふ所へ出て參りました　七之「御隱居さん、按摩でございます、毎度御最負に有難うございます　老人「オ、來て呉れたか、昨日は其方の顔が見ねなかつたから待つて居つた所ぢや、サア一ツ揉んで呉れ　七之「宜しうございます」　とまたもや臺所に上り、按摩を始めまするとと　老人「併し汝は何所ぢや　七之「ヘイ、私は京都でございます　老人「ア、さうかい、京都と云やア一天萬乘の大君樣の

お膝下ぢやナ　七之「左樣でございます　老人「好い所ぢや、京都は人間がギャツと生れると、どんな者でも五位の位を持つて生れると云ふナ　七之「恐れ入ります、併し御隱居さん、御當家には君旦那と云ふのがないのでございますか　老人「ア、悴はあるわい　七之「一向お目に掛りませんが、此頃は何うして居らつしやいます、　老人「材木のことは就て江戸に行つて居るわい　七之「左樣でございますか、お名前は何と仰しやいます　老人「名前は山本羽太郎と申して、元土州の藩、兎に角日本一とまで云はれた腕前の者ぢや　七之「それはねらいお方でございますナ、あの伏見の戰爭に、山本さんと云ふお方がねらい何うも日々功名をあそばしたと云ふことでございますが、若しやそれは貴方樣の若旦那ではございませんか　老人「ム、正しく拙者の悴ぢや、汝も聞いて居るかい、　七之「ヘイ承はつて居ります、それでは御當家の若旦那でございましたか　老人「左樣ぢや　七之「どうもはや恐れ入りましてございま

す、江戸の何所に行つて居らつしやいます　老人「ア、築地の青物町一丁目の下屋敷に罷り在り、材木のことに關つて居るわい、

七之「左樣でございますか、私も江戸の築地邊に一人の伯母がございますから、其の伯母に一度會ひたいと思ふので、近々の間に行つて來やうと思ひます　老人「ア、汝も江戸に伯母があるかい

七之「ヘイ大体私は京都に育つた者でございますが、生れ故郷は江戸でございます、と云ふのは幼いときに親に連れられ、京都に出て來まして、マア成長くなり、親にも京都で死に別れ、それから野口屋と云ふ材木屋の世話になつて居りましたが、是れも面白くないので、實はマア勝手に按摩をして日を送つて居るやうな始末でございます　老人「さうかい、それぢやア、お前いよいよ江戸へ行くのぢやナ　七之「ヘイ參りますでございます　老人「そんなら拙者も悴の不在中に大分に用が出來て居る、未だ歸つて來ないものであるから、一度誰にか頼んで手紙を出さう〳〵と思

うて居る所ぢや、如何ぢや、氣の毒ながら汝が一ッ手紙を事托つては呉れまいか　七之「ヘイ、どうせ江戸へ參ることでございますから、手紙のお事托りくらゐは致しまする　老人「ぢやア今晩認めて置くからナ、明日でも明後日でも出立するときに一寸取りに來て呉れ　七之「承知を致しました」とサア七之丞も其日は暇を致しまして、宿へ歸つて來ました　七之「コリヤ弟　忠三「お兄上、

七之「いよ〳〵敵が討てるぞ　忠三「分りましたか　七之「屋敷には居らないが、江戸に行つて居るわい　忠三「左樣でございますか　七之「斯う〳〵云ふ手續きを附けて、敵の所へ手紙を持つて行つて遣るのぢや、其方も喜べい　忠三「有難うございます」と云ふので兄弟は其晩宿の勘定を濟ませまして、翌日此家を出立に及び、七之丞一人で右の屋敷へ出て來た　七之「御隱居さん、是れから江戸へ參りますが、お手紙は出來て居りますか　老人「ア、早いナ　七之「ヘイ、會ひたいと思ひ掛けましたら無暗に早く會ひたくつて堪り

ません、三里や五里の所とは違ひまして、何分土佐から江戸でございますから、大変に里程がございまして、先方へ行くまでに何れだけ日数が掛るか分りません、一時も早う乗り込んで、成るべくなら伯母共が存命の間に會ひたいと思ひます　老人「さうかい、イヤそりやア老人と云ふものは何日何時のことが分らぬに依つて、お前がさう云ふのも尤もぢや、それでは氣の毒ながら、此の手紙を忰に渡して呉れヨ　七之「心得ましてございます、

老人「築地の青物町一丁目ぢや　七之「分りました」と馬鹿な親もあるもので、忰の首を狙つて居る者とは夢にも知らず、事懇ろに忰羽太郎の居る所を教へ、一通の手紙を渡しました、天命の盡と云ふものは已むを得ません、兄弟の者は喜び勇みまして、早速土佐の高知在を後にいたし、段々と東路を指して乗り込みましたが、是れよりいよ〳〵江戸表筋違御門外に於て仇討本懐を遂げまするの條、後一席のお樂しみといたして置きます。

第十席

さて引續きに相成りました明治曾我のお話も追々と演み了りまして、最早末の一段と相成つて居ります、茲に水戸の浪人炭谷七之丞同じく舍弟忠三郎の兩人は土州に乗り込みまして、山本羽太郎の父親に出會ひ、此者より手紙を貰ひ、土州を後に致しまして、道中無事に江戸表へ出て參りました、ところが茲に江戸の鐵砲洲と云ふ所に以前は水戸の家來でありましたが、いまは浪人をいたし、易者を渡世に及んで居りまする唐本東仙と云ふ者がございます、之れに一度頼寄らうと、兄弟は捜ね索ねて出て參り、見ると戸外には易の看板が掲つて居ります、相當居宅も立派にいたしてある、ガラリと戸を開けまして　七之「御免下さい」と云ふと、表の室の火鉢の側に座り、片手に煙管を持つて、スパリ〳〵と煙草を喫うて居りましたのは年齢四十五六の

唐本東仙　東仙「お出でなさい、貴方は何方からでございます　七之「エ、私は水戸の藩炭谷虎之助の遺子七之丞に忠三郎と云ふ兄弟久しくお目に掛りませんが、貴方も御壯健で……　東仙「ア、左様でござるか、成程よくお見受け申せば炭谷の御兄弟、先づ貴君方もお壯健で結構でございます、併し貴方はまた變つた御風体で、當時何うして居らつしやる」と言はれて兄弟は涙を溢し、

七之「先づ一通り聽いて下さい　東仙「此方へお上り下さるやう　七之「左様なら御免を蒙ります」と座敷に上つて其所に座り　七之「實は私の父は過ぐる慶應元年六月六日の夜京都の松原磧に於て、土州の浪人山本羽太郎と云ふ者に討たれましてございます、それが爲に我々は御殿よりお暇を頂戴に及び、いろ〳〵艱難辛苦をいたすと雖も、未だ敵を討つこと能はず、困難をいたして居りまする譯でございます、實に何うもお氣の毒な次第でございます　東仙「左様でございますか、私も貴方のお父様には毎度お引

立に預つたこともございますが、それとは今まで存じませんだ、ア、ざうもお悼はしい次第で……　七之「ところが當度敵は此の江戸の築地の下屋敷に居る様子、それを討ちたいと思つて實は我々兄弟が出て參りました、だが敵手は日本一の達人だから、我々兄弟で速かに討てるものであらうか、但しはまた討てないものであらうか、一寸一ッ占に預りたい」と云はれて唐本東仙は　東仙「イヤ左様な譯なら一應判斷を仕りませう」と其場を立ち上り、片脇に机が置いてある、其上には算木筮竹、或は易の書物が積み重ねてございます、其前に座つて筮竹を取り、何だか口の中で文言を唱へながら、パチ〳〵と筮竹を分け、卦を立て、算木を反し、やがて筮竹を下に置いて、易の書物を取り算木の表面と易の書物の表面とを對照し、沈と考へて居りましたが、やゝ暫らく致しまするとと、書物を下に置いて　東仙「御兄弟天時來つて當度敵は討てると私は只今判斷を仕まする、斯う云

ふ卦が出ました　七之「千萬辱けなうござる　東仙「何は兎もあれ一兩日の間には討てますまいが、マア私の所で御緩りと一ッ御都合の附くまでお遊びを願ひます　七之「有難うござる、ではお言葉に附入るやうですが、舍弟の忠三郎だけはどうか一兩日御厄介のほどをお頼み申します　東仙「如何にも承知を仕りました　七之「忠三郎や　忠三「ハイ　七之「お前は御當家で兩三日御厄介になりますやう我は是れより敵の許に入り込んで、手紙を渡し、うまく隙を考へて討つ手順を圖り、さらばと云ふときにはお前の方へ沙汰をいたすであらう　忠三「お兄上、御苦勞でございますが宜しくお頼み申します」と云ふので、是れから七之丞は唐本にも舍弟にも別れを告げ、鐵砲洲を後にいたし、ドシ〳〵と出て來ましたのは築地のお下屋敷、尤も此所は土佐の本國から材木を伐つて出すに就て、山奉行のことでございますから、遽に出張所を設けて居る所でございます、此所へ出て參りまして　七之「エ、御免下

さい」と云ふと一人の男が出まして　七之「私は土佐の高知の山なる、御當家の旦那の親御からお手紙を持つて來ました者でございます、一寸旦那樣にさうお傳言のほどを願ひます　男「それでは暫らくお待ちなさい」と取次は奥へ這入りました、後に殘つた七之丞は心の中に思ふやう　七之「アヽ敵には京都の松原磯に於て初めて出會ひ、さうして討ち損じたのちやが、其際は夜分であつたに依つて、我顏を確かに見知つては居るまい、けれども萬一お前は炭谷の七之丞ではないかと看破られたときには討つことが出來ない、何う云ふ工合になるものか、と沈と思案をいたして居りますと、やがて取次の者が出て參りまして　取次「マア兎に角此方へお通りなさい　七之「左樣なれば御免を蒙ります」と早速座敷へ取次と諸共に通ります、すると立派な座敷で、敵の山本羽太郎は悠然と構へ込み、火鉢の上に手を出して居ります、どうして日本一の勇士と呼ばれた